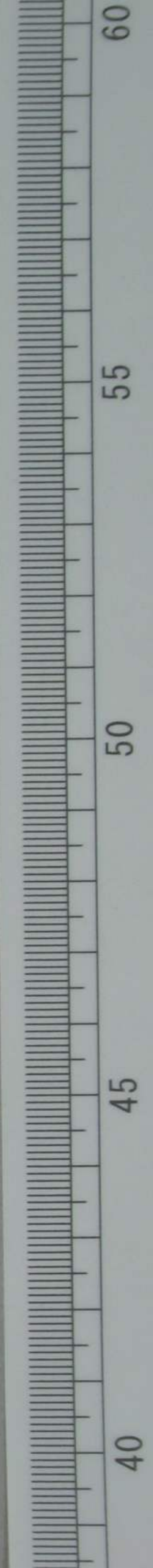


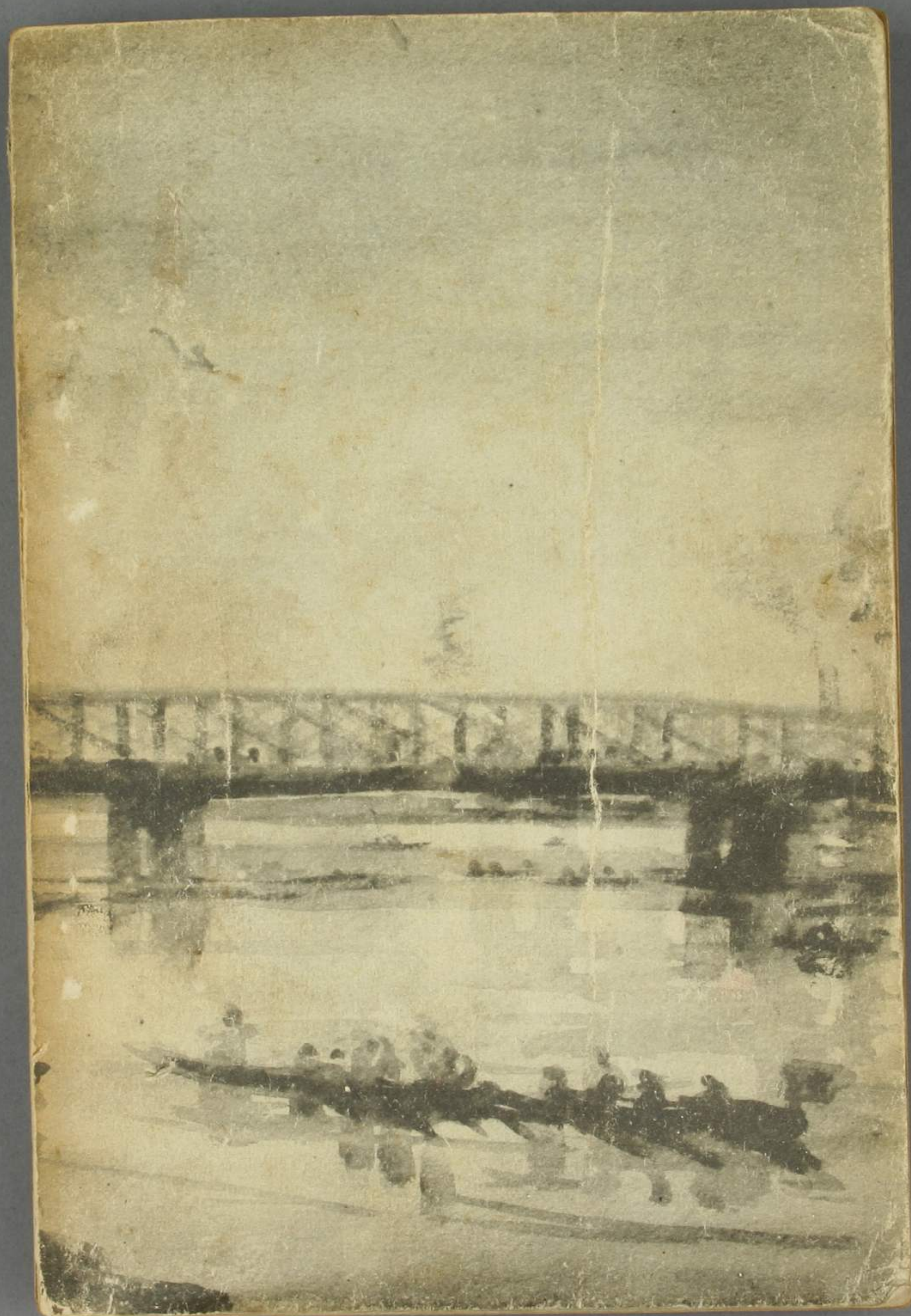
東京印象記



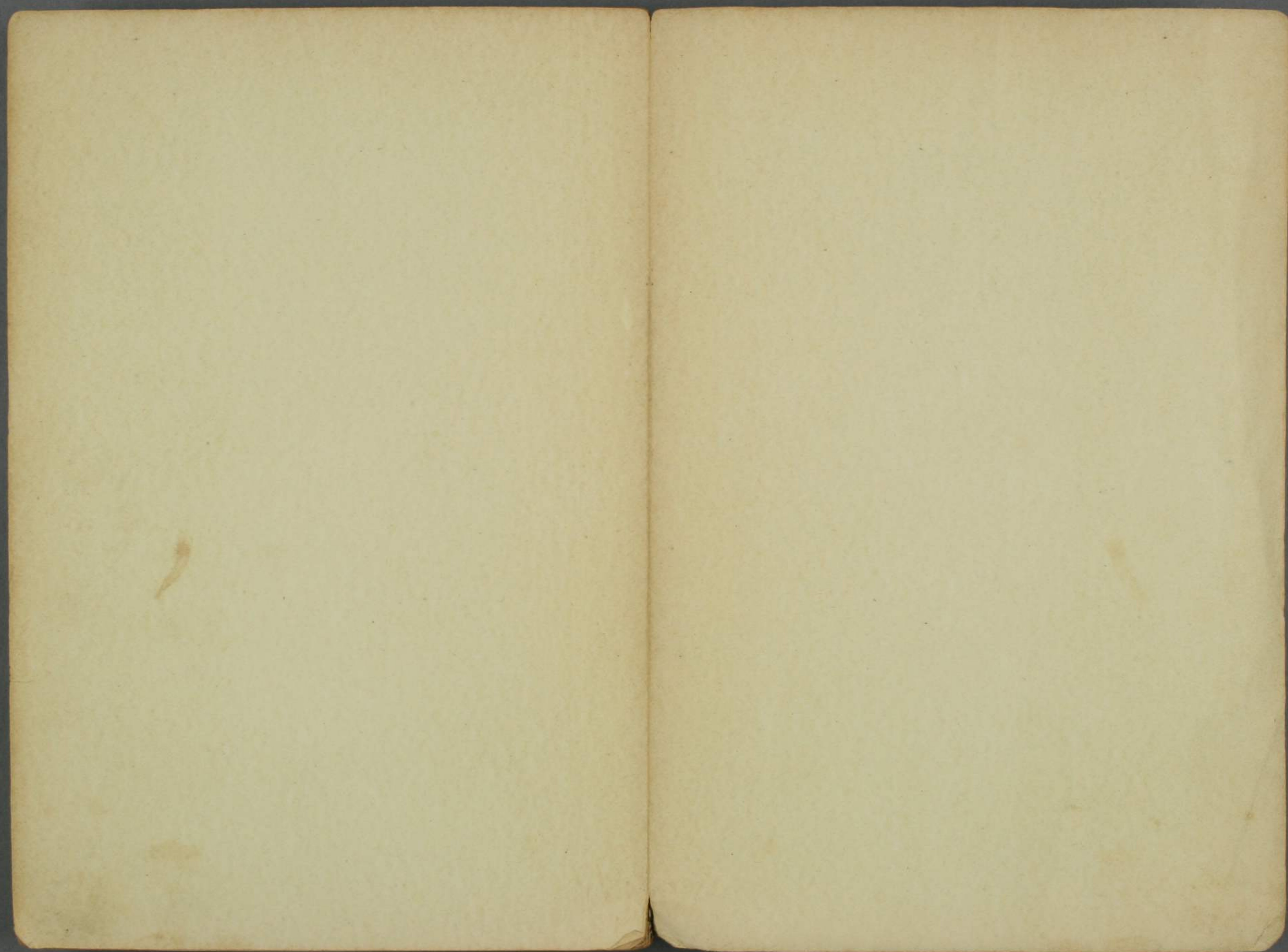


蘇音小印象











東京印象記



西の國のデカダンの詩人に、牛肉と茴香  
酒の薫あり。

余は日本橋魚河岸の大鮪の切身にも、赤  
き血滴る詩を思ふ。

昔の江戸人に代る、新しき東京人の起ら  
ざる可らず、時を越えるも、世を跳ぬるも  
宜し。



此書江戸子の爲めに大提灯を持つ、蓋し  
過ぎし江戸の草場の蔭を照すに非ざる  
也。

三

明治四十四年晩春

兒玉花外識

目次

都會の色……………	一
品川の海……………	四
鈴ヶ森と海苔……………	六
泉岳寺の香の煙……………	八
魚河岸と鮪美……………	一一
夜番の撃拆……………	一四
長兵衛の墓……………	一五
闇魔と江戸子……………	一六
ミルクホールの卓……………	一八
道灌山の土の香……………	二〇

目次

一



目次

男性的九段坂	二一
雨と風の東京	二四
日本橋の上	二五
赤塗の車	二六
青物市場	二七
水天宮と人形町	二八
武藏野の面影	三一
お茶水の今昔	三二
青山の瞥見	三三
枯木に電燈の花	三四
水道橋の畔	三五
豪放な牛込見附	三六

姿の柳橋	三九
奥の礪川の鷺	四〇
兩國橋と國技館	四一
東京の芝居	四三
屋臺店の灯	四四
鯉幟と武者人形	四六
郊外の新築	四七
日比谷公園	四八
目白臺	五〇
道玄坂の陽窟	五一
蛤趣味の深川	五二
傳通院と瞑想	五三

目次



春の隅田川……………五五  
 母子地藏……………五六  
 龜井戸の昨今……………五七  
 三越の使者……………五八  
 義太夫と浪花節……………六〇  
 業平町と萬年町……………六二  
 紙屑拾と魚腸拾……………六三  
 紙漉く音羽の町……………六五  
 江戸川のスケット……………六六  
 唐辛と納豆……………六八  
 須田町の渦音……………六九  
 中洲の明暗……………七一

呉服店と刺戟……………七十二  
 銀座の肉觸感……………七三  
 都の公孫樹……………七四  
 妖艶和洋草花……………七五  
 聖なる額縁店……………七六  
 飛鳥山の春晝……………七八  
 三崎町の支那人……………八〇  
 目黒羅漢堂……………八一  
 理髮床小見……………八三  
 甘酒賣……………八四  
 新橋の空氣……………八五  
 三河町の人夫……………八七



繪葉書と繪草紙……………八九

ペンキ色看板……………九二

猫さねの漁師……………九三

赤門前……………九五

水菓子店の色……………九六

詩的上野公園……………九八

南洲翁の銅像……………一〇四

暗い谷中の墓地……………一〇四

菖蒲湯と柚子湯……………一〇九

永代橋と湊河岸……………一一〇

小塚ヶ原刑場の記……………一一三

銘酒店の女……………一二六

讀賣の女……………一三四

露店の團扇……………一三四

蛙の音……………一三五

淺草十二階論……………一三七

夏の淺草……………一四一

新聞賣子……………一四八

料理人……………一五〇

酉の道中……………一五三

苗賣……………一六二

都會と柳……………一六四

虞美人草……………一六六

繩暖簾の酒客……………一六八



# 東京印象記

## 都會の色

兒玉花 外著

人間に感情と外容のある如く、都會にも生命と色とが有る。

私は一日、晩秋の夕陽火の如く紅りに東京市を彩つてゐる數分間、活ける大都

會、赤い東京市の強い色彩と光輝に感得し、そして酔つた。

古の詩人は天地自然の美に感溺して歌つた、現代の吾等は内外の發展しゆく都會の爛美を、口を極めて謳歌したい。

人は俗悪と賤すかも知らぬ。が、私は東京市の色々のペンキ塗の看板や廣告柱

### 目次

馬肉屋	一七一
ホーカイ節の娘	一七八
出水の記	一八一
聲色	一八五
大道の蝮賣	一九一
赤提灯の占卜者	一九三
零落	一九五
小泉八雲の墓	一九六
網島梁川の墓に詣づる記	二〇〇

### 目次終



を以て、市を飾る花だと思ふ。美人が化粧を凝す如く世界的都市は盛装する、屋根瓦に咲出た此花、それが悉く生活の色と競走の呼吸をするのが如何にも面白い銀座の大通りから須田町、神田小川町から淡路町、上野廣小路附近。歐風、日本式、アイノコ流、大小開放しの綺麗な商店の軒看板、赤青紫黄、白地は目立つて夥いが、私は現代勃發しゆく文明を象徴する色として赤を以て勝どきたい、否赤が第一到處に塗られてゐる。電車停留所の赤柱、心に待たる、郵便函の赤塗はうれしい、振つてゐる。

東京の代表的色彩が赤ならば、大阪が黄陰氣な京都が青であらう。どうしても、土地の人氣風俗を其服装に見ると一緒に都會にも何かの色に爲つて明確に現はれる。目下流行の女持洋傘の色一つでも警眼には近代女心が知れる。

今は物淋しい秋の節だ、而も都會に居ては私には怎うしても秋といふ感を味はれぬ、餘りに大都會の進歩しゆく生命活動力、眼を射胸を焼く色彩が強いからで

ある。頭腦の舊かつた歌人俳諧師輩が夢みた徳川の城下、月に泣いた秋の武蔵野が斯うまでに變つたからは、電燈は無論今に赤青紫のイルミネーションが月光美を褻ふだらう、私は詩の心から驚ろく。單り東京市の重疊羅列する家屋、巨獸の如く吼走る自動車が行く行く！個人的に觀れば悲痛もあらうが、世界人文の進つてゐる。「文明の途に行く人！」個人的に觀れば悲痛もあらうが、世界人文の進歩發達の上からは寧ろ微笑を顔面に湛へ強者と爲て進まねばならぬ。

佛國の詩人ボードレルが極端なる人工美を謳つた如く、今日の東京市をして飽く迄物質的に美觀を呈せしめよ。目に綺麗な物を見刺戟ある匂ひを嗅ぎたいのは現代人の慾望だ、國も富むで我等は地上に極樂を見たい。

俳句は兎まれ、今日進む短歌や長詩が題材を都會中心に採り歌ふ様に成つたのは、我が文壇に非常に愉快な事と思ふ、近代的情調と色彩と光熱の溢れ漂つてゐるのは嬉しい。金鑛の坑夫が鶴嘴を揮ふより烈しい努力で吾等は詩を大都會に



探るだらう、近代の詩は割つて見ると、皆赤を帯びてゐる。

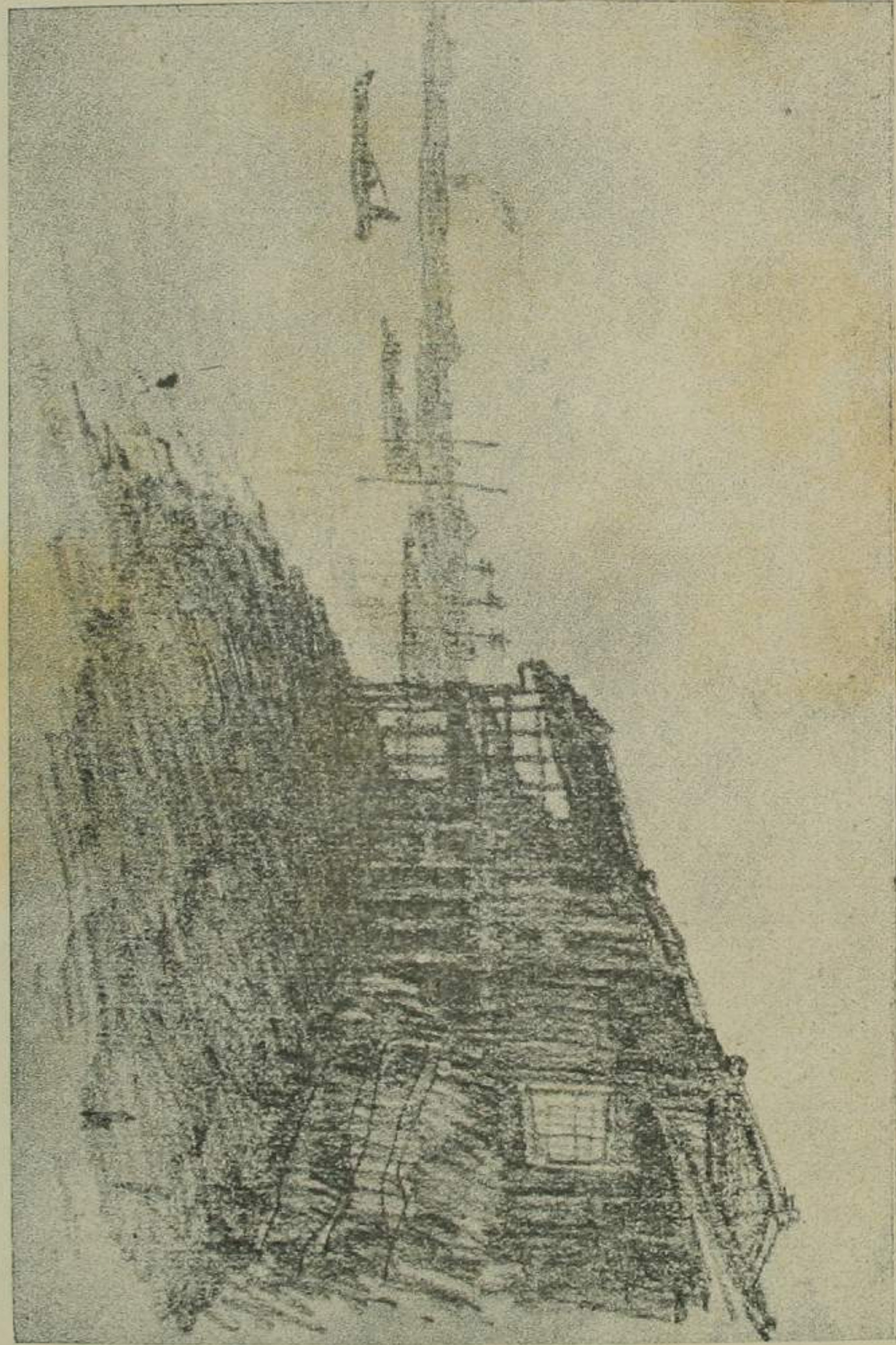
田舎を歌ひ、清新なる趣味を都會に注ぐ詩人は別に在らう。強い、艶麗な、暗黒もよし、活ける生命を歌ひたい、私は都會を愛するのである。

雄壯なる七海を謳ひ機關を詩に作つたキツプリングは偉さい。飛行機に試乗をしたのは流石は近代文豪ダンヌンチオだ。折しも淋しい秋色を壓して熾盛なる東京市の赤色を私は舌の限りに讚美する。

### 品川の海

少しダラ／＼阪になつて、路幅は廣くはなく、昔し東海道を管笠に、脚絆扮装の旅人が、セッセと歩急いだ、廣重の繪にある面影が偲ばれる。

鷺みを帯びた土の色、兩側に建並ぶ古風めいた家屋、特に磨きをかけた様な、飛々に離れても在る品川遊廓が目立つ。大抵紺と淺黄の店暖簾の垂るのも風雅





に床しく、物静かな海邊だけで、空が青く、そして空気が莫迦にすがくしく軽い。

維新當時の、例の七砲臺の邊りへ、寄せる波も、返す波も、有るか無いか程漣は、頗る穏やかだ。沖の方に黒い、白く塗られた大型小型の蒸汽船が碇泊し、また何處へか夢か謎の如行くもある。平地の小高い臺場跡に、白いペンキの圓い建物が見え、なにかの工場らしい頻りと煤煙が吹揚つて居る。

品川灣内はゴク静かな海だ。小さい漁りの舟釣舟は、竹竿を立て、浮いて居る、珍らしく三角形四角状の、赤い色灰色の小さい帆を揚げた儘、歐式の舟もジツと動かすに在る。太陽が明かに木綿のズック帆に射込むのである。赤い帆は激浪に可。

品川は、魚は無論新鮮で佳い。町の入口に、五六軒も二階屋の料理店が並ぶ。店頭にも常も生々した鱗艶な小鯛、鯛、穴子、烏賊、眞珠の粒に似た貝の柱、此處の名物とあつて、蛤の生々しい剝いたのはドツサリと薄策に並べて在る。



食道樂の是非見通す可らざるは、この蛤鍋だが、實は蝦蛄鍋も品川の名物で、這奴は宛で海老の怪物が私生兒的で姿は大に醜いが、喰つてしこく甘味が有つて、これで一杯勿々馬鹿にできぬ。市中の小さな飲食店にでも、蟹と蝦蛄とは食はせる。

東京から電車を降りる終點、八ツ山下、高い土手様の路端から海の方に向くと、スグ眼下に品川驛の鐵道線路が紆つて光つてゐる。數知れぬ澤山の白い形の鴈が、灣内に鴨と入混つて、白黒の羽根が波の畦りに甚だ美事だ。

汽車の白いシグナルが、起つ鴈浮くかもめとの對照が如何にも奇である。

### 鈴ヶ森と海苔

我舊日本の、或方面の人情に囚はれた、熱烈赤實な女性の好標本として、八百屋お七が火灸の刑罰に焼死むだ、昔の鈴ヶ森は、慄悍腕白であつた若い武士氣質

の權八と、俠客根性の長兵衛の物語噂として、今に東京近い海邊に遺つてゐる。

例の髻題目、波が萬古に岸を洗つて、白く打寄せて来る、狭い海道の傍ら、大きな南無阿彌陀佛と刻むだ、高い石碑が建つて居る。太い性の曲りくねつた松は在るが、影暗い藪壘が何となく凄く、寂しい。

御維新まで、此仕置場で、幾百人の罪ある男女が、鈴ヶ森の朝露と消えた事であらう。牛馬の骨の捨處、駒も一度は涙を流すと謂はれた涙橋——房總の山がいまも灰色に薄ぼんやりと見える。

その山の當りからか、潮波に乗せられて、海苔が粗朶に掛る、品川名物の青海苔が採れる。

東京名産の淺草海苔も結構だが、人情に乾いた私には、一切、お七の赤い火の緋鹿子のやうな腸と、長兵衛のドツシリした義腸が、千金の價舌に嘗めてみた



### 泉岳寺の香の煙

高輪泉岳寺、入口に、自然石の表面に、萬松山、四十七義士舊跡と、血の如な  
眞赤な朱字を入れて彫つて、案内として建て、ある。

門までの細い兩側は、舗の玩具の人形も義士で、陶器も徳利盃に大石家の定紋  
を金で焼いて賣る。軒の暖簾を、義士討入の時の白と黒とダンダラ染にして、雪  
の夜といふ汁粉店が在る。矢張り義士の色彩した綺麗な繪葉書を售る。

門を抜けると、左が即ち四十七士の墓所で、常夜燈の處を進めば、義商天野屋  
利兵衛の立派な石碑だ。小い又入口を潜ると、せんかうつける火と木札に書いて、  
カンテラの煤烟が黒く凄味に、火がチロ〜と熱誠の色に燃えてゐる。

浅野長矩侯と室との靈塋に隣つて、赤穂藩四十七人の墓石が、小高い段地に並

立つて居る。大石父子のは兩隅に屋根の一構へに爲つて、石面に、浅野内匠頭家  
來大石内藏助良雄、忠誠院及空淨劍居士行年四十五逝、更に元祿十六癸未歲二月  
四日と刻まれ、他の同士のは武夫の四角形に取圍む。そして小形の墓石は、孰れ  
も蒼黒に古びてゐる、例の堀部安兵衛のは刃雲輝劍信士行年三十四逝、赤埴源藏  
は刃廣忠劍信士行年三十五、矢頭右衛門七教兼の刃擲振劍信士は最も勇壯、悲壯  
凜として名が振つては居るが、其の行年僅に十八と云へるは、主税良金の十六歳  
と共に、實に感すべき美少年の床かしい極みでは莫いか。常手向の檣の綠葉に、  
自分の熱い泪がたばしり落ちた。

君恩義の爲めに死むだ、何れ劣らぬ四十七の墓前から朝々暮々、年中燃騰る香  
の煙は、白う濛々と棚引くやう合して、松や高い樹の間を立昇つて、眞に青い空  
に貴尊い天雲と化るのである。

泉岳寺の墓地は、少しも陰氣な濕ッばいこ、ちはせぬ、併し之も男性力に富む



だ義烈の氣の徳であらう。諸國から旅人の四季に足跡の絶えぬのも、敢て無理ではない。

義士木像は別所にある、銘々三五尺位の像で、立つてるの、座つてるのも、誰が作かは知らないが、各自の性格氣象が活けるが如く、色が施され動いてゐる。試しに是等木像の堅い腹を切つたら、ダク〜と眞赤な血が滴出さうに思はれる。少くも當今の人間より、像は血が多からう。

表所に、主税の梅てふ至つて古木が有る。之は當時松平隱岐守三田邸に御預となつた、十人の内大石主税が、此樹の下で自刃した、潔い縁りの梅の古木だとか、花は昔に散つて最早咲くべきもない。

側にすぐ、義士遺物展覽場がある。四十七人の記念物は、吉良邸内に討入の装束、鉢金、鎖襦袢、脇當、及び大小刀、槍の類、山鹿流の朱塗の巨陣太鼓等、珍重な物が饒山に列べ覽せられる。今なほ元祿極月十四日雪夜の悽い光景、敵味方

の血潮が、班々と残つてゐる心地が爲る。

特に面白く振つてゐるのは、安兵衛書の齒磨屋及びはげやの看板と、大高原吾の酒屋の看板である。

泉岳寺は、我が血性男兒が永久に忘れられぬ、清高な且つ熱氣を藏む大墓地である。

### 魚河岸と鮪美

日本橋、魚河岸の景氣は大したものだ。早朝の河岸は、方々の海から上つた澤山の魚と、人間と一緒に、狭い所にゴツタがへして、魚鱗の閃めきと、人の聲と混戦の有様であるのだ。

晝頃通つても、其の名残りが、種々の魚類が置捨てのやうに爲れて在る、籠や何かと狼藉の態だ、まだ活きた魚が、小石と轉がつてゐる。

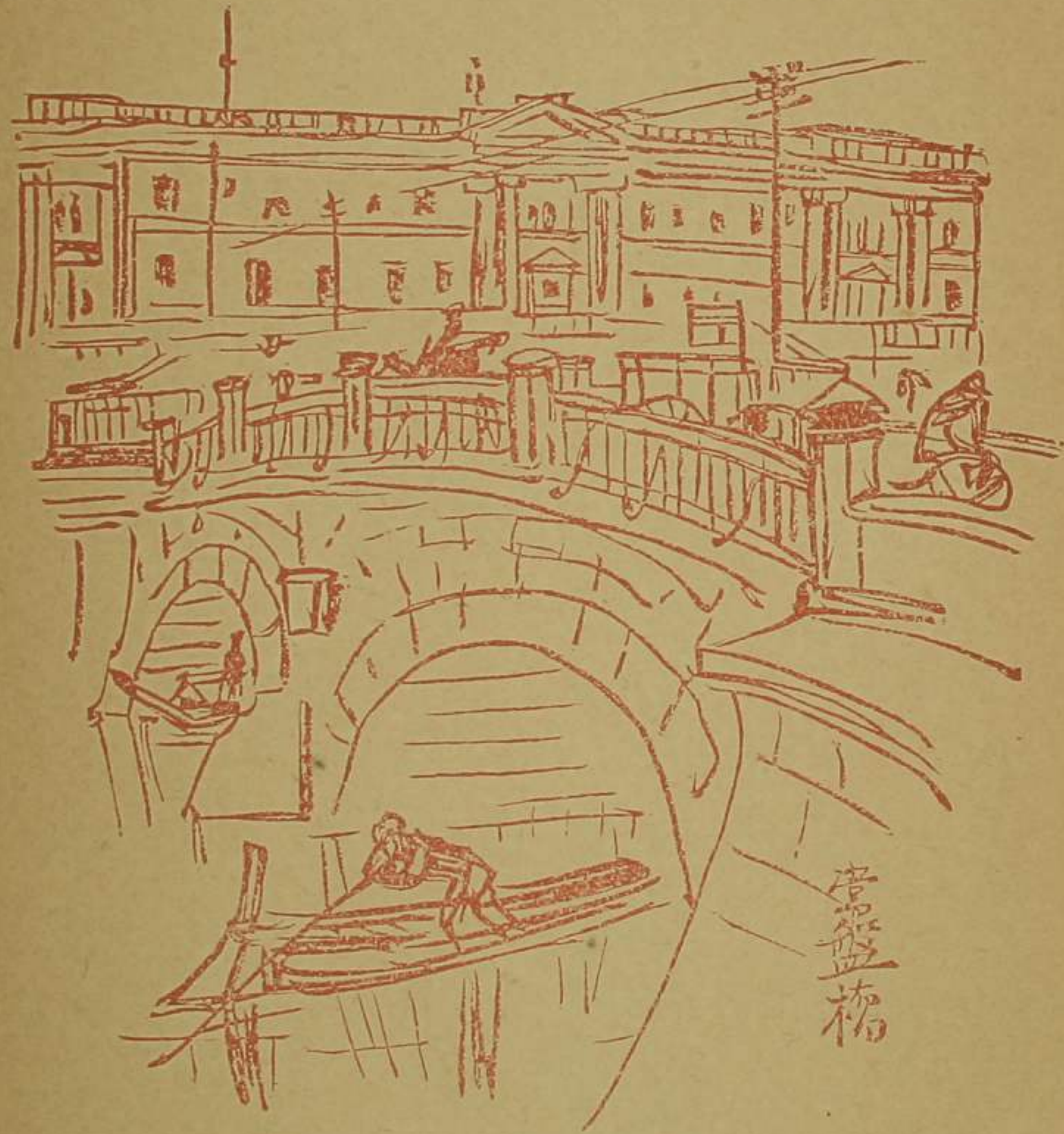


河岸は、上部が白く塗つた、納屋様の家が續いて、河岸の人は、紺の鯉口を着た、甚だ威勢の好い兄哥風の男、深い帽子の頭に振鉢巻の若い者、行動は荒々しいが、一人として蒼い顔をした、弱虫らしい神経質は見附らぬ。孰れもピン〜飛遊ねた、生粹の東京ッ子、江戸ッ兒を以て看板として居る。唐棧の拾三尺帯を前結びにした、角笥の鯨背な若い男に會ふ。

此處には、市内の店で見る魚は、其節期にはいつも丘の様に積まれる、秋刀魚の折杯には河岸一帯が、鮮かな銀色で光つてゐたに驚いた。

河岸の屋臺店、壽司の立喰は名物だ、髭が赤い鮪のにぎりを晝間でもバクつく、天麩羅でも日本橋の立喰は天下御免である。

横町には、大きな魚問屋がある。廣い土間に六尺位な巨鮪が、何時も六七本もゴロ〜轉がつて有る豪氣さ、こゝは亦素破らしい景氣だ、黒海は一切が横たはつて居る様だ。



唐棧橋



那の黒い皮の下、眞紅な肉を包満されてゐる大鮪！鮪は無論鯨には若かぬが、海洋の魚族の王だ。死んで魚市場の石庭に横たへられても、首尾長く堂々として、魚王の價値を落さぬ、大海で暴れた姿其儘であるのだ。

自分は魚市場は、之れだから好きだ。死んで東京市民に、赤い脂濃い肉の切身を、大勢の人に分つて喰はせるのは、俠客的で振つてゐる。何だか水野宅の幡隨院長兵衛の最後を思はせる。魚でも鮪のやうならば、平凡の人間共よりか豪く勝つて居る。

其他、蒲鋒屋の内庭には、大鮫が數十尾も並ぶ、これも形状に恐ろしい凄じ所が、蒼灰色の皮膚に残つて、象徴された魔力の存する詩を想ふ。一體蒲鋒屋は、元氣な威勢のいゝ商賣は無い。厚い廣い組板の上で、長い大庖丁を振つて、矢鱈無闇に陽氣な音を爲せる、そして高い調子が莫迦に、生魚の白身と匂と、人の氣を引立てさせる。トン／＼カタン響が、魚河岸全體の空氣を震はせるやう



だ。大きな石の摺鉢の周りに、若い男が七八本の長い白棒を突立て、シユツ  
 くと勇ましく拍子を揃へて、雑然の生身を摺合ふ有様は、白に黒い腹掛で、荒  
 木の棒の動くのが正に江戸ツ子の本色を見せる。

狭苦しい地面は、常にジメ／＼して、縄や木片や藁屑が、コダ／＼散ばつて、  
 氷の欠片などが落ちてゐる。大馬鹿か何か分らぬ真黒い貝の欠片が光る。

鹽鮭の如きは、山程積むであつて、宛ら海潮が押重なつてゐる様だ。

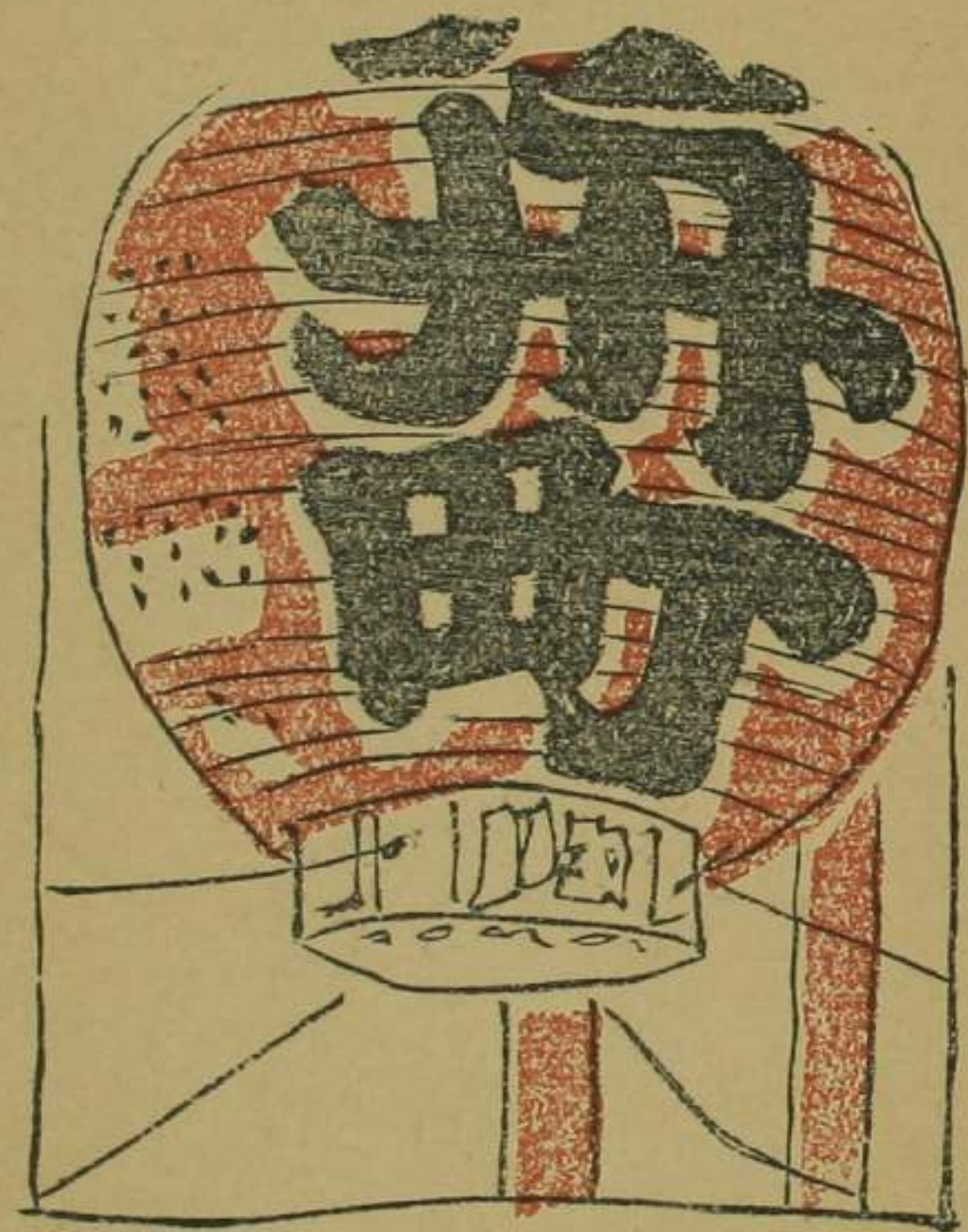
譯の分らぬ怪巨魚が、木と縄とで胴を尾まで捲いて置かれる。

日本橋河岸に、生粹の兄哥江戸ツ子と、東京人の好く魚が海から上る。

### 夜番の撃拆

東京、夜の撃拆の拍子木は、頗る詩味に富むた物だ。

宵の口から、寂しい暗い、山の手、下町でも、黒法師の夜番が、カン々々カ、





ン！と拍子木を打叩き乍ら、街道を通るのは、中々神秘的で情のあるもので有る。市の屋根瓦、道にも霜白く更けた夜は、犬の遠吠と、怎うしても、詩中のものだ。夜番の撃柝は、家の構造と、やはり廣い東京の事だ。分けて江戸時代を思出す。昔の勇ましい金棒、深夜町の角に火の番が障子の裏に射す油火も佳い。私は日本橋、京橋通りの、冬の夜遅い、老人の夜番の、巧く叩く拍子木の音を、一度聴きたいと常に念つてゐる。

諸々の罪悪も行はれる、夜の東京に、斯んな神秘的な、ロマンスの音響もある。

睡さうな、鍋焼うどんの聲は、町を離れて、妙に撃柝の木の音と調和する。

### 長兵衛の墓

俠客、幡隨院長兵衛の墓は、淺草清島町の源空寺に在る。



古い寺の門を入ると、突當りが本堂、その前の左手に、長兵衛の墓がある。墓は背の高い、青色の自然石で、立派に幡隨意長兵衛之墓と、深く刻込むであらう。翠の色濃い格好のい、男松が、傘の如うに石碑を蔽うてゐる。俠客、長兵衛の辭世が石に有る、その側に小い妻女の墓が立つ。

高い石碑の裏面に、故市川團洲を筆頭に、諸藝人の名が細く豆の様なもの、何如に彼等の崇信心が知れる。

向ふに、朽廢しかつた、古い鐘撞堂が建つ。淺草俠客の墓から、此の錆た鐘でも、ゴーンと一つ二つ撞鳴らして、頃日人情浮薄の、都會人の夢を破醒したい心地が爲る。

### 閻魔と江戸子

東京人が、お閻魔様を拜むのは、江戸ッ兒の行きさうな事だ。





閻魔の名高いのは、浅草、小石川、新宿にも、嚴めしく、祭つて在る。今年の

正月には、参詣した東京の男女は、大變な雑沓であつたさうな。

世の中は、地藏様を拜むかどみれば、反對に恐ろしい閻魔の前に、願を掛ける。

上方の人が聞いたたら、驚くだらうが、全く氣の荒い、負惜みの強い、物好きな江

戸ツ子の、喜びでやりさうな事だ。下町の人間や、縁起を祝ふ力士藝妓連に、お

閻魔参詣が多いのだと云ふ。

寒中の夜半に、白地の單衣一枚で、寒詣りを行る東京人は、次第に依ては平氣

で火にも飛込む。閻魔を禮拜するのは不思議でない。

併し、縁起とか、幸福とかは、平凡無事でなき、閻魔様のやうな中に在るのか

も知れぬ。

江戸ツ子の半面は、旋毛曲りの、こういふ所で覗はれる。



### ミルクホールの卓

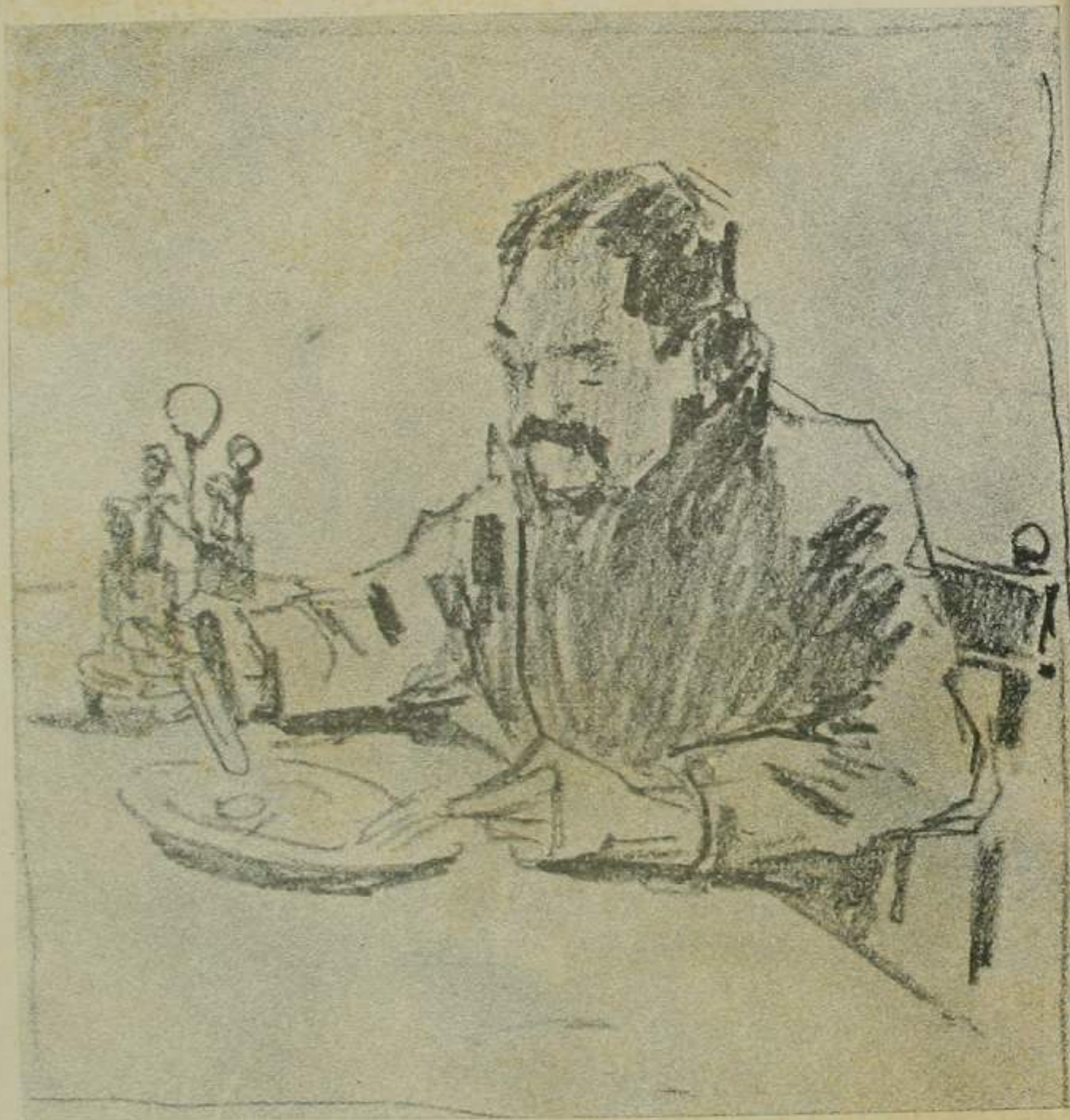
#### 新聞縦覧所と一品料理

ミルクホールは、神田本郷學生を相手の所に多い。名の通り牛乳を鬻ぐのだが、カステーラ菓子も置かれる、狭い室内は、牛乳の臭ひが空気を甘くしてゐる。

ミルクホールと、新聞縦覧所と大抵似た物だ。縦覧所は少し規模を大きく爲たので、雑誌類も有り、麵麩、一品料理をも行ふ。

所によると、ミルクホールに廂髪の、怪しい若い女が居る、牛乳の故か顔が生白い。酒に酔はぬ青年でも、乳に酔はされるハイカラ學生も在る。

純然と、一品料理許りの家は、西洋料理は一通り出来る。小チンマリとした家に、表硝子に赤で一品料理と記るし、室内には無論卓に椅子、ビール正宗、林檎





蜜柑位の用意はある。美人の廣告が吊下げて、いや、活きた女が腰掛けて酌も爲る、淺草當りには、佛蘭西の酒場もどきの、眞似だけの一品料理がある、ウヰスキーの壇が棚に光る、頭髮の安香水と白粉が匂ふ。

入口に白い金巾の垂つた、一品料理は、西洋の貧民街の場末を聯想さす。平民的で、駆込に便利で、詩味も有る。一品は大抵七八錢だが、馬肉を喰はす所もあるとか、コックの手腕もあやしい、世間で事業の失敗者が主人の氣持がする。

下町等に夜更け、テントを張つた様な、一品料理が出てゐる。氷るやうな寒い夜、熱いジイッと安バタが焼ける臭が、闇の道路に煙つてひろがる折、饑空る腹を抱へた労働者が、甚麽に鼻に強く刺戟されるだらう。漂泊者とテントの一品料理、正に廢頹的の詩情がある。

都會に數階の西洋料理、美人の白い手の多いビヤホール。之に下級の、髪と口髭をモチャ／＼した主人の一品料理も、異つて面白いではないか。



### 道灌山の土の香

英雄太田道灌に因むだ、道灌山は月夜に良い。而し秋の落葉する前の、樹の匂を私は殊に愛好する。

露西亞のツルゲーネフのは、榛木等曠野の香を、那の感能の強い鼻に嗅いだか自分は夫程でなくも、道灌山で、我國の秋と樹と草の匂を、心ゆく迄に嗅ぎ味ふ事ができる。

道灌山の、餘り堅くない、粘りのある赤土も可い。白い薄が瘤の如な處に、シユツくと亂生してゐる、月の夜に虫が露に噎むで鳴く。

道灌山に花を尋ねても無駄、一面の樹と草と、土のかをりを臭ぐべしである。都會の街道や瓦の香よりも、道灌山の土に亦野生的の面白味がある。——百姓が向ふの畑地に鋤を把つてゐる。

空の晴れた日には、紫の筑波山が望まれる。

道灌山一輪の月に、塵の生命の洗濯をするも宜い。

### 男性的九段坂

九段の坂に立つと、心氣活潑になる。青天無限に四方に伸びて、春風凧の高く飛揚する頃には特に佳い。

靖國神社の境内、櫻花の折には、白銀の世界を綴る。樹木の植込整然として、都下心地のよいと第一の公園だ。神社の裏の池に近く、共同ベンチの東屋、新聞を覽てゐる人も詩中の物、池の中の童子が鯉魚を抱く鉄の噴水は、眞に男らしく、春雪が肩と鯉の鱗の邊りに、残つて凍着いた趣は凜々しい。公園の樹木は、四季絶えず新鮮の呼吸をしてゐる、田舎上りの疲れた旅人が、此の東屋の椅子でウトウト、晝の快よい夢に入るのを見た。



横の門を出ると、名もゆかしい富士見町、塵も揚らぬ道、西の方を向くと、白銀の芙蓉峯が遠く甲州境に靈姿を現はす。山波が白雪と白雲と、一緒になつて、富士を高く隆起した中心に、山脈と雪と雲との蜿蜒と長い、大波瀾を天際に捲おこしてゐる。此の光景を望むと、こゝより家も無く、櫛比鱗の如うな麴町區の瓦屋根を一足飛びに超えて、直ぐ雪の富士へ達くやうに想はれる。富士見町とは最も好適の名だ、一體東京の町名は、阪でも橋でも、景趣に似合ふた、所謂詩的の名が附けられてゐる。都會の小兒でも日常、途に立て富士を觀る杯は、教育上自然からも知らずも學ぶ。揚つた風の向ふに、雪の不二が見えるなどは、御伽噺式だ。麴町區は富士がある爲めに、詩化されて居る。

高い巨大な、銅柱の華表を抜けると、其處は例の境内の廣場だ。大村兵部卿の陣羽織姿の、嚴然たる眞黒い銅像が、眉目活けるが如く睥睨して居る。此人は彈丸雨注の間を、高足駄の傘で鼻唄を謠つた、詩人肌の英雄で有つた。鐵の矢を





柵とした銅像臺の根元、横たへて在る大砲に、三人の青年が腰を掛けて、キツトした眸で天の一方を睨めてゐた。

此の境内は、靖國神社の祭日には、非常なる人出で、撃剣、劍舞、見世物、及び活動寫眞が盛に興行される。毎年定つて來る男女の諸國放浪の劍舞師も有る。

愈よ境内を出る、こゝが所謂九段坂で、神田一面を一目に瞰卸せる。坂の下方隧道のやうな處を、青山新宿行の電車が、鈴は鳴らすが夢の如くに迂つて通る。

濠は青く緑の樹木が繪のやうだ。折々兵營で吹く喇叭が聽える。稍傾斜が急の九段坂は、車も人も絶えた事は無い。此の阪は四圍の風物、見る

もの聞く物、悉く男性的だから、車聲、足音にも、一種の高調を覺える。白晝でも坂の中途に突立つて、朗々と詩吟を爲れば、聲は忽ち波動して、遠くの空の雲

に入ると思はれる。坂下に古い鳥屋がある、永く小鳥を賣る、赤い鸚哥白い鸚鵡が居る、之も九段



下の名物の一つだらう。

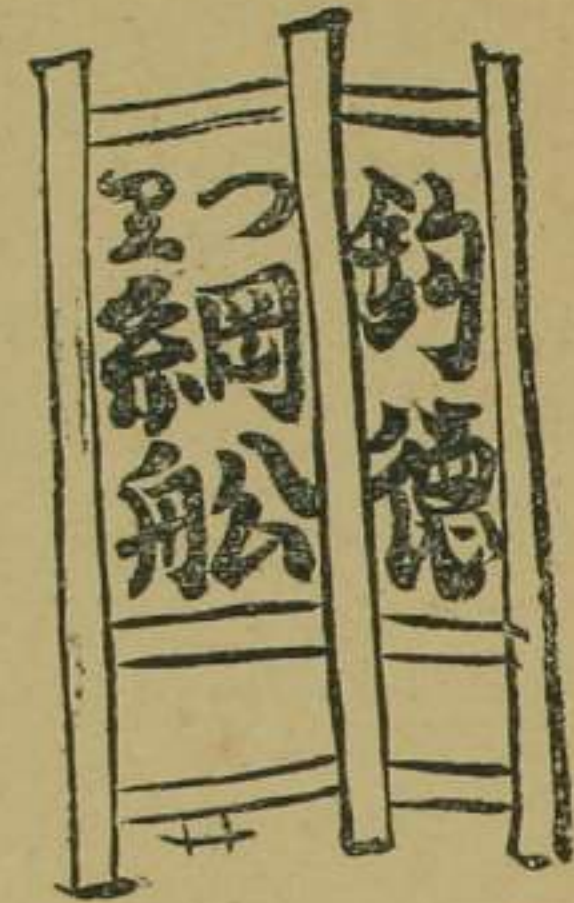
### 雨と風の東京

上州の空ツ風と謂ふが、東京の風も随分と烈しい。八百八街を吹き捲くる。秋冬、四季共同したが、櫻の花が咲く、春先になると、風伯は袋の紐を緩める。家も人も溜つた物でない。

上天氣續き、所に據ては、忽ち萬丈黄塵の濤が起伏する。通行人の眼も鼻もあつたことで無い。而し晝吹いて夕景、強い疝癩が収まつた様ケロリと歌む。

東京の雨は亦甚い、大抵は何時も斜めだ、真直ぐでも、西京での絹の如に柔かに降つて来ぬ。風の奴が手傳ふからだ。

烈しいッたら、雨は所謂横頻吹きで、袂迄でビシヨ濡れで、逆も外套無しには歩けない。傘も奪られさうな折がある。



浮所新元



筑波嵐しは寒く、雲の急な變化、激しい夏の夕立は、兩方東京の名物である。  
 雨と風とが、江戸ッ子式に出來てるのも、奇な縁であらう。

### 日本橋の上

日本橋は、目今架設中だ、此が出來上れば、大都會の日本橋として、何様に内外の目目を驚かす事であらう。費用は五十萬金と聞いてゐる。

一寸假橋に佇むで觀る、大橋の工事が、最早最後に近づいてゐる。眞白い、何如にも堅固さうな長い石橋が、南北に架つて、まだ石工がコチ〜と鑿を振つて居る。

高く組立てた樺木、工夫がセッセと働いてゐる。深い杭に浸込む濁つた泥水、架橋に努力と勞役の加はつた事は、一目で判る。

無論、電車は目貫の場所を走つてゐる。



假橋から、東の河岸の方を見ると、會社の白塗の倉庫が屋根を並べ、水上 幾艘とも數しれぬ荷船が、腹を漬けて泊つてゐる。

以上の光景は、飽かぬ廣重の名所圖書中の物だ。「御江戸日本橋七つ發ち」の唄を懷出す、詩興が酌めども盡きない、橋に高く麒麟の素晴らしい美事な彫刻が着く愈よ、日本橋竣工の曉は、大都會の雪白の長橋、永く東京人の矜誇となるだらう。

### 赤塗の車

郵便馬車が赤塗になり、自轉車も赤、東京の各商店の箱車は、大概、朱塗白塗、それに金字の商號商標を表はして、華やかに、美術的と爲つた。化粧小間物屋は第一に、孰れも箱車迄も、塗飾つて景氣を競ふ。寂しい山の手道の端にも、赤塗 金字の車が置捨て、あると、嫌な感じはせぬ、垣根に山茶花





でも咲いてたら、俳句位の値打は有らう。牛乳屋と麩屋とは大抵、白塗に赤黒位な所だが、私は此の配達する牛乳屋と、麩屋には、頗る常に詩味を思ふ。いつか小説に、牛乳と麩を盗喰つた、貧民のことを讀むだ。鼻唄で馬士が、デコボコ道を荷車も面白いが、都會大路を、綺麗に塗つた商店の箱車が走るのには、極めて乙なものである。併し、一面現代は、商品の函車でも、人間と同様外部ばかり、赤と金に塗り飾る流行だ。

髪の如な真直い大道を、白地に花模様はなもようの箱車が一臺駛たいはしつた。

### 青 物 市 場

青物市場は、神田多町かんだちやうちやうに在る。新鮮な青物と、神田ッ子かんだことは、何等かの交渉かうせうがあるまいか。然し乍ら、夫れは氣持が淡泊たんぱくのアツサリした事で、あざやかな、緑



色の男らしい氣風を言ふので有る。

魚河岸よりは、町幅は少し廣い、冬から春ならば、蜜柑の木箱が、兩側の問屋に山積にされ、朝には種々の季の青物が、荷車に搬ばれて來り、又去る。

此處も屋根は、黒い土藏の様な建方だ。裨纏着の兄哥や、股引や、帽子、鉢巻、入込むで來た者は、塵埃をかまはず働いてゐる。

地面に藁や縄や何か、ゴタ／＼と、犬が遊戯れてゐる。空氣は大抵汚れてゐる。は仕方が無い、喧嘩早い神田ッ子は、此處に住むで居るのだ。

業務の暇な折は、辻講釋が、ガランとした店の土間で、例の張扇子を叩くのを見る。

都會人の血を清新にする青物は、氣が早い神田市場から――。

### 水天宮と人形町

水天宮は、日本橋人形町に在る。東京の中でも、年中老若男女の御詣りが、意氣な下駄の音と、敷石の上に絶えぬ、東京でも有名の神様だ。

ガツシリした、白木で建続した、大きな水天宮様は、境内に塵一本も落ちぬ、掃除が行届いて潔齋清淨に、如何にも江戸ッ子の禮拜尊重措かぬ、威嚴の具はる神殿である。堂々たる巨門の内、高い唐銅に金巴の紋附いた、燈籠が二基建つて在る。

日本橋下町の中でも、最も男女の意氣と艶ッ氣の多い、人形町に御座を据ゑられるのは、中々振つた神様だ。此邊りは、下町の純の純な、人間も何でもピリ／＼として、潑ねん計り活々してゐる。水天宮の御符が、紙幣よりも貴重せられるも無理はない。

江戸ッ子は、縁起でも何でも、威勢のいゝ、氣の荒い、陽氣な神様を好くやうだ。

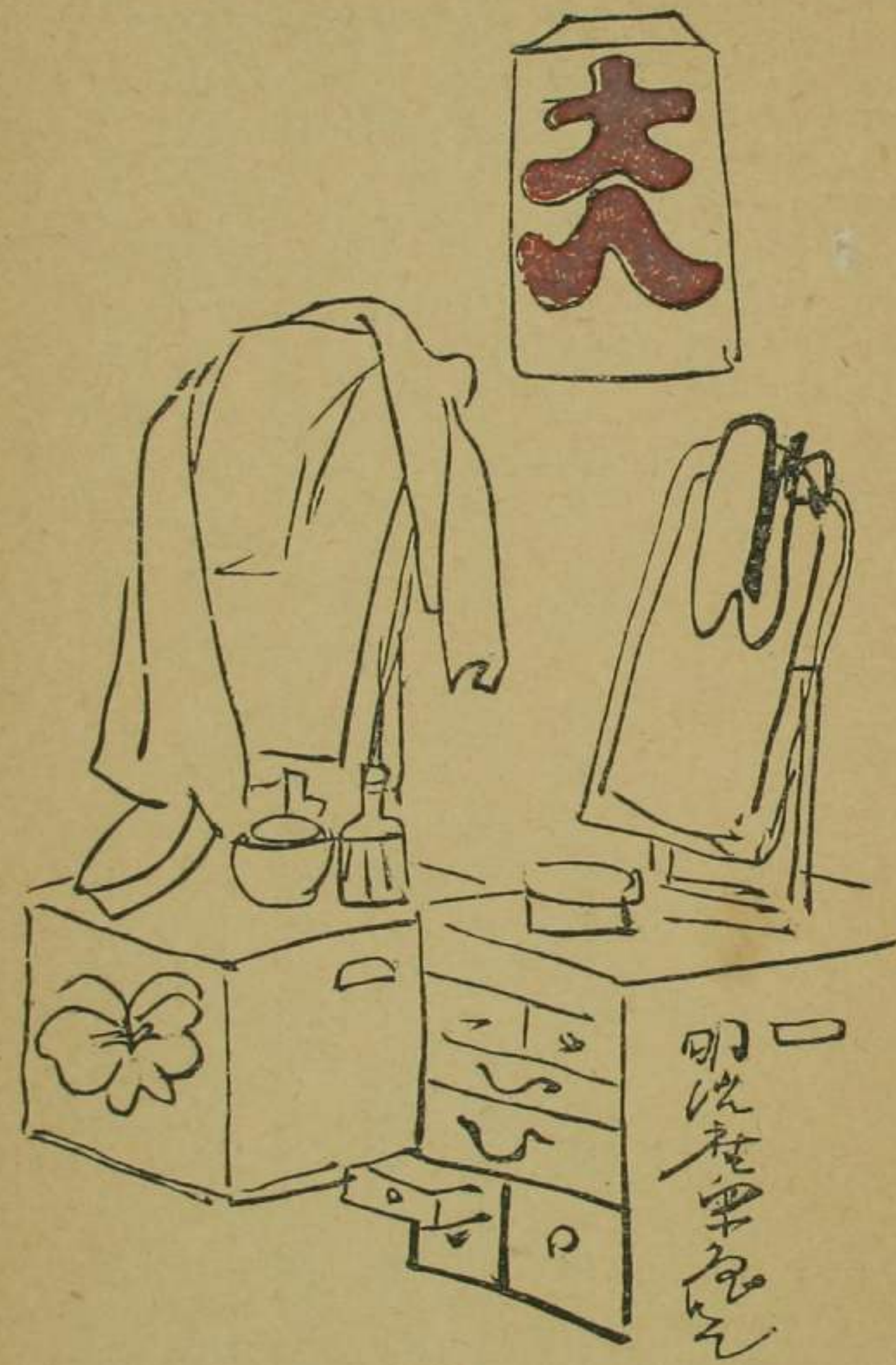


昨年戌の年戌の月日と、三拍子揃つた當時、逸早く御符を頂戴うと、水天宮の門前に、人波打つて、御守符の奪合ひに、人死に迄もあつたとは、到底も東京でなくば見られぬ。尤も亂暴は宜しくはないが、江戸ッ兒の價値も亦此邊に有るのだらう。信仰と意地張の爲に、火の中へでも飛込むのは、やはり江戸ッ子だ。

人形町は廣い兩側の商舖、飲食店も、きれいで瀟洒として、店の飾附は、銀座當りと全然違つて、純舊式の日本風な所がある。空氣が軽く且つ艶な氣持がする。土も一種の江戸懐かしい香が残る。

此町の女は、廂髪等は餘りに見ぬ。同じ日本鬘の銀杏返し丈けにしても、結方が意氣で、品はなくても、如何にも粹で仇ッぽい。東京下町の娘の、美しい標本は、此處で無くば見られぬ。薄化粧を以て一種の誇として居る。

寒い日、縞の筒袖、紺足袋を穿いて歩く、世話女房も有る。その代り、女の兒は厚化粧を爲る習慣だ。まだお染式の生娘をみる。





水天宮の裏が、常も金銭が鳴る蝸壳町、  
之も東京の變化の繪の一つだらう。

——高等白首の出没する魔窟が在る。

### 武藏野の面影

郊外に出ると、冬の枯木の時には、殊に舊武藏野を思出させる。榛木や栗や、  
打續き飛びくりに、雑木林が在るのは、兎ても廣い武藏野でなくば見られぬ。  
春と夏、木の芽が出、新緑燃えるやうな頃は亦、武藏野の地も空も、青葉若葉  
が焔の如く、生氣が活動して、反射が都會迄でも縁に、目が覺める許りである。  
秋の七草の頃、多摩川の附近は、女郎花、桔梗、銀の薄が、小松の間に簇生し  
て、今でも駒と鎧武者でも飛出しさうな氣持が爲る。村から村へ、斯んな所は幾  
らでも、現はれる。

東京に、何程家が建伸びても、今に武藏野は、やはりその面影を改めぬ、郊外



の樹木と土は、熾盛んに自然の力を誇る。  
 東京の大都市の、屋根瓦を照す月は、昔の武蔵野の上の潔よい月である。町奴  
 が眺めた月である。  
 春さき、東京の道路の空ッ風は、旺盛な武蔵野の名残りの氣息である。

### お茶水の今昔

小赤壁と唄はれた、お茶水橋も變つた。  
 あの深い溪のやうな、兩側の赤味を帯んだ土の崖も、色迄で異つた様だし、否  
 流れる水の色も俗臭くなつた。そして高い兩岸の樹も、堤から繁り茂つた木は伐  
 抜かれ、干乾びた呪れた空氣に、草は喘いでゐる。  
 十幾年前、お茶水が、まだ赤壁と言つた時分、私は飯田橋から小舟に乗つて、  
 眼鏡橋まで行つた事がある。無論乗合舟で、人の善さうな船頭が懐かしく思ふ。

私も無我の書生であつた。

夏の夕景は、舟が涼しくして塵もなく愉快だつた。  
 お茶水も、電車が橋の上を通る。殺風景と無趣味が、高い兩岸の樹木を嚙抜い  
 て、遂に神田名所のお茶水、小赤壁を代なしに爲て了つた。  
 方々に公園が、出來たにしても、神田に一個所位は、趣味の窪い、文明人が氣  
 を伸びくさせる、深い溪と樹との赤壁を、面影位存して措いても宜しかつた。  
 舊と變らず、駿河臺ニコライの白い高壁は、雲までも聳えて居る。

### 青山の瞥見

御濠端、池に松が翠綠に影を寫した、赤坂見附。電車の停留所で静雅なのは、  
 爰が東京第一と思ふ。  
 演伎座の在る、溜池の方へ往かずに、芝居の書割のやうな、洗ひぬいた風で粹

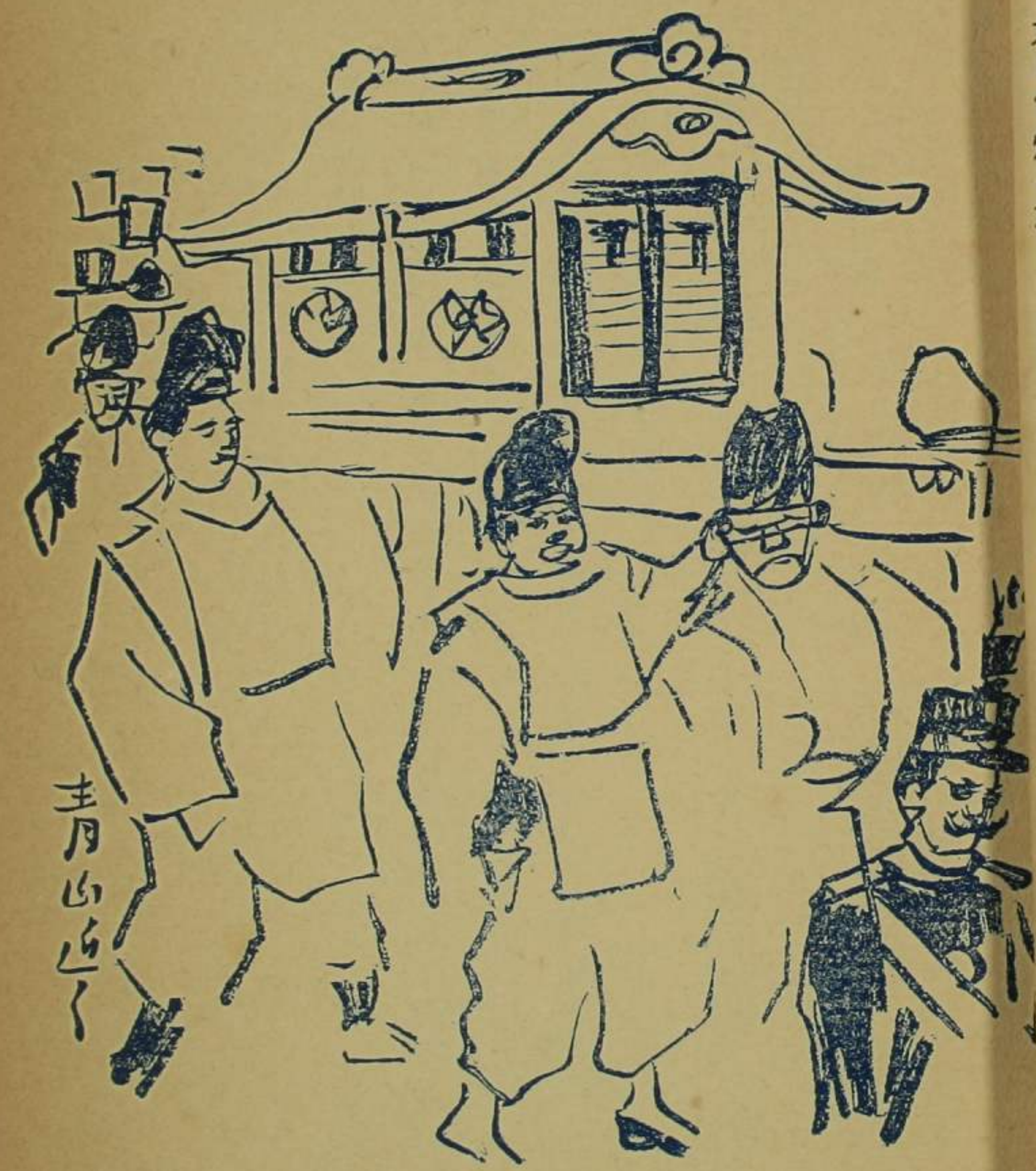


な待合に折れずに、赤坂停留所から真直に、豊川稻荷、青山一丁目に線路を出る  
 青山といふ名から、最う感じが佳い。廣々とした周邊が清浄で、零圍氣が何とな  
 く青味に、大空の青と、キビくして波うつてゐる。  
 青山の通から觀た雪の富士は、麴町からと違つて、甲州に近く更に神々しい、  
 遠方の白雪が袖にうつる。

練兵場からの富士は、銀の大芙蓉峰が、武藏野の木立の上に、姿勢よく、手を  
 伸ばしたい程、馬上丈夫の心魂を高揚せしめる。  
 青山の墓地に、明治の小説家紅葉山人が眠つてゐる。

枯木に電燈の花

冬から春、樹に葉なら枯木立の頃に、東京到る處、電車の通る道筋は、宛で枯  
 木に電燈の花が、赤明く一時に咲聯なつた様で、その美觀は比べるに物は無い。



主月山画



礫川江戸川の夜景は、石切橋からして、河縁の黒い櫻樹に電燈の花が、飛び  
 く〜に目が醒めるやう。白鳥橋の邊りで、電花は爛熳煌々と、一緒に咲固まつて  
 ゐる。

濠端線でも、何處でも市内、枯木のある場所は、電燈の球花が、美しく夜を装  
 飾る。星からは眞に別世界だらう。

科學の力は、文明を産み、且つ嫫隨して行くのは、之れ神とも謂へる、自然に  
 反抗征服する人間のパワーの表現である。

雲の林に星屑の輝やき、……東京枯木電燈の花を觀ては、現代文明を謳歌せず  
 には居られぬ。

### 水道橋の畔

水道橋の袂に、一軒詩的な家がある。石灰、セメント、砂利や、多摩川砂を賣



る、屋根看板を上げた、小さい家だ。  
 家は殆ど、橋の向ふ蔭に、潜む様なものが、濁つた掘割の水邊に在ると、善く調和して、石灰杯を賣る横看板が、何とも言へぬ趣味がある。  
 私は此橋を通る折、支那か朝鮮邊にある、小風景の様に聯想をされる。向ふ飯田河岸の方に、石炭問屋から煙のやう白うたつ。  
 時に橋の下、掘割の泥中に脚を没し、箆で泥土をシャクツてる、汚穢い男を見る。偶には簪や指環や、金物の類が入る奇運があるさうな。——深い泥土のやうな世間には、逆も光つた美しい心が覓められぬ。  
 スグ傍に、礫川砲兵工廠の高い大きな煙突が、黒煙を熾盛んに蒼空に吐いて立つ。

### 豪放な牛込見附

見附といふ名は、御濠端と、どうしても昔の江戸時代から、残つた匂ひ、床かしい稱號で有る。見附の中で、牛込見附は、何となく濠の工合から、神樂阪を控へて、市ヶ谷、飯田町へ掛け、古い松の樹が、土手の青草からぬつと突出てゐる、此の邊りの風物は、男性的の放膽な趣が、誠に氣に入つてゐる。  
 甲武線、磨いたやうな色塗りの電車が、躑躅の花の頃は殊に好い。此線は山の手のマーガレットの女學生、高襟男が朝夕姿を見せる。濠の前の線路の電車とは、客種が異ふ様なのも一奇である。斯う考へると、流石東京は大都曾だ。  
 停車場へ入口、櫻の植込がある。汽車發車の時間表の白ペンキ塗柱、花、紅葉、狩獵といつも茲に掲示の札が出る。角の自働電話と、中々詩趣がある。  
 上の道路は少し高く、春より夏へは柳が芽を吹いて、緑の糸の風がそよ〜と、客待する車夫の幌を匂はす。櫻をながめ、柳を嗅いで往來すると、見附の石垣と濠の水と一緒に、昔の江戸時代といふ感じが、胸に充實して来て、懐かしい



ローマンチックの時代に、多感な者は引返される様に思ふ。  
 また見附といふと、警固の武士は素より、駕籠乗物、大鳥毛の大名の行列杯も、  
 髻髻として眼前に繪のやうに浮いて来る。昔の徳川時代には、那の石一個でも、  
 素町人よりも、威光を放つたと考へると、今更憎悪の念が起る。  
 牛込の橋、飯田町の下方には、石や材木煉瓦を積むだ荷船が、浅い泥水に腹を  
 浸けて居る。小石がゴロ／＼ザア／＼音がして、傾斜した廣板の下から投落され  
 てゐる。何かの工所用だらうが、白い礫の潤躍して亦盛むなりだ。  
 見附を曲つて、土堤に登り、市ヶ谷の方を見渡すと、眺望、洋館の白いのが、  
 木立の間に表はれて、浮く千切れ雲は、全く現實と異つた考へを抱かせる。  
 私は土手の青草に佇むで、西の方真圓い焼ける夕陽を拜した時に、先刻の人間  
 の世と大々的駈離れた、雲のかたなの天國を思ふた。





姿の柳橋

柳橋の名が、東京式で、華奢なよりも、何となく明るくて、藝者の巢としては、場所が真正に佳い。隅田河も顔を見せてゐる。

浅草橋も近い、此のドンヨリした水も、濃い悪どい脂粉に、因縁もあつて背景的だ。

以前深川藝者の、意地と張は知らぬが、目下東京では、新橋よりか、柳橋が容色は扱措き、藝の腕と粹とに於て、確に東京第一位である。

新橋といふと、汽車の煤煙とお髭臭いが、柳橋は、隅田の潮氣と柳の匂がする。漢詩的ではあるが、此處の景色が好い、支那蘇小が家を思出させる。

烏羽玉の、多い黒髪の方筋立櫛を挿むで、艶の毛を膨らませ、阿嬌が湯歸りの姿は格別、真に意氣で仇ッばい——頸筋に白粉が油のやうに。

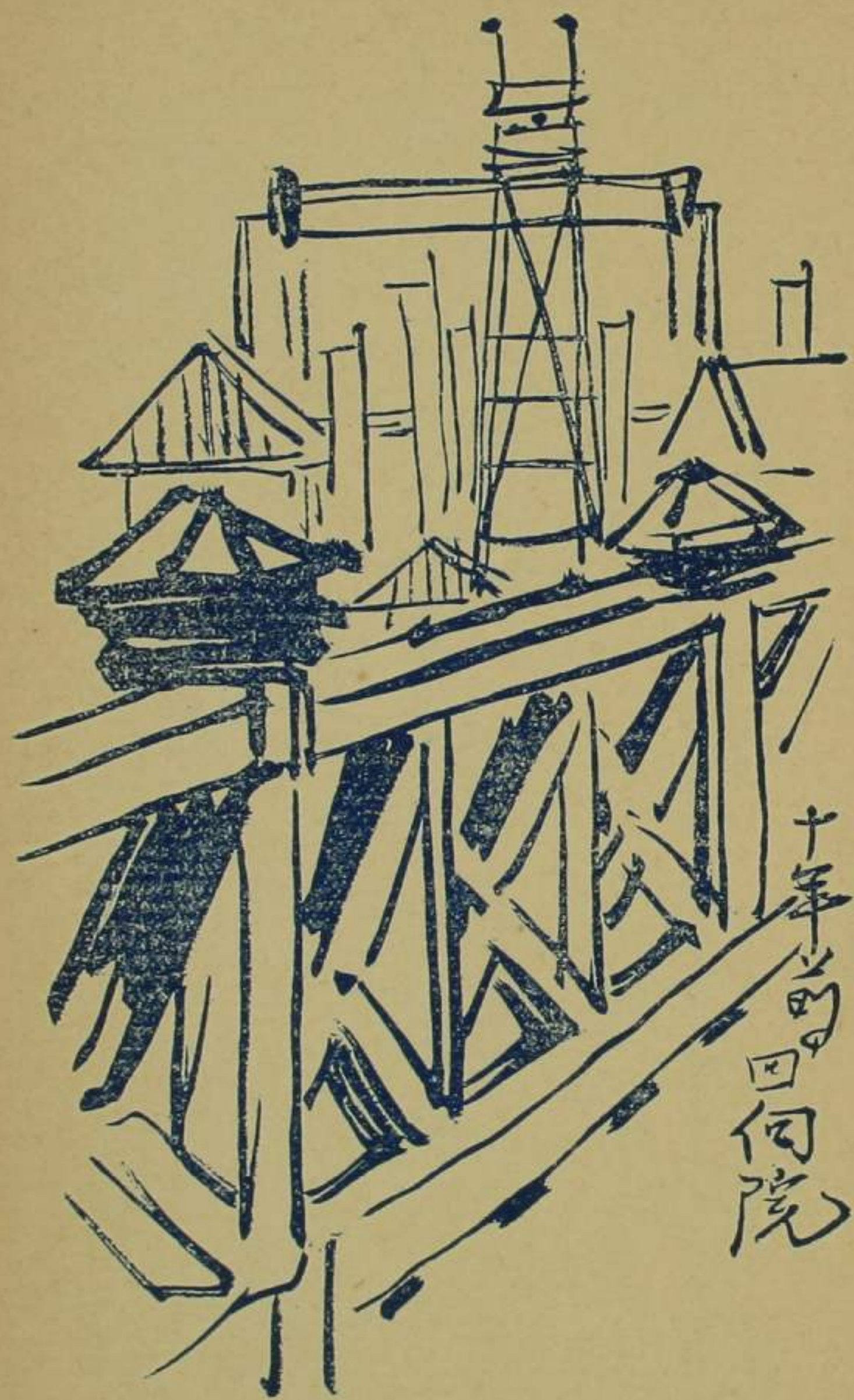


大阪の新町、西京の祇園先斗町。楊柳の数は少くとも、東京柳橋の方が藝者として優つて居る、柳橋にやなぎの様なたよやかな姿の女が……。

### 奥の礫川の鷺

礫川、林町原町附近は、五位鷺、白鷺の名所といつて宜い。植物園が近いからだ。

ガア々々と啼いて、少々不風流な聲だが、月夜、霜夜杯には、殊に寂しい林町の、宿の窓で此啼聲を聴くと、中々悪い所ぢやない。秋の宵更けて、空に淋しい魄の叫び、春の夜に白鷺を、私は妖精のさ迷ふのかと視たことも有る。嘴の長い、灰色の五位鷺は、巢鴨の伊達家の松林に、澤山棲つて居る。夏も秋も何羽も、空を軽くオドケたやうに、植物園の柱へ通ひ飛ぶ。白鷺も獨り高く、孤雲を侶と舞ふ。



十年の回院



四五年前の田圃が、今は家屋と變つた、西原町 林町、之から未だく西北に家が、マツチ箱の如建増されるだらう。

礪川、此の附近の空氣も替ると共、蒼鷺、白鷺も、漸々巢を更へて、終ひに影は消えはすまいか、愁人は之を雁と聞ともよい、愛すべき自然の子よ。人間は悪くなつても、鳥は何時までも造化の儘だ。

五位鷺は小石川の名物だ、白鷺は林町の空に清高な君子である。

### 両國橋と國技館

兩國は、花火と、相撲と、元祿の義士の勢揃ひを聯想する。

本所、兩國橋といふと、舊幕時代は、江戸中の人氣と威勢が、あの橋の上に凝集つてゐた様だ。瞻ッ玉の江戸ッ子は、當時欄干の上で逆立の藝當を行ひ、隅田の流へ洶然と突落されても、平氣の知らぬ振で泳いだやう。ドウも左様思はれて



ならぬ。

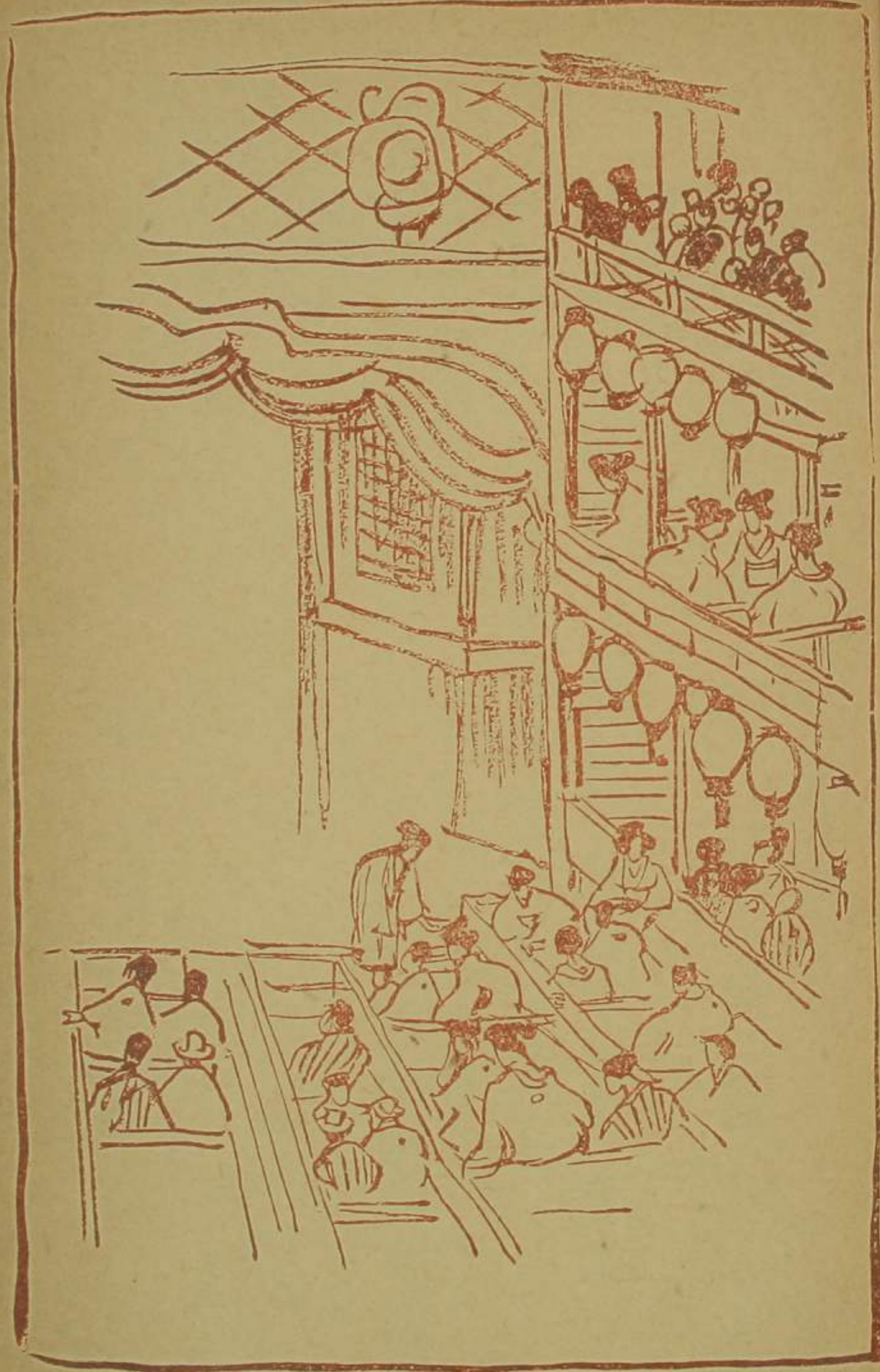
江戸の名物の花火は、兩國橋の魂で、江戸ッ子の魂を象徴した物だ。金費  
ひの荒かつたも恰ど煙火的であつた。

隅田河も、兩國橋の上から眺めた水が、一番に流れの具合と、色の淺濁りと、  
見ても飽かぬ心地がする。之は尤も人の神經の故だが、日本橋濱町と、本所の兩  
區に架る橋で、自然背景、前面が宜いから、随つて兩國橋から瞰下した、隅田の  
水も此處が第一等となる譯である。

橋の手前の濱町には、白粉焼けのした艶な女、川波には白い鷗が浮く。  
隅田の流を寒中水泳する人がある、勇壯なことだ。

兩國橋を向ふに渡ると、古い猪を喰はせる家が在る、時として冬は鹿や猿を表  
に吊してある、今歳は亥歳だから、兩國の此家は當るだらう。

兩國といふと、回向院の相撲が附物だ。角力も國技館と爲つて、建物は洋式の





堂々たるものだが、其生命たる眞率放膽の角力道は、追々錆びれたのは遺憾である。金銭上の利益問題に苦勞する様では、矢張り以前の、相撲小屋で櫓太鼓の時の方が、單純淡泊で宜しかった。

ペンキ塗の國技館に成つて、大髻裸體が土俵に格闘すべきが、藝人的に且つ八百長等行はれるは残念だ。廣濶い鐵骨の建物は男性的で結構だが。

小利巧に智に囚はるゝ現代に、相撲丈は赤裸々に、天真の儘で有てほしい。

本所兩國橋の袂、一月と五月の空に、蓆掛の小屋、雲も無い青天井高い櫓太鼓が河風に響いた、其の昔が懐かしいのである。

### 東京の芝居

東京の芝居は、團十郎没して、梨園は、彼に代る腹藝の名優は出ない、骨髄まで凝性の名人肌な俳優は見ぬ。此折の空氣と今とを比べば、合點ができる。然し



新派は左して變りはない。

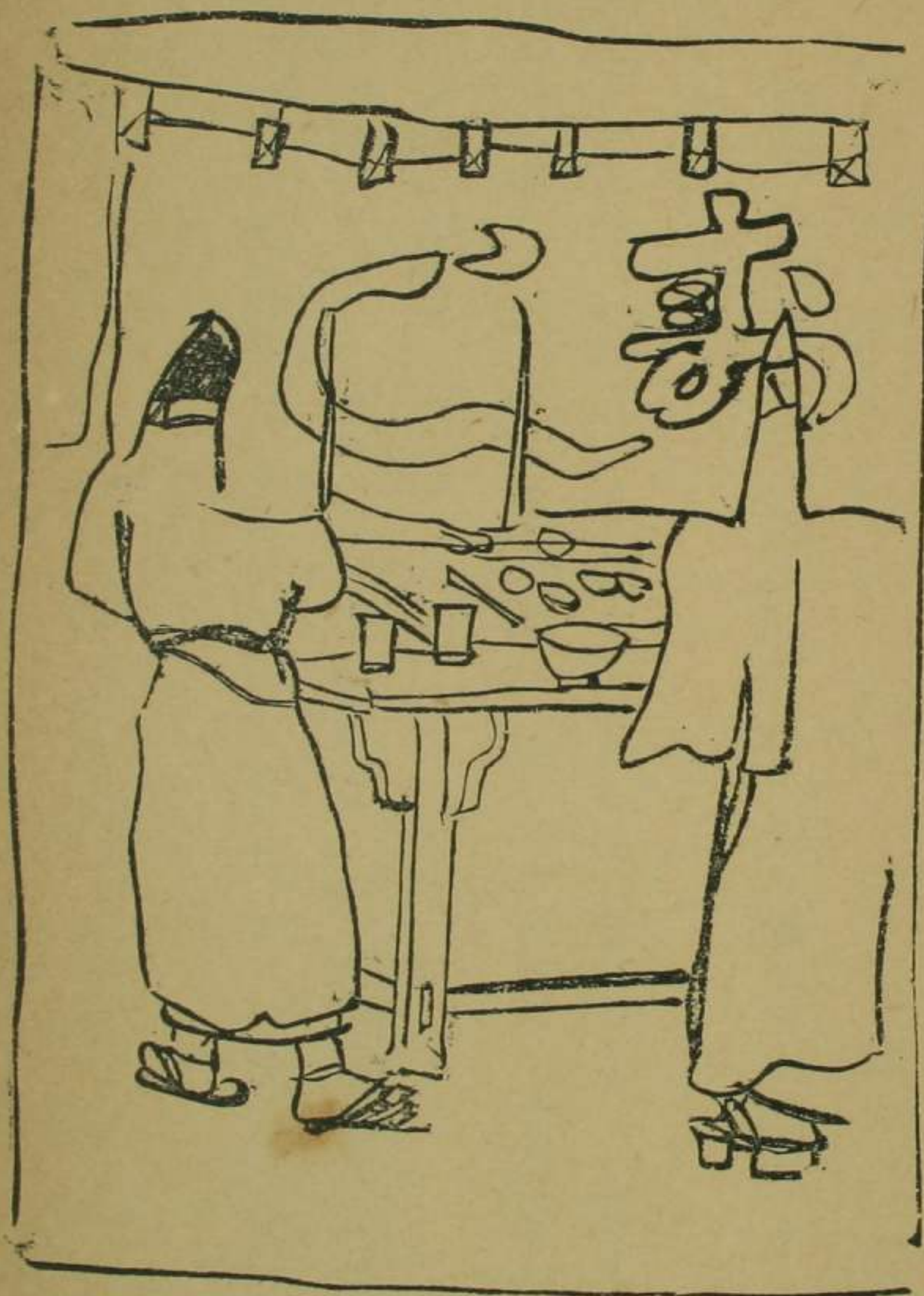
歌舞伎、明治、新富、東京及本郷座は、東京の劇場の大なるものだ。上方の様に、一緒に集並せず、市の飛々に在る所が、廣い東京だからと云つても、常は娛樂場も受取れず、氣を負ふ所が面白い。

その看板も、上方と違つて、以前からの江戸式、鳥居式で、荒事杯には持つて來いだ。京阪の様な、説明的な巧緻でない、此のこゝろ持もい。

此節當地に、四疊半的の哥澤が流行るが、芝居は大劇場風に趣くのは結構だ。東京各劇場内外の空氣は、日常生活と全く距離れた、藝術的情調が溢漂ふてゐる。

### 屋臺店の灯

東京の屋臺店は名物だ。東京人は見外坊であるが、其一面、大に洒落な、拘は





らぬ所が有る。市内に骨の様な、屋臺店の跋扈を見るのも不思議でない。

廣い東京、到る處屋臺店が、辻に、中にも、角には、點々として在る。深川、

本所、京橋、日本橋の下町に殊に夥多い、淺草は無論神田にもゴテテだ。尤も

商賣は夜の事だ。

種類は、壽司、天麩羅、おでん、牛めし及び大福菓子等で、夜遅く、車夫や勞

働者、夜業歸り、新聞配達達の連中は、一番の御客である。酔歩蹣跚として、此の

骨の店を襲ふ人も中々ある。

冬の夜霜に更けて、森寥たる吉原の土手に、赤い行燈牛飯屋の、其れの細い寢

い如な灯も、俳諧趣味で、妙に乙なものである。餓ゑた乞兒が彷徨つてゐる杯は悲

慘な晝だ。

煌々白晝を欺むく電燈、都大路の豆の如な屋臺店の灯、……之も都會の兩面單

調でない所がおもしろい。



鯉幟と武者人形

下世話に、江戸ッ子は五月の鯉の吹流し、と皮肉に言ふが、真に東京、新緑が天地を燃やす五月の候に、巨さ一間もある長い鯉の吹流しが、風を孕むで、都會の屋根瓦の上青葉に交つてゐる観は、奇抜で奔放で、太陽は赤い繪具の鱗を射照らす。

東京市、男の兒を持つ家は、其子の運と前途を祝つて五月幟を樹てる。

一年中の壯快期新緑に、暖い風に翻へる鯉の吹流し、蓋し男性的興味の最上である。

節句の五月人形、之も東京人が喜んで行なふ事だ。愛する小供の爲に飾る、金箔の鎧武者の人形、赤や紫の玩具の小さい旗幟、見るから美しく凛々しく、娛樂としても第一等だ。西洋人は特に、日本の武者人形を觀賞すと聞く。





元氣旺盛な新緑の候、東京家の内、屋根の上で、此の美的な興趣が發揮されるのだ。

右の二つは、男子の喜ぶこと、亦江戸ッ兒の矜誇とする所だらう。

### 郊外の新築

東京の町端れや、市外に家屋が建殖えるのは、驚くほど多く、そして早迅い。

一日散歩でも爲る、材木が組まれてると思ふて、後で復通つて見た時、モ一新家が建つてゐて、魂消げることもある。

狭少の地面、土臺石の上に、材木と屋根の下も出来、かう成れば、恰も瞬間に、壁も何もスグに、家一軒と化はる。

詩人ハーンが、我國の新家の建つ早さに、宛で神秘的だと、駭いて記いてゐるが、之は誇張でもない、全く左様な物だ。



小さな貸家、九尺二間位は、大工の鳥渡の手間で出来て仕舞ふ。あの骨の如な細い柱は、忽ちに組めるのだ。  
 東京市が發展して、都會の尾に、之れからマッチ箱の様な、貸家が建増される事だらう。

大きめの建掛の家、郊外、大工職人が休息の煙草の烟、……向ふに小供等がドンドの火を焚いて居るのは、中々詩的な味なものである。

### 日比谷公園

新しい東京の、新しい趣味を、常に集注して居るのは、日比谷公園である。

此の鐵柵は、綠樹とて取圍むだ四角い、廣い平面的の公園に、現代文明人の新好尚が、最も華やかに、明らかに、具備し、開展されて在る。

運動場、音樂堂、噴水、共同ベンチ。とりわけ、各種珍奇な西洋の草花が、魔

界がこゝに開けた様に、人目を狂喜せしめる。日本趣味の植込も腕を盡して心地がよい、迂廻した道が堅く固つて、ステッキを鳴らしてみたく成る。

珈琲一杯でも、日比谷の味が有る。この公園に入ると、誰でも大東京の、新空氣中の人といふ感じが爲る。

朝日夕日、赤い雲、白い雲、……諸官省の宏大な建築物が、四方に在る丈け、華麗な壯觀は、正に帝都第一である。

大劇場帝國座が、近くに出来る。新なる脚本と、新しい頭腦と腕との俳優に依り、國民藝術の花が開くか、待遠しく懷はれる。

赤と緑との小旗、電車は陽氣に忙しく駛る。砥の如な大道を燕が翔ける、自働車、馬車が勇ましい音を立て、通る。

濠端の柳が、天下の春を燃えて見せてゐる。  
 日比谷公園の柵外は、空氣が日夜活きて波動してゐる。



貴衆議院の高い窓が、火の辨舌のやうに輝いて望まれる。

目白臺

目白はスグ僧園を想はせたが、今は女子大學の目白と爲つた。

目白臺は、抹香臭かつたは以前の事、屋根の尖つた洋館が、寂しかつた處にも  
建ち、新しい空氣が、樹木の吐く息と、一緒に高臺の上に漂つてゐる。

女子大學へ行く道は、音羽から坂を登つて、未だ田舎臭い空氣は残つては居る  
が、唯一の女子大學の、クラシカルだが建物存在が爲に、附近の百姓家まで明る  
くなつた。

早稲田から目白臺は、緑の大刷毛で塗延した續く森林、その中に畫の如な洋館  
舊いバナラマ式で、其上にたなびく靄と霧と煙、ローマンチックの白雲が青空に  
夢を描がく。





目白は、落葉と鳥との雜司ヶ谷に隣る。位地として學校は、最もおもしろい處に在る。

女子大學は、新しい女流教育の全國の中的である。頭髮と服装と袴と、その何の關する所だらうぞ。

### 道玄坂の陽窟

青山七丁目を、澁谷の踏切まで、田舎と新開町に、電車が東京の空氣を入れた様なのが、澁谷の道玄坂である。

飛んだり、續いたり、二階建の料理屋、藝者屋も在る。平常、薄暗い、重う沈むだやうな此邊の空氣に、一種の荒い、耽溺的情調が漂ふ。田舎臭ひ三味線の音も夜遅くまで、障子を洩れて来る。

牛肉店、一品料理でも、家が何となく陰暗に、女中まで廢頹的の顔色をして居



併し澁谷の、此處は熾な強い生命、歡樂の中心かも知れぬ。澁谷も漸次に、是から都會化するだらう。

夏秋に家の垣根に、コスモスの星と咲いてたが、郊外の澁谷は、此の趣味を以て開けて行けば可い。

道玄阪は、澁谷中の陽盪な、耽溺の夜の場所だ。

道玄とは昔、阪上樹木鬱蒼と晝も暗かつた、其折の盜賊の名だと傳へられる。果して真か奇である。

### 蛤趣味の深川

蛤蜊によつて、深川を連想すると、深川は東京中で、趣味と氣風の、最も異つた所だらう。

深川には、昔の江戸趣味の、僅か一部が残つてゐる。





町が何となく古く、濕つて薄鼠色の、海沿の臭ひがする。蛤淺蜷の本場だけで、狭い道は、生の貝類が吐く息か、鼻に柔かに些に腥ぐさい。

堀割つた小い河は、濁り切つてゐる、無論海近いから潮だ。

蛤淺蜷を小丘に店に積むで、貝賣る家がある。奥にスグ河水が見える。

商賣屋でも、上等な場末程だ。小料理屋でも深川丈けあつて、蛤鍋は美味い、

家の建具合が、空気に調和して、所謂乙な江戸趣味が有る。

名物深川めしは、飯に淺蜷をプチ込む物だ。洲崎遊廓は背中合せだ、處は争

はれぬ、角菊の鯔背の兄哥に會つた。

葦と月で唄はれた、越中島は昔の面影もなく、物質に破壊されて、床かしい江

戸趣味は水に沈み滅むだ。

### 傳通院と瞑想



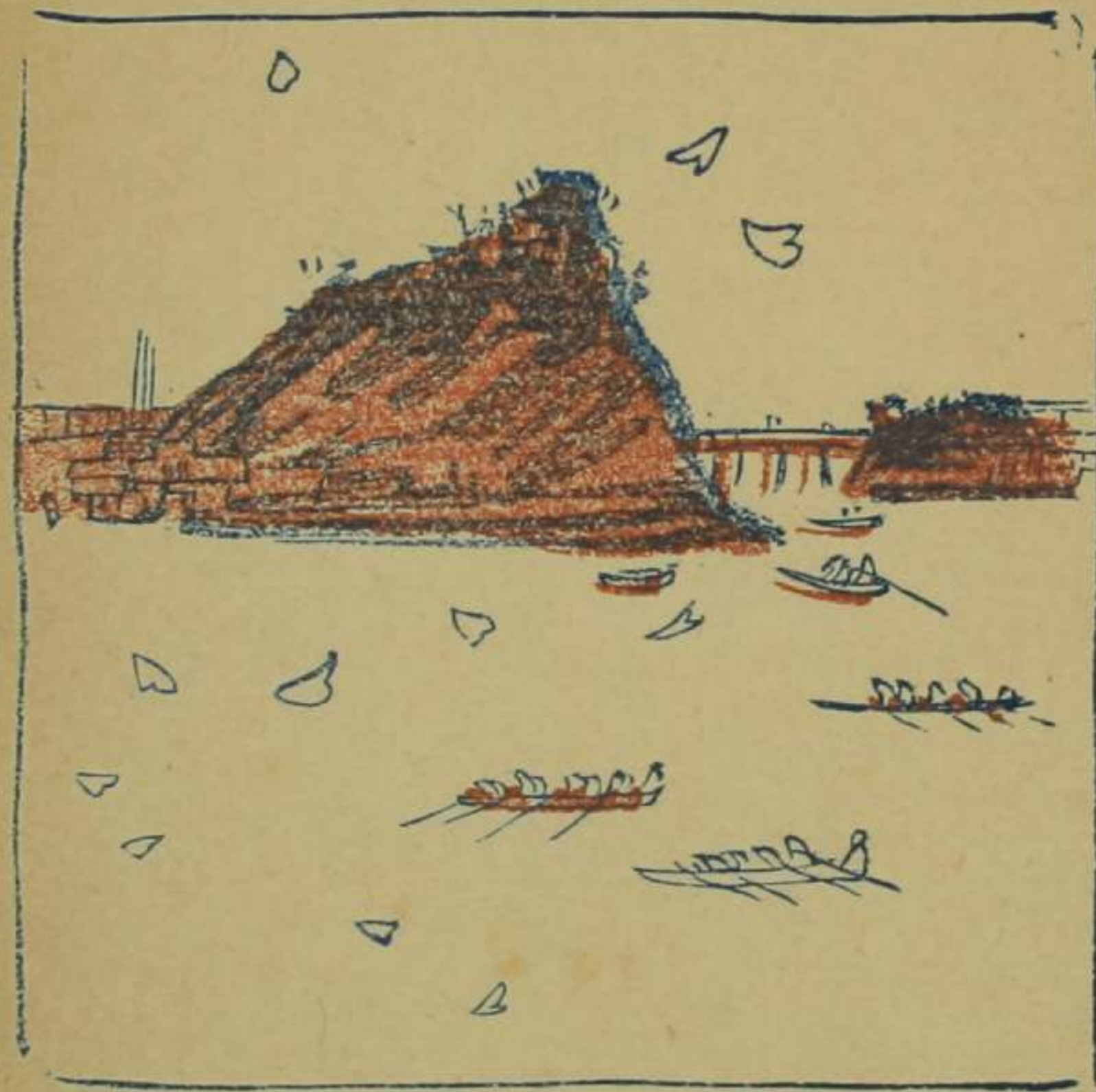
礪川傳通院は、有名な古刹だ。二三年前、本堂が焼けて惜しいことをした。境内、御開帳の折は、茶店が出て賑はふ。紅の巨提燈が門へ吊される。何本かの櫻が春は咲く、毎も鳩と小供とが遊ぶ。佛の足形のある、滑つこい蒼い大石が据はる。

横手に、蔓草の生繁つた、卵塔場や、墓が澤山在る。小さい板圍に、心中比翼塚があつて、線香の薫り煙が絶えない。

奥に、諸大名の縁故に掛るのだらう、種々の奇體な形状をした、定紋附いた、偉大な墓が幾つも立つ、臺石許りで、頭が草地に轉つて居るもある。物質果して何ぞ、秋はその石蔭に虫が鳴く。

本堂の裏手は、草の丘だ。向ふ、礪川指ヶ谷、白山一面が、木立とクツキリと見える。紙鳶が高く雲まで揚つてゐる。

墓の捨石に、腰打かけて、物を熟と瞑想するには、寔に草が静かで善い。





礪川傳通院の内外は、東京稀覯の、古色の剝げぬ懐かしみがある。

### 春の隅田川

吾妻橋を渡つても、昔から名代の竹屋の渡を舟でも、隅田堤に着く。以前は百本杭と、竹屋の渡は、入水心中の本場だつたげなが、今はそんな事は無い。

言問團子、都鳥は、變らず隅田の水に縁がある。

花の頃は、墨堤幾里を香ふ雲で埋める。櫻も人も水も、一刻千金の春に酔つて了ふ。

一錢蒸汽、短艇、和船、腹を温かい春水に浸けて、游泳する。上げた帆も、春風に孕婦の如な心になる。

白髯神社、梅若塚、詩的名所もある。詩は春に一ばん其の光を發揮つ。

醉漢の頬のやうな、春の赤い日が暮れて、墨堤の花下、よごれた紅粉と、爛熳



した如な酒の臭ひと、生温かい風が水に溺れ流れて……。  
待乳山の森に、妖女の細い目のやうな灯が見える。

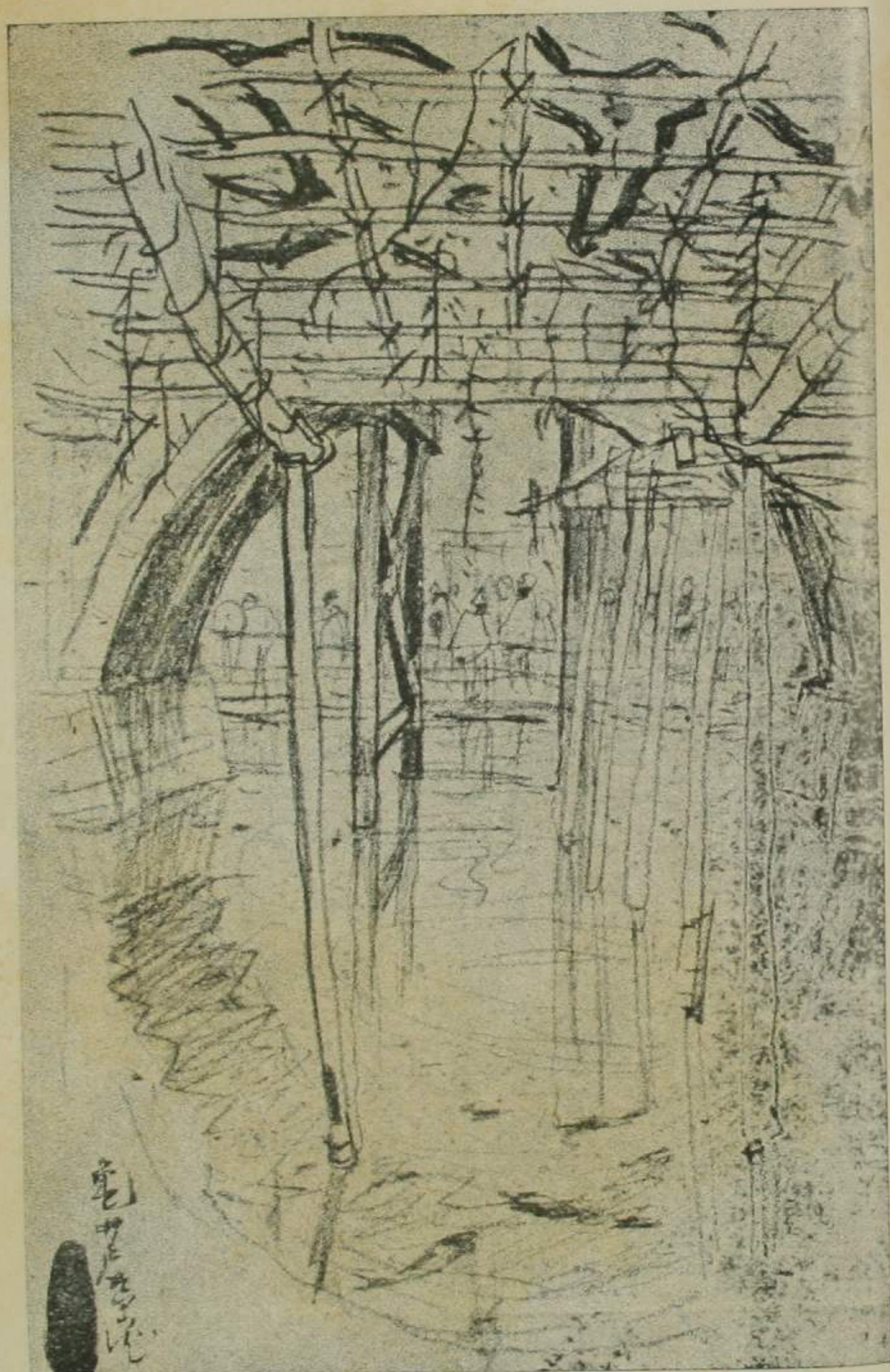
### 母子地藏

母子地藏は、芝白金のお寺に在る。哀れで名高い、二本板殺しの、母小供と女  
中の地藏様だ。

赤い弘法大師の長提燈を吊した、黒塚の門の裏、一間位な狭い圍りに、母親と  
小供と、都合五體の可愛い、石地藏が立つて居る。

銘々の地藏の首に、小さな涎掛をして、線香が朝夕、縷々と細う、物悲しげに  
薫つて白う立昇る。

南無阿彌陀佛、誰れの參詣人手向の仕業か、板圍の内に、紅の涎掛、犬張子や、  
繪馬やが釘に懸聯ねて、見る者をして、同情の涙を絞らしめる。





其の傍に、有志の寄附金標が建て、在る。

潤達な、勇みの江戸ッ兒の半面は、斯うした優しい美な所に表はれる。元來涙

脆いのは、強い江戸ッ兒の持前である。

嗚呼、哀れな母子地藏！我が日本文學のローマンチック、の優美な特長も、蓋

しこういふ點にある。

大久保にも、同じ悲惨な母子地藏が出来たさうな。

### 亀井戸の昨今

亀井戸は、臥龍梅を以て名高いが、今は然うでも無いやうだ。裏門の御神燈で  
噂が高い。

本所、亀井戸に行く迄で、太平町通りの空氣は、朱で書いた牛飯屋や、墓場で  
不愉快だが、亀井戸近くなつて、濁川に浮く舟や、小洒落れた割烹店等、流石情



景の面白所がある。

古い龜井戸の境内、雅な中に神々しい。爰で春は鶯を啼かしたい心地が爲る。

赤毛布を敷いた、茶店の床几、名物葛餅を賣る。白い葛餅はちよいと味な物

だ。

御手洗に、紺や淺黄の奉納手拭が、春風にヒラ／＼動く。鮮かな新しい色が、

頗る感じが佳い。

本社の周圍に、藝人俳人の建石が多い、場所が振つてる。

中江兆民翁の、巨大な自然石の碑が立つ。東洋のルーソーは、永久宜い土地に

眠つて居る。

裏門の藝妓屋で、意氣な三味線の御凌へが始まつてゐる。

### 三越の使者

白い三筋の線の付いた、圓い小形の帽子を冠り、白脚の自轉車に軽い體を乗せて、飄然と風を切つて行く、洋服のボーイは、之れは日本橋三越の使ひである。

自分は初め、ふと町中で出會つた折、郵便局としては妙と思つたが、三越の裏

門で、此の異装のボーイが三々伍々、出入りするのを視、小供大にやる哩と頷く

と共、可憐な活潑な洋服姿だと懐つた。

服は黒地に、襟に、手首にも、青く羅紗で縁を取つて、胸に銀色の光る金の徽

章を附けて、露西亞風とても謂はうか、少年の姿は凛々しく、勇ましい。若々し

い血潮が、健全な手足に漲り巡つてる様だ。

少年は、音も立てず迅く、自轉車に跨つて、飄然として走る敏活さ！自身の尻

の處には、風呂敷包が括つて乗つてゐる。

三越の使ひのボーイ、如何にも文明式だ。——大都會を自轉車で縦横に宙と駈

廻り、こんな勞働は小鳥の様太だ結構なことだ。私は田舎で土掘する百姓の子を



想つた。

### 義太夫と浪花節

義太夫の熱も、近來は落語も何の寄席も、甚く淋しいやうだ。

女浄瑠璃といふと、瑠璃の字が良いが、女義太夫の名は以前は墮落を意味した

が、今は學生も大騒ぎを行ふ程の馬鹿者も無い。

容色と藝道と、一時大流行したとき位、目下では兩方共に見られない。何にし

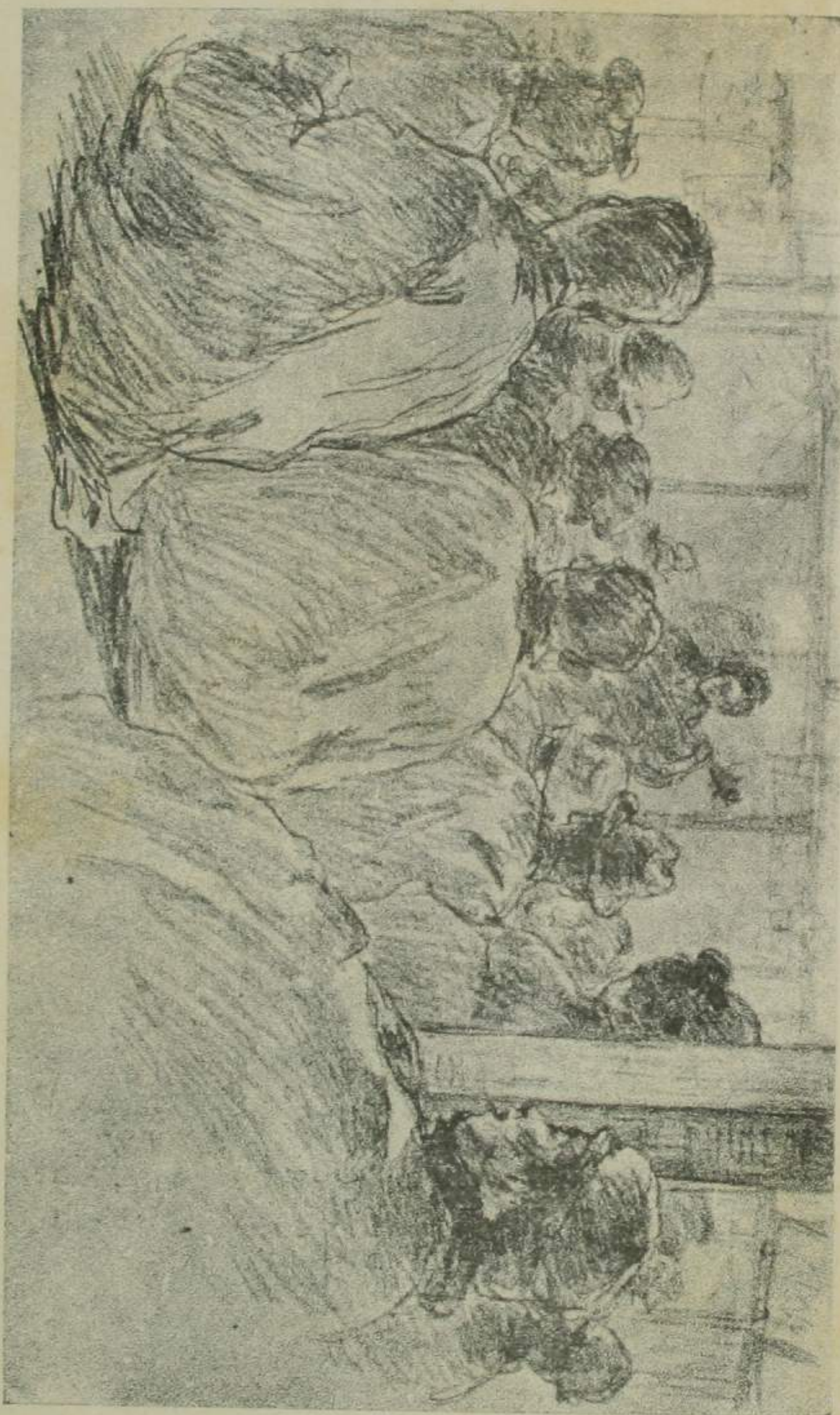
ても女義太夫は凋落の形である。

女義太夫は、青年相手であるが、今日の書生や若い者は浄瑠璃より、感情の緊

張切迫した、現代に觸れた薩摩琵琶の類に走る。併し女義太夫に、非常な美貌と

音が有るは格別だ。

今日と雖も、肩衣白地の袴に、ハイカラ廂髪ひさしがみの美しい娘義太夫もある。聲で聽





かせる老巧なる藝人も數へられる。

淺草雷門の傍に、東橋亭といふ寄席、大入の紅提灯や看板や、軒は四季に賑

かだ。晝席もあり、デン／＼の絃の音は、隅田の流と絶え間もない、繪看板も、

之では中の藝人は嘸艶と想はれる。第一隅田に近い場所が佳い。

義太夫は女の獨立して、美の生活が送れる業だ。

浪花節は、之は雲右衛門を絶頂として、今日では客足が餘程減じた。一時は東

京中の色物の寄席が、大恐慌を來した位であつた。

關東關西の二派あるが、關東節の方が聲は低いが、聲調が沈痛悲壯で、三味

線も冴えて居る、そして品も持つてゐる。講談より節と糸が加はる丈け、流行

る。

義士傳杯三席、立續けに講む眞打もある。新派の小説新聞物等は向かぬ、矢張

り武士道とか俠客物が適する。



追々客種も上等になつたが、高座の藝人に紋附袴の堂々たるものだ。  
闇の夜に、身を切られる如な新内の流しも可いが、瓦に霜の光り更けて、職人  
か、甚い美音で、浪花節を轉がして通るのは、男らしい悲壯で腸が断たれる。  
山の手は兎に角、下町趣味として、東京ッ子に、永久に、浪花節は人氣を失は  
ぬだらう。

### 業平町と万年町

業平町といつても、昔業平のやうな美男子が居るのでも無い、本所の木賃宿の  
ある陋巷である。  
一體本所は、空気の冴えない、重く底沈むだ様な處だ。その中で業平町は、狭  
い陰暗な木賃宿の通りだ。屋號の書いた、白い門行燈が出てゐる。  
浮世の敗殘者が、一泊六七錢で雨露を凌ぐ。土方、立ん坊、輕子、辻藝人や門





附杯、夫婦者も宿つて居る。業平町には、白い首の夜鷹姫が多いさうだ。

万年町は、下谷名代の貧民窟だ。薄運な人間の生命が、万年延びることも有る

まい。

曲折した、ぐる／＼廻る細小路、鼻垂らしの小供が、縄と棒とを以て遊んで居る。

南京鼠の箱の如な薄臭い家に、車夫、傭人夫、下駄齒入、露店商人等が住む。

結髪のこわれた女房が、狼の如わめて居る。

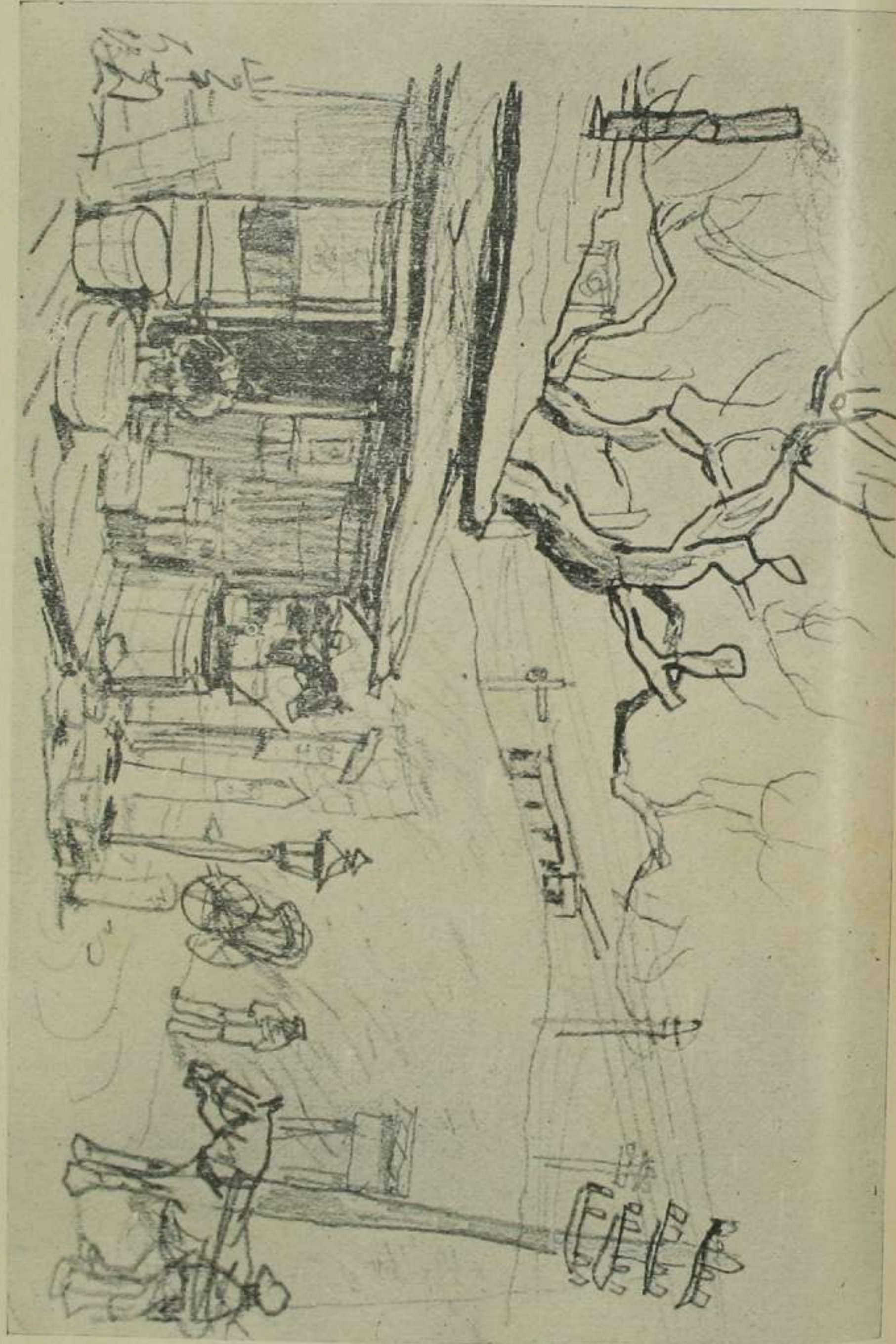
町内、小居酒屋の酒は酸ばく、肴屋の魚は色褪めて腐つて居まいか。此處の

空氣は呼吸するに堪へぬ。

上野の杜を出た鴉が、いやな聲に啼いて低い屋根の上を過ぎた。

紙屑拾と魚腸拾





東京の街に、下手な漫画か、影の如に歩くのは、紙屑拾と魚腸拾とである。  
 油と煤で煮染めた様な着物、ボロ／＼の股引か洋袴、穴のある肩へ大きな竹籠  
 を背負つて、紙屑拾は、長い竹挟みを右手に、左には更に小さい目籠を持つ。  
 朝暮、首を下げ弓曲りの姿に、到る處歩き廻る。例の長い竹挟みで、屑でも何  
 でも、チヨイと拾ふて、チヨイと背の籠と、手籠へ投分ける素早さ。鳶が鼠を攫  
 ふよりか巧妙だ。  
 真黒いお釜帽深く、少年で、破れ長靴杯を穿くのは、宛で西洋の乞兒だ。天路  
 歷程を讀むと斯んなのに出會ふ、銀座邊を晝日中、平々然と歩いて行く。  
 魚腸拾は、一層下等だ。日本橋河岸には、眼を光らせて、小狐の様に魚腸を食  
 る。時に芥箱から腐れか、つたを拾上る。彼れの鼻の官覺は全く麻痺してゐる。  
 渠等は、恥もなく都會が零した汚穢い、腐敗れた物を拾ふ、憫れな双生兒であ  
 る。



紙漉く音羽の町

道幅は狭くはないが、宛で田舎の賑かな街のやうだ。表障子の飲食店、薄汚い商店、小石川區の場末である。

音羽の特長は、紙漉業の盛んなことだ。古朽ちた様な家の裏庭に、黒い板を建て、並べて、男女の職人が、紙を製造して居る、手觸りも嫌な色の淺草紙もできる。

音羽の薄暗いやうな町で、倉末な紙の製造、恰ど濕暗の町から、浮かぬ心が生れる様だが、天氣の晴れた日には、春秋麗かな光線が、製紙を貼つた建板に射當つて、一種の詩趣が有る。

鼠坂は、鼠の長い怪しい尾みだ。此邊の家は、廢頽的氣分が充ちてゐる。夕景に、服装のわるい女房達が集まる、小魚店の裏は、貧民の棲む長屋續きだ。



音羽の突當りは、有名な護國寺だ。赤塗りの巨な門に、白い豆のやうな鳩、境内はヒツソリとして、空氣が飽までも清澄である。

### 江戸川のスケッチ

花に雪に、礪川の江戸川は、都會の一區域の名所だ。關口のドンドから、瀧と落ちて流れて来る水は、常に薄濁りを爲て、兩側の低い堤畔に、詩味を注いで行く。空の雲が柔かに静かに、雀も燕も影を蕪す。

江戸川は、東京市の北に流れる、最も懐かしい、畫に詩にスケッチに富むだ小河だ。自然の優しい、そして男らしい名を求めるならば、私は直ぐに、礪川の江戸河だと答へる。

石切橋から白鳥橋まで、小さい狭い木橋は三ツ四ツだが、孰れも川に親みを以て、花にも、雪にも、朝晩南北の人を渡す。

此河は秋の雨多い頃に、時折溢れるが、それで岸より滅多に水が上つたことが無い。どこまでも江戸ツ子の、優しい一面を現はして居る。北の岸の方に飲物店と商家の、川の名にちなむだのが在る。小石川に櫻の江戸河がなくなれば、殺風景で土地が唄にも上らぬだらう。礪川には是非詩的歌謠が残らねばならぬ。

寒中の冬でも、小さい貸舟が、河流に繩に繋いで五六艘、夢のやうに浮いてゐる。永く人の乗棄てた舟の中に、忘却と廢滅とが残る。然しガランとした此舟にも、花の春、青葉の節に歸ると、水上の小舟も復活して、棹と烈しき力とに活動し始める。恰も失望した人間の胸中に、勃々たる英氣の閃き來ると同じやう。支那人も日本の少年と共に、江戸川の夏に遊ぶ、故國水天上より來る黄河、注々限りない揚子江の遊びも、人無心に遊戯せば、熱狂終に變りはない。之と逆まに自分

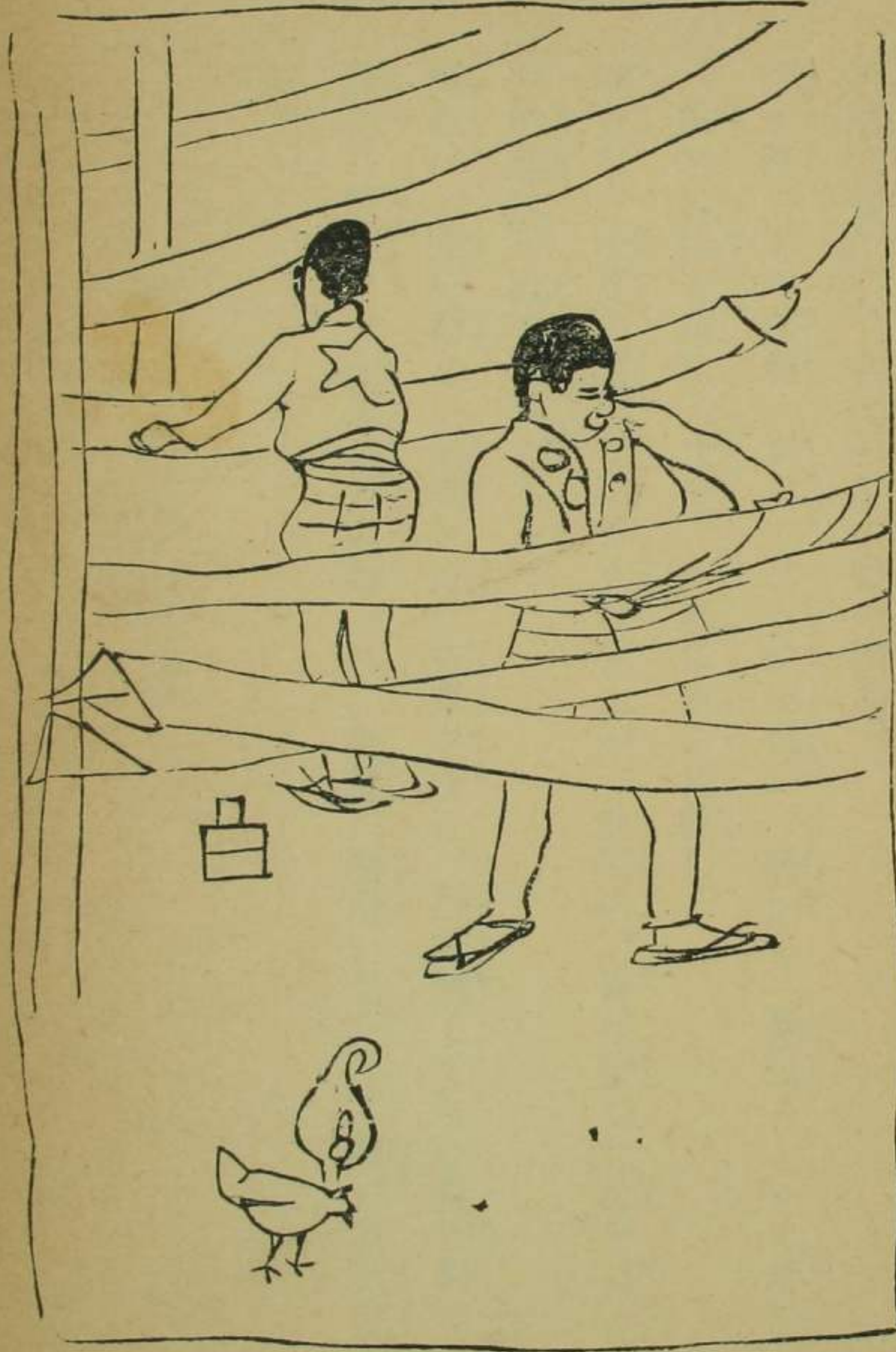
は、音に聞く壯大なる揚子江上に、一度は生命懸けの遊びが行つて見たい。江戸川は、花には水白く、青葉には流が悉く緑に變る。如何しても江戸ツ兒



の、名に縁りの有る、いさぎよい流れである。  
 電車が南の岸を通る、赤の夜の電火が花のやうに美しい。  
 水の曲り角で小鮒が釣れる、香気な釣客も在る。  
 岸邊に合歡木の低い木が生へて、夏の夕暮に、私の學生時代にはやさしい螢の  
 火が光つたが、今はもう見られない。

### 唐辛と納豆

七味唐辛は、納豆と共に、東京ツ子の好物の一つだ。  
 縁日に行くとき、皺の婆様が賣る。赤い粉の唐辛を、山椒、胡椒と、奇麗に臺の  
 上に山盛り、露店の燈に光らせて有る。そして木で拵へた、小さい樽形の容器が  
 可愛い。  
 赤い蕃椒が、此の二勺入の一樽あれば、以て鬼でも泣かし得る。江戸ツ子の嗜





むのは無理でない。

兩國に昔から、名代の唐辛屋が在る。

雪が降つても毎朝、東京では女房小供が、曉から「納豆く」と呼んで賣て歩く。納豆は最も東京人士の、一般に喜ぶ食物だ。

納豆は、大豆の腐つたのと人は言ふが、此種の、奇な變つた味を好くのも、亦江戸的趣味が残つた所だらう。

唐辛は、強い激しい刺戟を好む東京ツ子に、是非無くてならぬ香料である。

眞赤な唐辛を、太陽の光の如くに、世界に振撒いたら……私は誇大妄想狂のやうだ。

### 須田町の渦音

電車の四通する十字街は、神田の須田町だ。市中の繁榮と、生活とは茲に塵埃



と、渦巻いてゐる様である。

誰やらが須田町を、都會の親不知といつたが、實にその言葉通りで、田舎出の  
椋鳥先生杯は、電車の鈴と軋る音と、人間の足音と聲と、風の日などは立揚る濛  
塵と、まごくすれば迷兒に、生命に掛ることも出来る。

然し、昌盛なる都會の活動は此處に觀よ。各種の人間の通行は、日夜活動寫眞  
の如く、人車、自動車、自轉車及び荷車が、縦横四方に、機械のやうに走廻つて  
居る。生活力に競走の熱い油を注いで……。

朝夕刊の新聞賣子も茲が第一だ、鳥渡曲ると連雀町とて、細い空氣の變つた  
所がある。

有名な萬世橋にも近い——此橋は電車が出來てから、名が水の底へ落ちた、小  
の物質が大の物質に敗けたのだ。

須田町の夜景廣告電燈は、俗光りだが強く烈しい。

### 中洲の明暗

蠣殻町から、やさしい女橋を渡ると、そこが中洲だ。こちらから、眞砂座の芝  
居の立幟が、赤紫と色が美しく眺られる。

建物は小い方だが、此の邊りの空氣が、濃厚で情景が、並び具はつてゐる。土  
地が洲だと言はれる位だから、近傍の海潮の温い、しつとりとした氣氣が、軽い  
霧と煙のやう立置るのであらう。山の手に住む者には、何とも知れぬ佳い感じが  
する。

小い楊弓店が、劇場の側にあるきり、別に飲食店も、娯樂物は無くてゐて、其  
れで空氣が艶に沈むのである様であり、中洲はなかく狭いが安くない處だ。

劇場の周圍を歩いて見ると、何の家も、仕舞家風の、閉切つた粹なあやしい二  
階建だ。



中洲に、さ迷ひ溢漲る、濃厚な耽溺的の空氣は、或は此の家並からの故であらう。

### 呉服店と刺戟

日本橋京橋は素より、東京大通り呉服舗の装附は、ドコも驚く許り綺麗に成つた。店頭硝子棚の中は、友禪や縞珍の帯や、春の花秋の紅葉と、寔に絢爛の美を極めてゐる。

明透な玻璃の内に、丸鬚姿の美しい人形杯飾つて、高貴な品物と共に、通覽人の眼と腦とを強く刺戟する。

限りない欲望、眼ばかり高くなつてゐる現代人は、斯ういふ工合に爲なければ、其の心胸を刺戟能きぬのだらう。世の中には天國極樂でさへ、満足せない近代人が出て來たから、大分何事も六ヶしく成つた。





併し、我國の織物として、紅の勝つた華やかな目の醒める様な友禪、遠くから日月が返照するに似た長い縹珍の帯、……男でも立留つて金を鳴らしたくなる。美は人生に、何より第一大切のもので有る。

### 銀座の肉觸感

銀座は東京市で、第一の目貫の所だ。太陽と月と、電燈と瓦斯と、兩側の洋式日本風入交りの、家屋を最も華麗に、明かに日夜を照らす。銀座の空氣は、塵をも銀の如くに鍍金して、匂はす。之も邊りの建物の瀟洒として、歐式なのに據るだらう。それと道の左右は、石鋪と成つてゐるから、塵も尠ない。

私は銀座を通ると、夜分は街道に並ぶ、白熱の温かい瓦斯の燈。どうしても耽美派に没入したくなる、逍遙的の歩行を續けて、無限に瓦斯の白熱の柔かに照る



方へ、迷ひ消え往きたい心地に成る。堅い石敷も、私の脳も、一緒に銀座の白熱に熔けるやうだ。所々に生へた柳も歌の情調を添へる。唯併し、日本家屋に、表面ばかり人造石の、軽浮な女の化粧みた様なのは嫌だ、西洋人に恥かしからう？

### 都の公孫樹

公孫樹は、東京の市中、到る處に見る。我國何處にでも、此の雄々しい樹は、秋から冬へかけて黄金の葉を飾る、之れが大都會に多いのは、奇なる現象ではないか。

東京の人は、公孫樹を、如何に考へるかは知らぬが、私には、銀杏樹は元氣生力の旺盛で、黄なる簇重なる葉は、眞に燃えるが様で、此上ない芽出度い樹である。





紅葉も佳いが、東京の紅葉は氣候の工合か、早く色が變つて落ちて仕舞ふ。で、秋に花よりも美に、黄金色に誇る樹は公孫樹である。

市内の神社には、この木が尠らず植ゑて在る。松とも調和をする。

公孫樹は、古代的植物で、東洋特産の樹ださうな。

小石川に、有名なお怪銀杏がある。秋の頃は空の雲に映つて、晝間火事の如に

黄に燃える。

東京の都會の端々に、堂々と公孫樹が太柱の様、突立つてゐるのは悦ばしい。

### 妖艶和洋草花

西洋花が、邦人に愛賞さるゝに連れ、市内にポツ／＼花賣る家が出来た。大抵

は硝子棚が、入口の左右に有つて、其裏に、西洋の色々な草花の小鉢が置並ぶ。

ダリヤ、コスモス乃至赤狂ふカンナ等、より知らぬ眼には、皆珍奇な、異變な瓣



と葉との草花が、あやしく通る人の魂をそゝる。  
 従來の花屋と較たら、此店は紫や紅の花の、氣狂の小さい展覽場だ。草花も斯う  
 棚に据ゑてあると、市中の人間に親しむ心地が爲る。加之、鉢も陶器の上品な雅  
 なのを用ひて、文明人に偏ら満足を與へる仕掛だ。然し事實草花自らにしたたら、  
 棚の内は玻璃の美でも露と光との恵みなく、不幸には違はぬ。嗟凡て美はしいも  
 のは現代に於て、女の肉も花莖も、犠牲たるは免れぬ。太陽の恩慈兩者の上に饒  
 かに在れ。

尤も草花は、和洋共に賣る。種類を擧げると、……盛花 束花、切花、花輪等。  
 草花屋の夜景は生々と瓦斯に葩の眼が光る、……恰も夜會での若い女のやうに。

### 聖なる額縁店

歐洲、洋畫趣味を、代表する市の舗は、小ザツバリした額縁店、寫眞油畫を售

る家である。西京大阪にも、此種の店を見るが、未だ東京ほど清新な物尠なく發  
 達してゐぬ。額縁を賣る家は、空氣が寫眞油畫の内容と、情調がしつくり合つて、  
 商賣の如うな、汚れた光の金錢利益を取扱ふ事さへ、此所では奇妙に、神聖な心  
 持を爲せる。額縁の枯木の匂ひは感じが佳い。

聖母マリヤの無垢な肖像、いつの代にか絶えぬ。玉のやうな髪を垂れた、少女  
 が十字架の前に御祈禱する。白雪の長い翼を背負つた天使、笑むだ小い神様の  
 小兒。紫の葡萄、紅く染まる林檎の果、……ゲッセマネや、茫漠たる曠野で耶蘇  
 が惡魔に試らるゝ圖、義の血の緋の衣を纏ふた荆棘の冠の名畫は、東洋の極の  
 一額縁店にも品は切れぬ。

併し、此節では、うれしい現象は、リンコン、ルーズベルトや、又露のトル  
 ストイや、所謂正義の戦士のが、店頭に顯はれてゐる。それかと思ふと、狂熱の  
 美少女の、淨い胸も露はの肖像——燃ゆる黄金の髪は腦の真中に分れ、寔に圓味



の輝く眸は人を魅する魔力が藏る。之と並んで彼の世界に有名な、ベスピアスの紅い噴火山の小額がある。夫れにまた極端な激浪怒濤の寫眞、アルプス山の大雪嵐の圖等、斯は現實の平凡生活に飽いた、人間の心眼を欣ばせ、激しい刺戟を與へる印象で有らう。今日では名も無い、娛樂的の額縁舗でさへ、此の傾向より逃れない世界思想の渦中に在る。

東京の額縁店は、詩と宗教との高尚な趣味を、僅かながらも代表する。自分は此種の商賣の、満都の黄塵の中に、日に新緑の如う殖えんことを希望する。人間の心は街頭で、鳥渡した事件にも、詩的になり宗教心を起す。

彼の有名な平民畫伯ミレーの、野に於る祈禱の畫、店頭此れ一枚でも、都會通行の俗人に、潔い洗禮を受けさす力が籠る。

飛鳥山の春畫





花の飛鳥山は、古木と共に、久しい山だ。花の魄が、春風に游離するのは、東京真に此丘だけだ。

櫻が咲いたら、風流氣の骨髄迄もある者は、遠くとも此の飛鳥山に集まる。元祿式に、縦し紅白の幔幕を張らなくも、香氣連は、茶店を借切つて、三味や踊りで、男女が春の永い一日を酒で酔ひつぶす。

田端から、王子に往く道の、黄な菜の花も綺麗だ。飛鳥山の櫻の花と、油畫に塗つたら東洋式の特徴だ。

少女の赤い布や、蝶々や、デカダンの温い風が春を領する。

山の上から、スグ王子製紙會社の煙突が雲を吐く、見ても花の障りにはならぬ。敷町先は菜の花が黄に燃える。

紅葉の瀧の川は隣りだ、流れは春の花葩を漂はす。

我が藝術國の住民は、花に一日を打込む位な餘裕は有つてゐる。



### 三崎町の支那人

神田の小區域だが、三崎町は、様々の家と空氣が、一種の異つた町を拵へて居る。

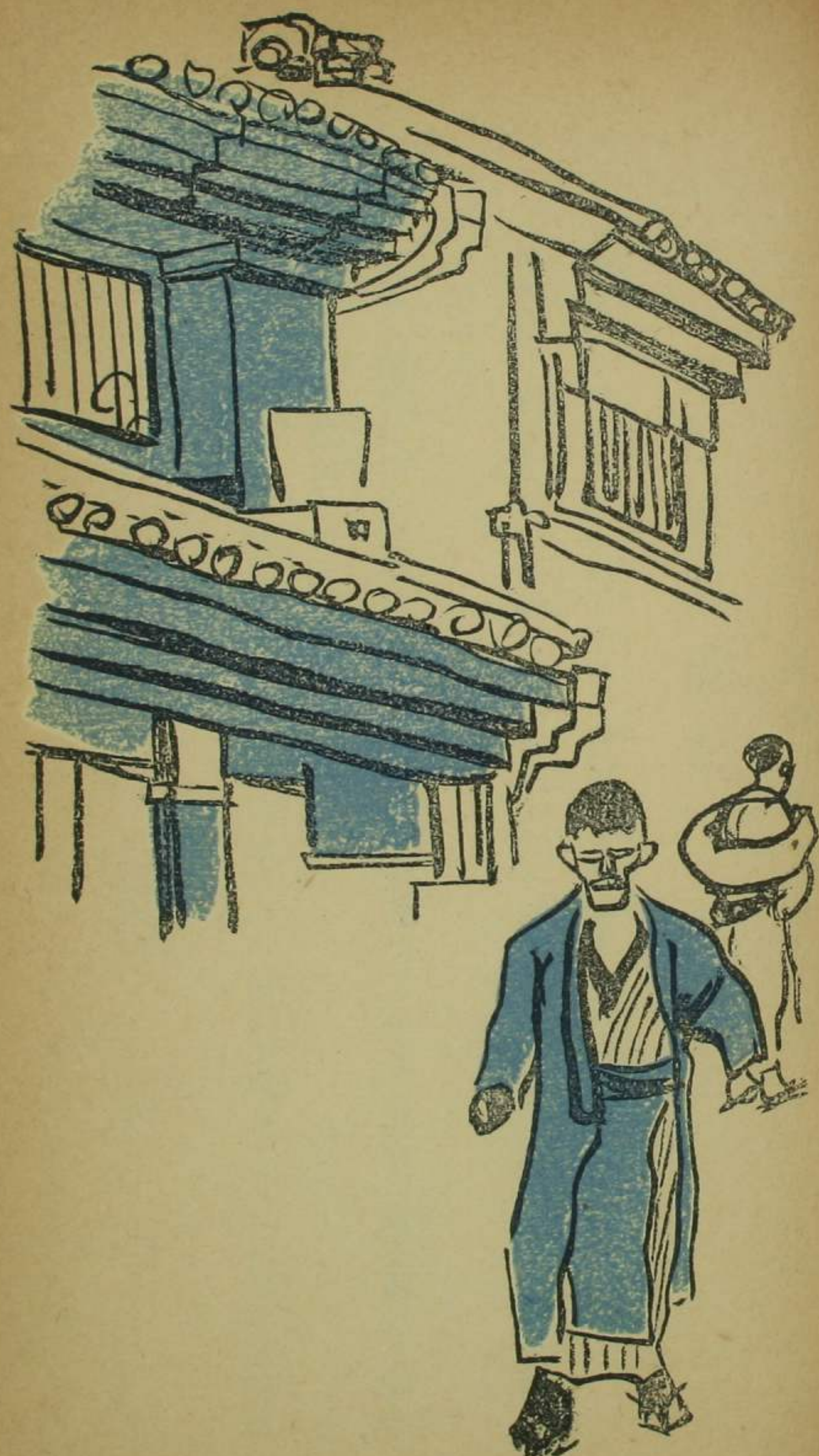
十年前の三崎原は、今は家が建詰つて、堀割に舟も通つてゐる。

女芝居の三崎座は舊い、廣くもない幾町内に、寄席、料理店、西洋料理、何でも娛樂物は有る。球突場も具はる、女の秘密の宿も在るさうな。

此處には、支那學生の下宿が多い。石鋪の片側の路に影を見る、折に支那婦人のおぼつかない足音を聴く。

支那料理が、餘計にある。薄汚れた灰鼠色の姿、戸を洩れる濛々たる煙と、豚の脂臭に、頹廢的の悲慘を感じる。……豚肉は甘い、亡國的惰民的の食料だ。

春の夕陽が赤く、三崎座の立幟と、煉瓦の擦褪めた曲る小路を射てゐる。





三崎町電車通に、救世軍の會館が建てられて在る。

### 目黒羅漢堂

降魔劔と火焰と、不動明王は、我が最も隨喜する神様である。

目黒は、秋は栗飯が名物で、四時何か知ら樹木が茂つて、薄暗いが、神寂びた匂ひがある。

目黒不動尊に往く途中に、有名な羅漢堂が建つてゐる。五百の貌姿活けるが如く、實に目を驚かしめる。

此の羅漢に就て、現代に寔に面白い興味のある傳説が残る。それは信仰と熱誠との凝結なのだ。

遠く大阪、難波に鐵眼寺といふのに、鐵眼和尚、この高僧は一切經、六千九百三十六卷の板木を拵へた程の人だが、之を作るのに、再度の饑饉の際に屈せず、



箆に紙を貼つたのを、廣い大阪中の街を持廻つて喜捨を集め、漸と出来上つたのであつた。

此高僧の佛弟子に、松雲といふ僧が居た、此仁が一尺の五百羅漢を彫つたが、更に等身の製作せうと、懸命に努力をした。

松雲は先づ、淺草に居を構へた。晝は東京中を、出来た羅漢像を車に乗せて、曳歩いた。後に淺野家瑤泉院の御手許金を戴き、苦心十四年で遂と、その五百羅漢は製作を果したのである。

所が、熱誠の縁は奇な不思議、松雲の弟子が亦、五百羅漢堂を建てた。久しく本所に羅漢堂が建つて居たが、一昨年其が、目黒に移され羅漢堂と成つたのである。

炎と劔の不動明王は尊く、赤裸々の活氣に滿つ羅漢も、現代人の拜跪するに足るものだらう。





### 理髮床小見

誰も目馴れて、何とも思はぬが、理髮床は、寔に詩味の饒多い場處である。

第一理髮店の空氣が可い、種々の並ぶ壇から洩出る、香料の匂ひが鼻から腦に  
泌入つて、柔かい心地のよい感じを覺える。

尤も人の神經に因るのだが、日夜の強い石鹼の薫は、室内に残漂つて昂奮を  
爲せる。

それに、棚や臺の上、光る銀色 器具、瓶の美しいレットル、額縁、高等理髮  
店には、特に視神經を動かす洋式の物が有る。

理髮師の振ふ銀光の缺、軽く使ふ剃刀の膚觸り、椅子に目を瞑る快よさ、銀貨  
一個で平民的清い快樂が買へる。

農夫が茹る麥の如、人間の毛髮は限りなく茹落つ、同様價値なき腦髓も毎日



亂費される、斯の如く俗衆の世界は過ぎつゝ在る。

醫師、看護婦、床屋の白い服装は感じが善い。その頭臚と身體を取扱ふに同一である。

東京の理髮店は、江戸の昔と變らぬ浮世床である。

### 甘酒賣

甘酒賣は、江戸時代の遺物らしい。今ま東京の市中で、なか／＼に賣れるやうである。

寒い折には賣歩かぬが、夏の暑い日から秋へかけて、毎日市中を、甘酒賣が「甘いく」と呼んで行く。それが如何にも、人情が淡泊に甘かつた、江戸時代を偲ばせる。

甘酒を容れてある、圓長い桶様の器、それが總朱塗で、蓋が恰と釜のと同じ形





で、眞鍮の金物が所々に施して有る。私は此種の物で、之程風流優雅な商賣の道具を見ない。で、内容が例の白汗の甘賣で、何と云つても、極めてローマンチックな商賣であるのだ。總の朱塗に眞鍮を嵌めたが、太だ興味詩味が有る。人情苦辛い世の中に、甘酒も宜しからう。

甘酒賣が「甘い」と呼んで歩く、東京の殊に貧しい子供は戸外へ駈出す。都會の暑い日盛り、辻角の樹蔭に、例の赤い桶を置いて、湯呑茶碗に職人達に進めて居るのは、宛で晝だ。

夏の日に甘酒も妙だと、地方の人は思ふだらうが、此處がそれ江戸ッ子の面白どころだ。

### 新橋の空氣

唱歌からして、小供でも、新橋停車場の鐵輪の壯大、その光景を、幼い脳髓に



も感知して居る。  
新橋は、諸國の旅人と、貨物が、空の雲の断えぬが如く、出入りが實に頻繁である。

銀座通から、足一歩踏いれて、新橋驛近くなると、旅舎から運送店、一寸した飲食店でも、既に旅といふ人間倉忙の印象を、在り／＼と現はして居る。一帯の空気が塵埃と、甚く動搖を感じる。

茲は東京の首脳ではないが、耳だ、足だ、無くてはならぬ必要の場處だ。二十四時休む刻もなく活動する機關車は、巨な煙と聲との勇壯なる傳令使であらう。往年、花賣娘が居たが、今日では最う可憐な姿が、構内に見られなく成つた。驛夫の黒い服、赤帽、女切符賣の白い指は忙はしい。悉く神聖な忙中の勞働だ、自分は人生は奮闘奮勵の日の中に、憂きを忘れるのだと信じてゐる。

變色電氣仕掛けの廣告燈は、流石大都會の停車場だけに、高く赤に巨眼を四方

に輝かしてゐる。

上野驛は寒い東北から、新橋は暖い關西から、遠く入込み来る人間に由つて、停車場内に籠る空氣までが異ふ様だ。否同じ都會の南北の端に、その建物の造作の色から、偶然にも違ふ感じが爲れる。東海道の汽車は音響も陽氣で、溫暖い古名所の土を噛み／＼馳する。新橋でポーツと息して、吐出される旅客の顔も愉快らしい。

停車場の向ふに、高等馬車貸附所といふが在る。表に其の黒塗の貸馬車が一臺据ゑて、手狭な内部に馬具が懸り、馬の臭が芬と來て、男が浪花節を呻つて居た。

汽車と、高等馬車との對照が面白い。

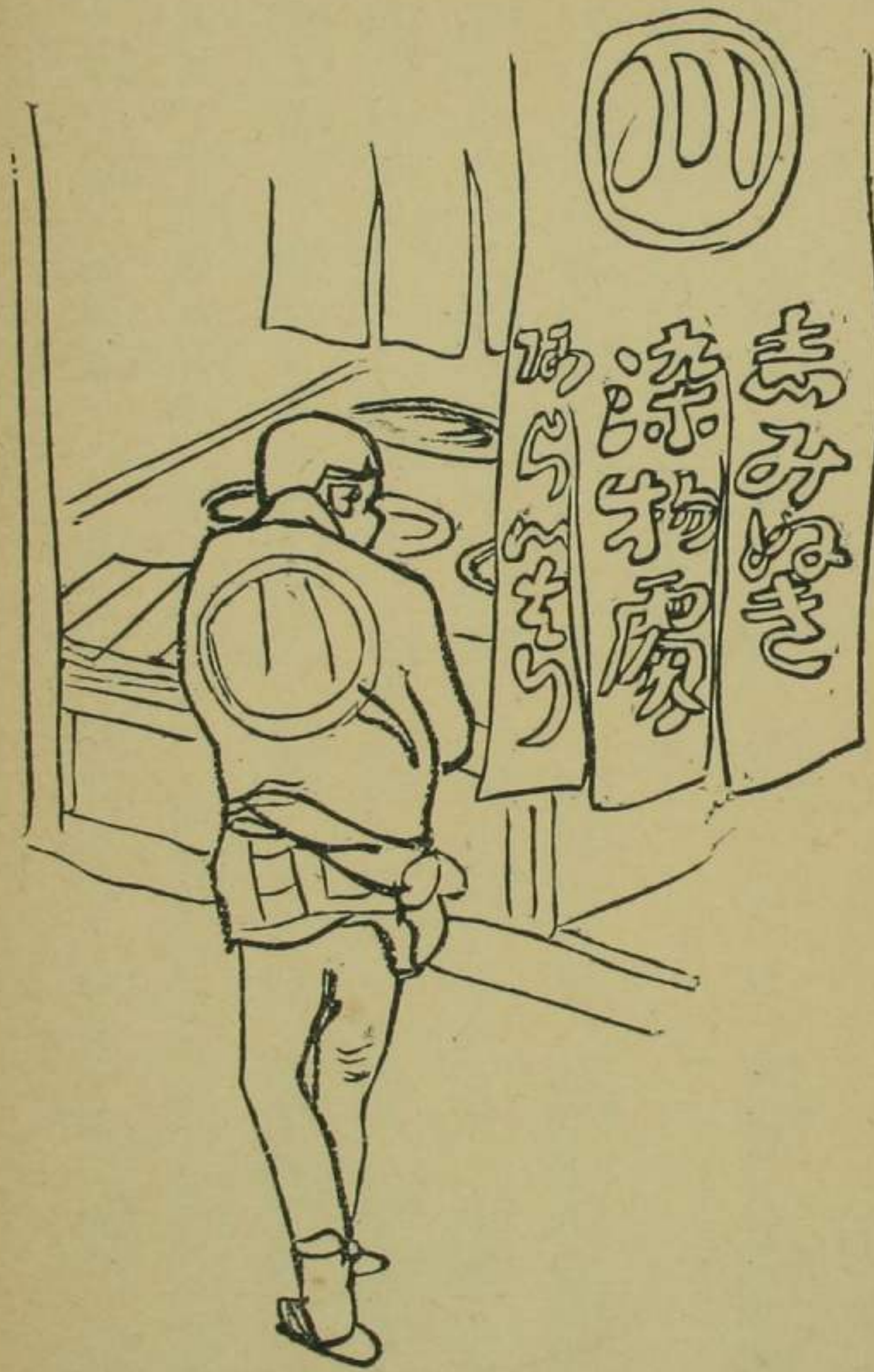
### 三河町の人夫



神田三河町に、諸人夫請負處がある。朝通つて観ると、お笠帽子や、振鉢卷や、印絆纏、鯉口、古洋服の労働者の連中が、町内の角に並んで、屯して居る。屈託にも爲らぬのか、平気で、野獸の様に晏如として、一日の仕事を待つてゐるのだ。的も無いばかりな事と、自分に想ふが、世の中に、其日の職業とバンは偶然湧いて來るものか。それとも、此種の人々に取つては、平常の生活は、そんな事を超越して、安不安、一日の飢餓杯とは、習慣と成つて居るのか、何う視ても、野に戯れ伏す獸のやうで平然たるものだ、併し有繫に凝と佇立で物を言はない。新しい草鞋を銘々穿いて居るも、惘然である。

野に甘い果實が在るやう、都會の何處に今日の職業が、彼等を待つのであらうか。

いま美しい朝日が、労働者の仲間の着物を照し出した。





### 繪葉書と繪草紙

繪葉書熱は、近來衰へたといひ條、東京の街には、神田には同町内に數軒も、花と並べ懸聯ねた、綺麗な繪葉書舖が在る。

一目に見て、實に感じが佳い。藝妓の俗的なものや、西洋美人の膚の露はに、冷たく褪めたのや、草花や内外の風景や、色々様々であるが。此處にも、時代の空氣は現はれてゐる。この頃では、新婚旅行の頗るハイカット繪葉書、青春男女の甘い戀の囁き、各様ホームを文句入で寫生したもの、金泥銀箔を浮かした、クリスマスカード式のものも有る。棚に積重ねた、白銀製のアルバム等追々贅澤になつて、小形で手に匂ふ繪葉書にも、浮世時代影の映つてゐるのは、極めて面白い。繪葉書の中にさへ、神も魔も隠れてゐる。

歌舞伎の新狂言は良いとして、角力のなどは好ましからぬ、而し之も時代一面



の好尚だ。英雄の肖像や、日本歴史教育繪葉書や、それに、基督一代記を六枚一組に撮つた葉書や、新しい物が店頭に現はれてゐる。

尤も其中でも、紙質繪畫と上品優雅なのは、本場の舶來物に多いが、獨佛國の妖艶な、熱帶國の亂紅の花の如な、金髪の女優の嬌態各種等、繪葉書舖の、冬の空氣でさへ暖く、濃厚に爲て居る。その活きて輝く瞳、温熱い泉の溢る、計り、巧みなる表情、些細なハガキの上ながら、歐人の激しい人間美、自然旺盛の赤い活力を、自由自在の儘に發揮して居るのに、驚嘆する。

東京の一繪葉書店に、世界各國の風俗人情を、讀知されるのは、花の文明の餘得であらう。

徳川時代に較べると、繪草紙屋の全盛は、むしろ衰微をした。江戸の絢爛な錦繪、浮世繪が熾むに、江戸人士にヤンヤと迎へられた、其の時代から見ると、目下の繪草紙店はあまりで、華やかな温かな濃夢から醒めた、アツケの無い、冷たい

淋しい夢の跡のやうだ。

店頭、色彩つた歴史畫、種々の雙六、また美人風景物も在るが、以前の錦繪時代に比べると、東京の今の街に、繪草紙店の存在をさへ、疑問とさるゝ位である。日本橋や下町杯には新吉原細見が吊垂げてある。

有繫、流行は那の石版摺の、血の氣のない古い美人畫は無いが、此頃では、ナポレオン、ピスマーク、我が南洲翁の稍大片な石版摺が、小さな舖でも懸つて居る。

江戸人の趣味を代表した、歌舞伎俳優の似顔の錦繪や、江戸名打の藝者、町娘の浮世繪を表に掛並べて、通行の男女の眼を眩しう色彩に焼いて、翫賞を恣まゝに爲せた、其の時勢から見ると、或る意味に於て、時の力は人間の情を滅殺し、萎縮させる。是に於て理智の進む近代人に煩悶生じ、底の冷たい文明に對して、甚だしい矛盾衝突の思想が起る。



頭臚に霜を置いた老人は、何でも昔が好かつたと言ふ。若し當今の繪草紙屋の前に、曲つた腰を据ゑさせたら、明治になる前の、派手な豪快な、名俳優が一枚の錦繪を思出してさへ、弱い眼に涙を湛へて、その氣樂な美的生活時代を、口を極めて老人は讚美するだらう。

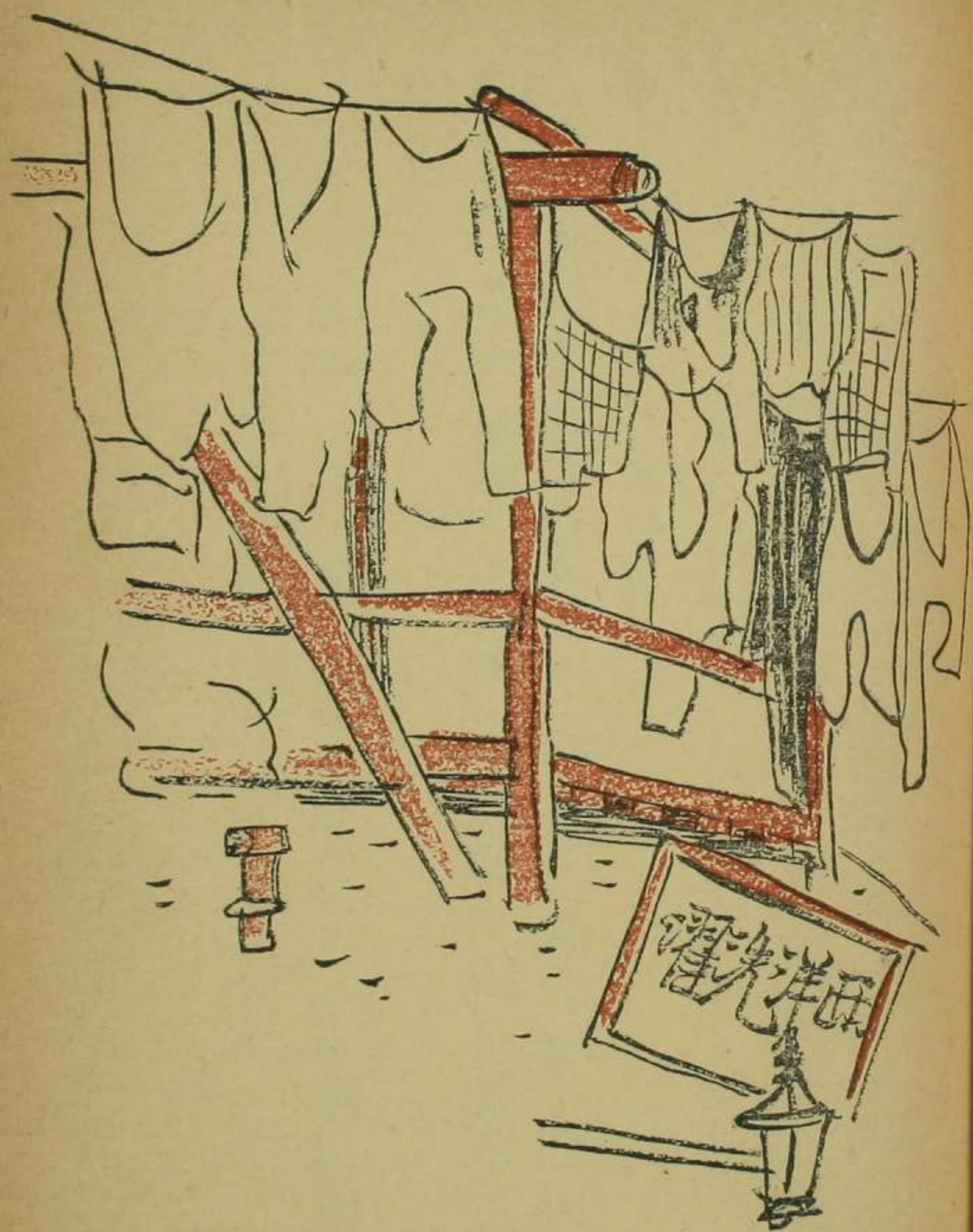
東京の繪草紙店に、美と情の悲哀がある。

### ペンキ色看板

文明は或は、ペンキの色から、産れるとも言へる。ペンキは都會に匂ふ、日に新たに咲く花であらう、悪どいのは近代的の香りだ。

東京の街に、ペンキ塗請負所とか、各種看板書畫應需とか、華やかなハイカラな、看板を軒に上げる、ペンキ師の家が大分殖えた。

屋の周圍に、流行美人姿や、風景、花卉の類を、色彩豊かに綺麗に塗つて、廣





告的に自家吹聴する家が在る。時に元祿姿の、頗る濃艶な美形の雪の顔が、ハツキリした眸で高い屋根から見卸す。下を通る血肉生肌の女子、顔色なく袖に面を掩はしめる。——文明は、白粉とペンキを混一にする、つまり、世界物質はペンキを以て、或點まで美化される。

ペンキ師の、静な家の内を覗くと、舗の入口一面に、黄、赤、白、黒や緑や、色々のペンキ油が、雑然として器物に冷かに燃え、邊りの床板に、落葩のやう零散つてゐる。

ペンキ塗の看板に、折に油畫に劣らぬ逸物もある、町で服装の異つた塗師を見るとき、あれは薄倅な、洋畫家の落伍者で無いかとも思ふ。

### 猫さねの漁師

東京から三里、深川からまだ向ふ、猫さねといふ漁師町が在る。東京で青柳鍋



で喰ふ馬鹿貝の捕れる土地だ、そこは島に成つてゐて、人家の周囲は河だ。小唄にでもありさうな。

此地に千人も漁師が棲む、大變に氣が荒くて、盛んに蠻氣に充ち溢れてゐる。巖々たる裸體漢は見ても怖いらしい。

猫さねの湯屋へ這入つて、湯の加減が熱く、うめても爲たが最後、湯屋の戸外へ出るや矢庭、風呂を先の上つた男共は、オイ若いの御馳走してやる！と大勢に擔ぎ擧げて、前の河の中へドンブリと投入れて、知らぬ顔で引揚げる。東京から仕事に往つた大工左官が、知らずにヒドイ目に會うさうだ。

警官杯でも、浮かと手を出せぬ程の亂暴さ、廣い砂原で大ピラに博奕を打つて、巡査が行くと、直ぐ蟹の子の如うに、散り逃げるさうだ。

然し氣が荒い割に、天真自然な人の好い所も有るとか。

ゴルキーの小説に描く、露西亞の或種の浮浪漢を想出させる。





赤 門 前

本郷赤門前の通りは、何となく一種の空気が、情調とが有る。ゆつたりとした、  
 大まかな、物に拘泥せぬ、學者風が、赤煉瓦に鐵柵を繼いだ、學校外の大道に、  
 揚る黄塵に混つて漂つてゐる。

併しドコとなく、華奢な、風流才子的な、光る靴の先にも、デカダンに行きさ  
 うな、趣きが見えぬでない。

あの古びた赤門を入つて、大學病院の側を裏門へ抜ける道、長い石敷に添つて、  
 秋の落葉の景色が、寂しくはあるが、私には真に佳かつた。私の冷たい青い額に、  
 枯葉が落當つて痛をおぼえる程でなく、詩人ベルレーヌの悲嘆の歌の情調を、心  
 にしみとくと感じた。

神秘詩人、小泉八雲氏の逍遙された池畔、華々しい一生を遂げた、高山樗牛を



も憚りてみた。

赤門前の西洋料理、多数の文房具店も、他町と異つた、下卑てなき、貴族風の所がある。

古赤毛布を腰に巻いた、馬丁の乗る板橋通ひのガタ馬車が、本郷大學前を、プー、喇叭吹いて通る。

### 水菓子店の色

東京の水菓子店、即ち果物店は、都會の一小美観である。甘味の空氣が沈むでゐるやうな、店の内に、狭いにしても色々の果物が、自然の色と光を見せてゐる。それが鮮かで、寔に綺麗だ。

西洋の市場、殊に南洋や、植物と果實の天國の熱帶國、印度の賣場は知らない。東京の水菓子舗の夜は、白熱のアセチリン華瓦斯を點けて、累々と置並ぶ黄や、





紅や、褐色と紫と白と、柔かい滑かな光線が、いろ／＼の果物の肌はだに浴あびせすて、唯眼ただめに見入みつてさへ、太はなだ氣持きもちが好いい。甘あまい、酸すいやうな、一しゆ種しゆの匂におひも、快こころよく官覺くわんかくを刺戟しげきする。

東京とうきやうの水菓子店みづくわしやは、上かみ方かたの如ごとくイヤいにこてくさ並ならべずとも、色いろの配はい合がふと、器物うつはの置おき様やうに注ちゆう意いするから、清せい潔けつで販はんかで、そして單たんに感かんじが可よい。

琥珀色こはくいろの柿かき、蜜柑みかん、紅あかいルビーるびーに似にた林檎りんご、雪ゆきの肌はだを藏かくす梨子なし、菓子くわしの如ごとく肉厚にくあついバナバナ、バインアップルバインアップル……と數かずへるにも、舌したがだるく爲なる。

赤あかい手絡てがらの、若わかい新しん婚こんの妻君等さいくんたちが、紫むらさきの縷しゆす子の帶おびの間あはひから、小ちさい蝦蟇口がまぐちを指撮ゆびつをむ如ごとく出だして、買物かひものをする風ふうは、一しゆ種しゆの明めい治じの浮世畫うきよゑで有ある。視線しせんが、冷つめい果物くだものの面うへに落おちて、中々なかに情じやうがある。

太古おほむかし、アダムとイブが禁園きんえんの果物くだものを盗喰ぬすみくつたが、人じん類るいの罪つみの初はじめだと謂いふが、今日こんにちでは、少せう女によめの胸むねの桃色ももいろの紅あかい心臓こころは、儘たしかに其その甘露かんろの、強つよい人ひとを誘いざなふ魔ま力りきが



ある。然し、情美情熱の豊かなハートは、現代ひませになつて、漸次に遺憾にも、世間に見られなく爲る。——私は、南歐伊太利の藝術文學は、恰度甘い齒も舌も、溶融け落ちさうな、紅い果物の様だと想ふ。吁伊太利國の上に照輝く太陽と、我が日本の空の太陽と……。

東京の水菓子店も、追々舗の飾具合が、その果物と調和して、西洋風に成るやうだ。

ちよつとした店に、糸で拵へた可愛い、網に、小粒の金柑が十個計り、入れて吊して在る。小供は屹度あれを欲しがらう。

### 詩的上野公園

蒼い広い空に、鳶が三羽、ゆるりぐるり、巨きく環を描いてゐる、その下の、黒い杜が上野の山だ。

堂々たる白聖の博物館、前に砂利の廣道の右、文部省美術展覧會の開かれる建物、博覽會の名残りの、小さい音楽堂ガランと寂しく。長く立續く櫻樹は花にも雪にも佳い、春秋に廣場で、紅白の幔幕を引繞らして、小學校の運動會が催される。

夕景、帝國圖書館の側路から、高い窓の内に、電燈が花の如うに、澤山點いてたのを見た。何となく學びの燈が床しい、入口の所でドヤ／＼階下に、穿物の音もうれしい。市中の下宿へ學生が歸りを急ぐのだ。

ピアノ、ヴァイオリン、鳥と風との諧音律が、常に絶えず構外へ洩れる音楽學校、スグ傍の、シンとした美術學校と、上野の藝術趣味の中心だ。花模様メレンスで包むだ樂器擁へる、艶な姿の女學生と、カンパス携へる、頭髮を長く詩人のやうに、綺麗に伸ばした美術學生と、巴里の美術音楽學生の日常生活を偲ばせる。

太古野生的、赤條々の象と駱駝、百獸王の巨冠を持つ荒獅子の居る動物園。嵐



の烈しい夜、これ等の動物が咆哮ると、上野の山の杜の鴉が、驚駭いて羽搏きをし、樹から落ちる。現代世界に誰ぞ偉人豪の、此の大聲を、人類の大群集に向け發し得るは――。

杉の古木の晝も薄暗く、じめくした草地、五重塔は謎の如に突立つ、東照宮の御廟は朱と金泥の輪煥神々しく、徳川全盛の砌、諸國大名から奉獻した高燈籠が、石疊の道に青苔を附けて列ぶ。

眞白い鳩が低く舞ふ、此の邊り一面、例の彰義隊戦争の折には、官賊兩軍より撃出す彈丸、雨霰の如く、濛々たる黒煙白塵は、樹間を幽靈の様に縫ひ、此處三百年夢みた空氣が、動搖し破れた。今なほ古木に手を當てる、瞭かに彈丸の痕を探れる。

上野廣小路へ、髪之如く眞直に走續く道筋に、春は櫻花は、白雲を空に匂はす、東京中の男女は浮れて、こゝに眞個爛熟した、盛りの青春を味へる。

元祿の太平樂、頽れかゝつた華麗を偲ばす、紅紫の葩、重い櫻も、向ふに五六株ある。翠の色の松、夏は江戸ツ子的の若楓も燃える。

高臺からは、淺草十二階の塔、新吉原の濃い、温かさうな色ある煙、深川の方面は高い會社の煙突、本所の方も、千家の黒い瓦屋根が、一目に観える。スグ下には電車が、ギータ々都會の一種の呻きを出して駛り、上野の汽車の笛はポーポーと、都會田舎と大旅客の巨聲を吐く。

上野の幾百年の雪霜に誇つた、老木が鋸の光る惡魔に、漸次と伐倒されるは傷ましいが、何と言つても上野は、帝國第一の都市の大公園である。

不忍池に降りる路、青い樹の蔭で、時折耶蘇教の傳道師が説教をしてゐる、老婦人が地面に小型のオルガンを据ゑて、讚美歌を唱つて居る杯西洋式だ。

赤い義人の血の如な帽子を着た、例の救世軍の士官が二三、罪惡と改悔を熱心に演説する。楓の葉が繁る緑の背景が、宗教畫のやうだ。



阪を斜めに爪先下りに、不忍池は濁る水を湛へて、夏の青々した、水から拔出た潔癖な男性風の荷葉、薄氷が碎け浮き、方々にビヨコリ〜と、黒い骨の如な枯蓮の莖もおもしろい。鴨や小鴨が凝凍つたやうに動かぬ、夜は池の中の割烹店の燈火が、水に逆まに赤う映り、池を廻つて常夜燈の硝子が飛々に夢のやうだ。中の島の辨財天參詣者の下駄の音、池の緋鯉真鯉に蘇を與る女小供は絶えぬ。上野で撞く鐘はこゝの水に消沈む、觀月橋で明月を、瓦斯の白光と一しよに見るも一興。以前の競馬場の草の跡に、博覽會の殘物の西洋造の白壁が、時代の渦中に黙つて、立もたえて居る。所謂近代人なる者も、臆ては此の建物と同じ運命を成るのだ。時代は空の雲のやう、物質も、人間の頭の上をも日に〜飛超して行く。

池の東から、本郷臺の方を觀た景色は、眞個のバナラマ式だ、大學のクラシックの建築物の頭の先が、茂る盛んな木立の間に、象徴的の詩のやうに白や灰色

にみえる。萬物が寂れる晩秋の節、眞赤な大きな夕陽が、いま西へ〜沈落ちる一瞬間！猩々緋に火と燃爛れた、燒雲の裂目から、思切つて大膽に直射する本郷高臺の、建築物の上の濃い、色彩色熱の大觀……これは利那の美とは云へ、西班牙等に行はる、狂熱の油畫式で、太陽の美、雲の美の極を、恍惚として、臆も眩しく燒かれて、併し仰視ることが出来るのである。都會の若い詩人畫家は、是非とも、池の東の端に佇立まねばならぬ。

朝に絹の布巾をかけた様な、池の端の待合、夕暮、粹な軒燈が灼く刻になると、白粉艶な仇者と歌と酒と、耽美脈の喜ぶ、觀樂の世界だ。楊柳が浅い小流に、梳いた緑髪やしだらな姿を浸ける。

廣小路の饒山な飲食店は、田舎漢は、殊に夜は素通りは六ヶしい位な景氣、頭店の白熱の花瓦斯が、酔つた眼には、青色に紫にも見えやう？晝を欺むく遠くまでの、煌々たる廣告塔電氣燈の光は、文明の有難味は、寂寥の詩人でも、冷たい



涙を流すほどである。廣小路の、夜の瓦斯と電燈は、田舎の石郎をも柔靡なデカダンにする、光に霧の魔氣魔力が充ちる。

上野公園の四方は、大都會の呼吸を飽かすに、疲れずにやつてゐる。

### 南洲翁の銅像

西郷南洲翁の銅像は、上野の山の重鎮だ。漆黒の巨大なる、野人姿の銅像は、今も薩南の荒々しい、而も男性的の暖かい風が、厚い鑄鐵の裾から、仰見ると、いつも捲起るやうである。右手に携へ牽いた鐵の獵犬ですら、秋の上野の空氣には、ワンと高く臺石の上で吠えさうだ。

我が南洲翁は、東洋人種のコセ／＼した弊の無い、堂々綽々、それで威は激しい波濤の如な、世界的偉人である。花も潮も暖かい、日本の薩南に産れた、情に富むだ熱血男子である。

西郷翁の太きな、丸いやさしみの兩眼が、東京の八百八街を瞰卸して居る。上野の丘から――。

紙玉を雪と、諸國の旅人が、銅像に投げてゐる。之も渴仰の美なる信表であらう。

彰義隊の墓は、線香のにはひの絶間もなく、ついで會津少年白虎隊自刃の油畫は、その傍に血油に掛つてゐる。

### 暗い谷中の墓地

——落葉焚く煙——

谷中は、東京市の大墓地だ。青山の方は華やかな匂もする墓地だが、谷中は杉の太い大木が多く、晝も暗い心持がする、陰凄な一種の勁い空氣に充ちてゐる。

上野へ、根岸へも抜ける道で、墓石は場所だけに、風流人、學者、豪傑肌な人



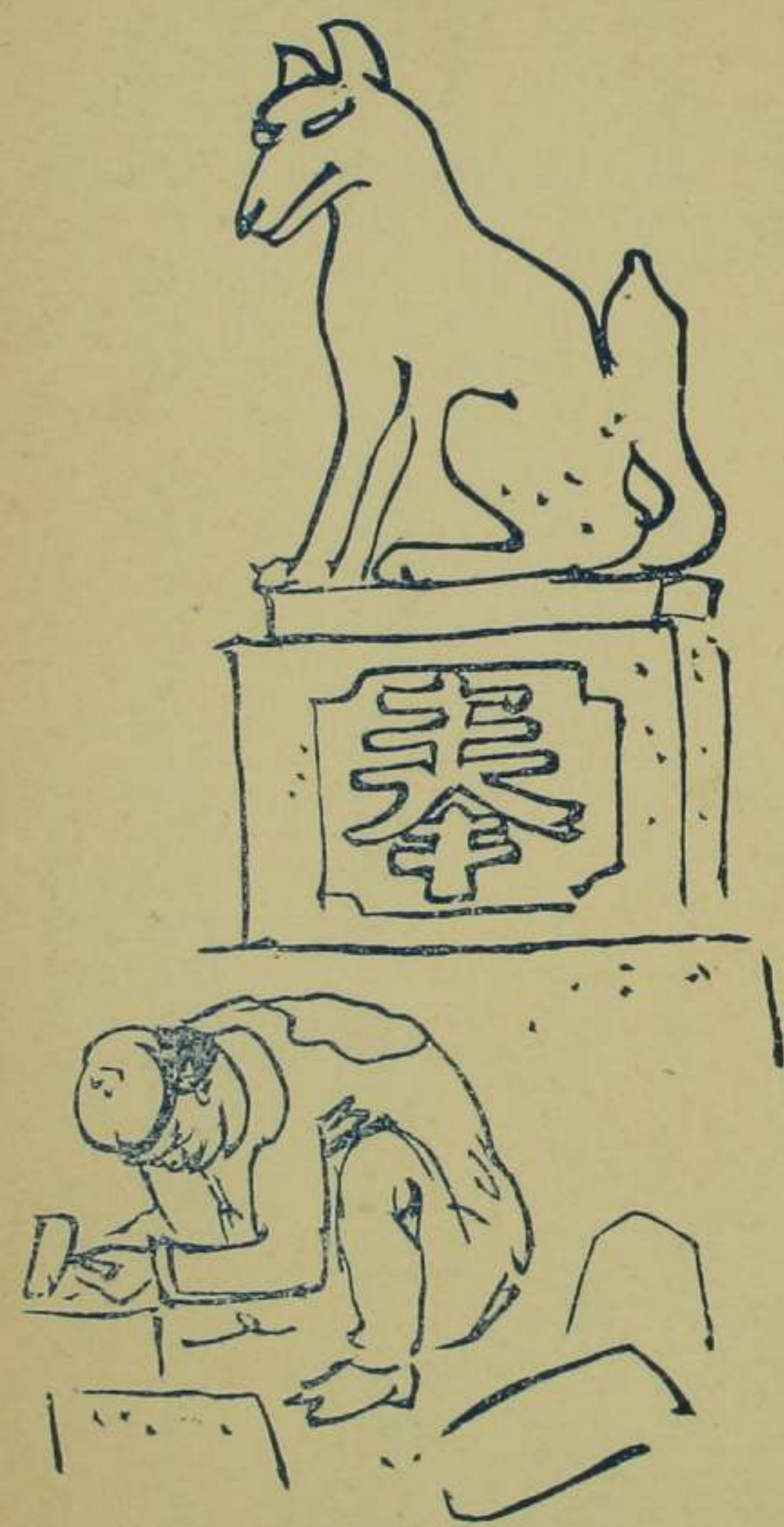
のもある。

谷中墓地の入口に、先づ雲井龍雄の墓は、青勝の滑かな自然石で、その稜のあ  
る菱形は、渠の痛快な覇氣を現はして好い。龍雄雲井君之墓表と刻つて、天下奇  
傑之士の文字は、碑銘の全てを語る。背に男松の黒い鱗膚がヌツと突出て、詩的  
英雄に、枯れた小輪の黄菊花が挿される。

隣りに、南部浪士、相馬大作之小な碑。明治十五年、市川右團次が當狂言で、  
此處へ建てたものらしい。事實大作の墓は千住にある。

有名な假名垣魯文翁の碑は、鐵柵の中に奇體な墓の頭を傍に埋め、種々の木の  
植込、變つた文人丈けに、甚だ趣向に凝つたもの。妙な風な石に唯猫の顔を、細  
くちよつくら刻むである、横に別の目標しの棒石に「かなかきろふむ」とあり、真  
個雅號猫々道人の碑に垂かぬ、銘は例の柳北成島翁が撰してゐる。

谷中を、ズット奥には、明治の雄辨家、馬場辰猪の碑は、白い歐風の花崗石で、





辨舌家の墓として、長方形の先の尖つてるのが佳い。明治二十一年十一月一日、卒於米國費府と裏面に。米國自由の綠邦にとはいへ、男盛りの三十九歳で他境に散つた花が傷ましい。

壯士來島恒喜の墓は、石肌の荒い蒼黒の、スツキラと男らしいので、うらに廻見ると、二十二年十月十八日行年三十一、自殺した壯士の墓前に、榊の葉がドツサリと手摺に山と手捧けてある。

其他、中村敬宇、小中村清矩、佐藤尙中等、諸博士の立派な墓碑もある。茶山花と、櫛と、四季の花弁と……。

谷中には、狩野派の墨繪の如な、蒼古の天王寺五重塔は、無くてはならぬ價値のある附物だ。薄く夕日を浴びた活ける美術は、現代を脱却超越してゐる。

塔と間を置いて、高い銀杏樹は、秋に熾盛に黄金の葉は燃え、且つ陰鬱な谷中を大きく照らす。生々と血の色を、冷石に濺ぐ紅葉もある。



古びた鼠色の頬冠をした、墓守や、傭れの男女の夫婦が、廣い直い路で、晩秋に墓地の樹木の落葉を、堆く盛つて燃やす。枯櫛、紅葉、櫻の病葉……有ゆる落葉を焚く白い煙は、柔かに静かに、墓境に迷つて、細く雲ともならず、スイ〜と消える。觸るも熱くなさうなチロ火が、ローマンチック文藝のやう、地を暖めて赤うに燃える。

あはれ谷中の、謐静な落葉焚く煙火！ 巨大な現今罪惡の塊物の全世界も、これに投げ入れて、以て淨めの火の、洗禮も受けられさうな、此の趣味は、東京は谷中の墓地でなくば、味ひ見られぬ。

上野へ通る墓途も、死人の殖る墓石で、追々迫つて狭くなる。おつては人口の増加と共に、墓地問題が東京市を噪がすで有らう。

谷中の森には、鴉が夥く棲むでゐて朝晩啼く。

毒婦高橋お傳の墓がある、彼女の辭世に「しばらくも望みなき世にあらむより

渡しいそげや三つの河守」

菖蒲湯と柚子湯

熱い朝湯は、江戸ッ子肌の職人連が、好むで飛込む所だ。

東京の風呂に、菖蒲湯と、柚子湯とがある、孰らも洒落て、小氣味の良い物だ。

菖蒲湯は其名の頃、柚子湯は年の暮で、この時は錢湯は無論大入である。

波々沸いた湯槽に、青色の切菖蒲が、刀の身の如に幾本でも浮いて居る。一種の辛辣な匂ひが鼻をおそひ、青いのに觸つたら、男の膚が切れる程氣持が好い。

柚子湯は亦、特別の趣味がある。黄色な柚子の輪切にしたのが、湯のあちこちに白う浮いて、寔に柚の何ともいへぬ佳い香りが、強く官能を刺戟する。赤い文

身の大漢が浸つて居るのは振つてゐる。

普通の風呂で、聲自慢が、背向けで顔を湯槽の板に喰附けつゝ、新内や浪花節



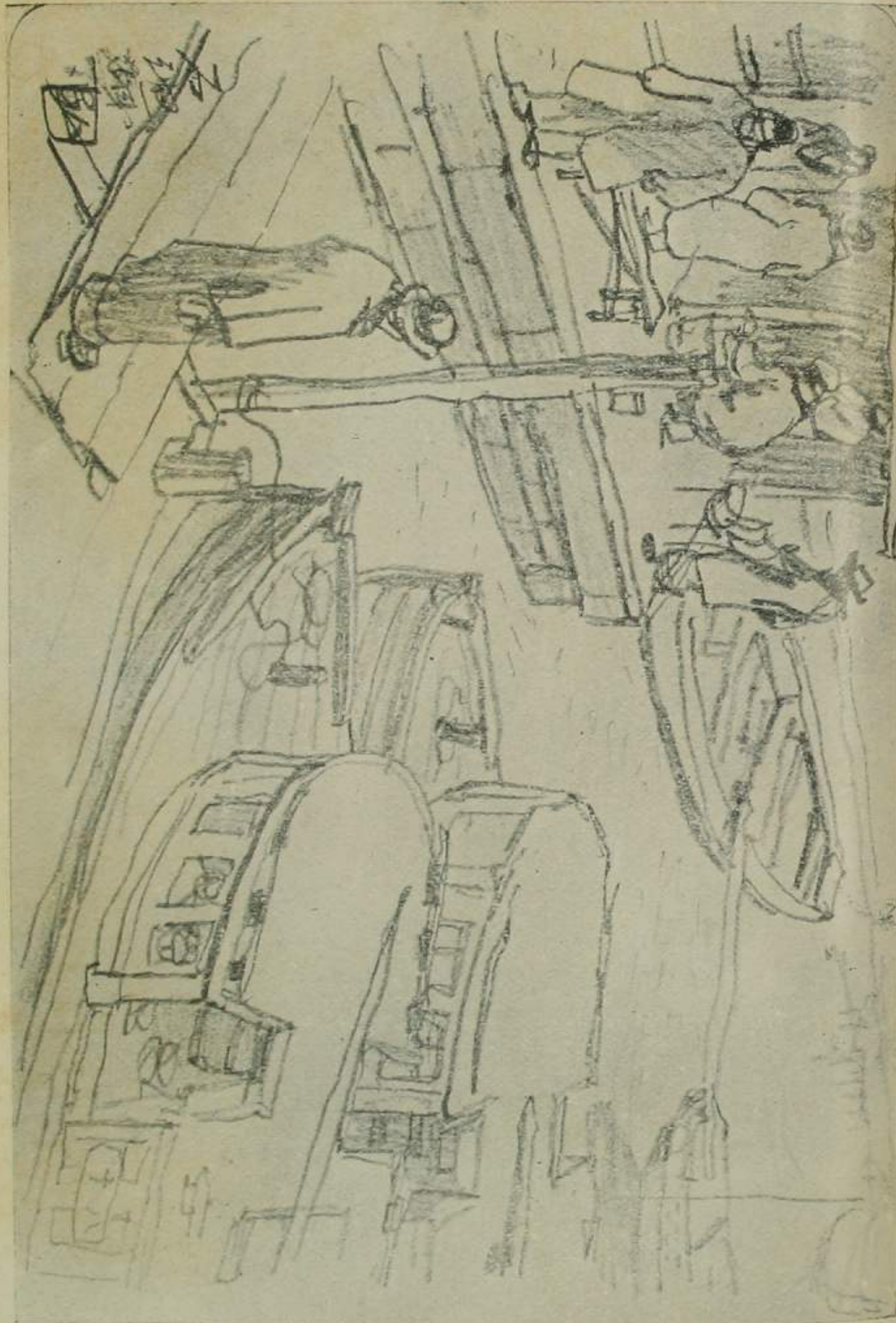
を唸つて居るのを見受る。之も江戸ツ子の秘密主義を嫌ふザツクバランの所たらう。

### 永代橋と湊河岸

名の好い湊河岸は、京橋區に在る。小い灣の如に成つて、左程廣くはないが、湊といふ丈、傳馬荷足等の大小船が、常も輻湊して居る。

古朽ちた、老爺の様な、ズ、黒い被布、櫓の少い用に立たぬやうな巨船が十艘も、固つて淀泊して居る、無論荷物船だが水上の古強者だ。素人が陸上から廢物と觀ても水の上では案外然うでないらしい。

スグ横向ふに、東京灣汽船會社と記るして、倉庫が在り、石炭の箆が重ねて轉がしてある。潮の水は薄黝く濁つて、ダク／＼と流ることもなく流れて、兩岸と饒山の船舶とを嚙嘗めてゐる。





前面に、何の會社か眞黒い建物、眞黒い數本の煙突から、頻りと黒い煙を空に吐く、シャツを着た人の影も小さく見える。

問屋らしい白塗の倉庫が、並んで見え、それに夕日が照射して水面に落ちてゐる。

四角な、長細い、灰鼠色の帆を揚た舟が行く。汪々と而も流れる音も無い水、湊町の渡場に佇むで、轉た水上生活の香氣さ、無駄な人生の倉忙を思ふ。

波々した灣に、小舟は獨樂の如自在に動く、波の老爺が折々、飛沫いて戯れて行く。鷗の白い翼が夢のやうだ。

湊河岸の渡し、些と離れた水に、一艘荷舟が息む。船頭の山の神らしいが、船縁からバケツで水を汲上げて居る、毛糸の襟卷の小娘が、岸へ架木を下駄で渡つて來た。

澤山の船の腹の底では、廣い河幅、日夕淡水と海水とが、深沈して相戦つて居



るのだ。世の中に詩人のみ、心耳に獨り聽くことが能さる。  
 今ま、夕陽がバツと薄赤く黄に、湊河岸から前面を廣く、倉庫も、向岸も、船  
 といふ舟に悉く、冷い光りを浴せた、——漣がキラ〜と灣内に産れた。  
 湊河岸には船乗の養成所が在る。スグ側の小橋から、東京府産火山灰の、赤い  
 藏がみえる、火山灰とは振つてゐる、其れも淺間山ので無く、東京産だから一層  
 だ。

房總逗子小田原、三崎の方へ、蒸汽船が出る靈岸島は、近傍だ。魚臭い旅客と  
 荷物は、年中絶えた事がない、汽笛は京橋日本橋の、濁つた空気を顛はせる。  
 湊橋を越して、電車の通りに出て、右へ往くと、昔から名打の永代橋が架る。  
 寒中でも名が床かしい川風が、頬に袖に心地よく吹く。  
 此處となるど、河の光景が南北に濶々と全くの水の世界だ。帆船が無論幾艘も  
 上り下りを爲る。

月島の方に小松がシヨボ〜、遠く品川迄も、一目に出来さうだ。海の潮氣が  
 雲とボカシた様である。

上流の向ふ岸に、並びだ幾棟の倉庫が、黄な色に夕日が、名所圖繪の如くに濃  
 く古く觀せる。

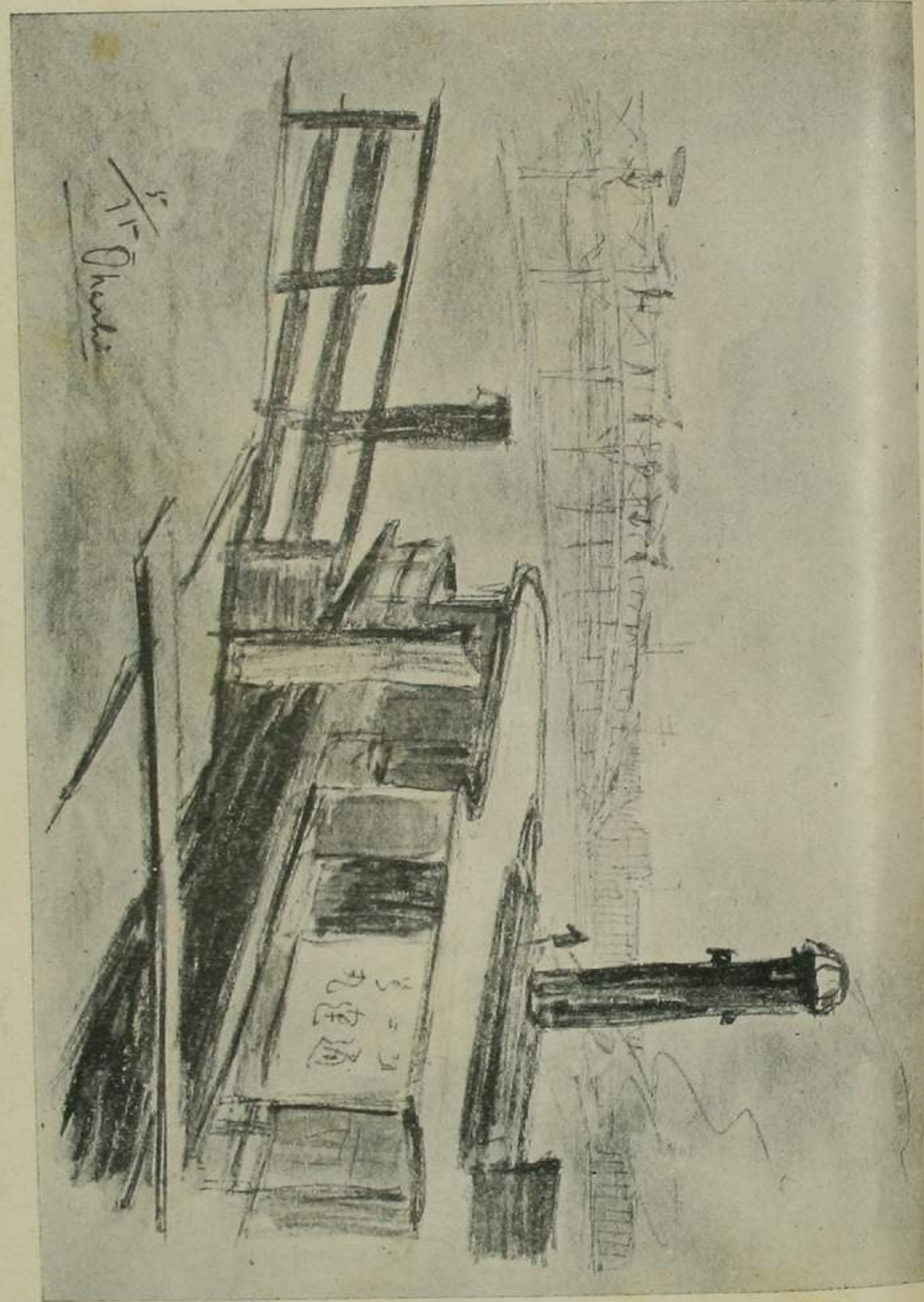
深川セメント會社の、太い赤煉瓦の煙筒が、盛んに白い煙を雲と吐いてゐる。  
 那の異様な形状と、白い熾な煙が呪はれてゐる。

江戸時代から、上潮引汐……舊い永代橋は、東京と爲つてからも、文明的詩味  
 と興趣の中に、立派に架つて居る。

### 小塚ヶ原刑場の記

(春四月彼岸過ぎ、天會々大雪を降らし、櫻花の美靈  
 みな雪に哭くの日)





春三月二十六日、友林外君と千住小塚ケ原刑場の跡を見舞つた。

此日朝から陰鬱な曇り模様で、天に一片の雲さへも浮いてゐない。——地に動き行くは淋しい二人の影！

電車を浅草雷門の前で降り、馬道の通りを北へ北へ往く。昔の刑場の跡を訪ねるのに、馬道とは既に妙な感じがされる、牛馬の骨の捨處彼の仕置場へ馬は哀しげに風に嘶いて誰か々諠ひ行く姿を偲ぶ、暫くして葬式に出會ふ、涙に濡れた男女の青い顔が、蓮の銀華金葉に照らされて、死人の臭いが町中を充たす。

一臺の泥土車が二人の前をズン／＼往く、甚だしい臭氣を後に残しつゝ、大に癩だが、數歩先んじて越す事は能ない。詩人は何れの時代でも俗悪な社會から、一歩先んじねばならぬと考へ乍ら、早や日本堤に來た。

石屋杯あつて愈骨ヶ原に近い心地がする、日本堤、昨宵血を吸はれた吉原歸りの客だらう歌も無い悄然の姿、千住まで水害の悲惨な跡を眺めて、多くの檻樓



家の間を通抜けつゝ、茲小塚ヶ原に着いた。

空は今益々暗くなつて來た。仰げば、雲の大傘を戴いて聳立つは、景岳橋本左内の巨碑である。

勤王の大志を抱いて、無限の怨恨が此處に埋められてある。幾坪の土に生る榎と椎の葉は、汽車の煤煙や塵埃を蒙つて死の色を呈し、南無阿彌陀佛と表された古い卒塔婆で柵が廻らされ、石碑の側に別な小さな墓——藜園墓——として在るが、安政六年己未十月七日就刑と讀んで自分は袖を絞つた。而し、文久三年に骨は橋本氏の故郷福井に歸つたさうな。吾は北越漂浪の一日雪を踏むで其墓を訪ねた縁がある。

歩を轉じて昔罪人の首を研つた所、丈餘の大石地藏の前に來た。

正に大慈悲の地藏尊は、西方極樂の淨土の方を嚮いて鎮座在します。寛保元年に大坂石工の腕に建てられ「天下泰平、奉納經、國土安穩」杯刻つてあり、諸方の



善男善女が供養の爲めに、白、紅や、黄な幟に墨黒々と「奉納地藏尊菩薩」「奉納南無阿彌陀佛」と記したのが、春風にハタ／＼と音して鳴る寂しさ。遙か向ふに南吉原の濃煙を見渡して、横手には鐵道線路は蕭條として黒蛇の辿り、一本のヒヨロ／＼松が、鐵屑に黯く焼かれて枯骨の如くに立つ數間を隔て、餘り廣くもない沼に青葦がシヨボ／＼と生へて、其れが女囚の髪の毛の春は恨みに水中から萌出るやうである。嗚呼、此の石地藏は、昔から幾萬人の死刑者の殺されるを見たであらう。血と泥に塗れた生首を眺めたであらう。吾をして若し此處に立たしめたらば、僅か三日で卒倒する、若い身空の罪人の怨と悲みに燃ゆる目、老囚の絶望に衰への目を舉げて、如何に爾の容態を仰いだであらう！奈何に爾の平和相よりも同情憐愍の涙が流れたか？石の閉ざした光ない眼からも、冷涙露と降つたか？否々、石佛も餘り殘忍の有様に怒りの眼をクワツと開いて、爛炎斬首者（淺石衛門）の面を睨んだと信ずる。莫遮、人間には死ぬ迄一寸の方便、少時の氣安を

要する。弱きは人間てふ憐むべき動物！石地藏よ、宗教よ、現下迷へる有象無象に安心立命を與へ得るか？然らざれば我は冷き汝を三百鞭打つであらうよ。夫れから、佛法末世燈明暗い回向院の中を抜けると、先づ二十一回猛士吉田松蔭之墓だ。其の至誠善く天地を動かし、維新の革命の先驅者は、此の三尺の狭い裏に靜に永久に眠つてゐる。實は墓は立派に世駄ヶ谷に移されたが、幽魂は小塚ヶ原の空を離れるとは思はれぬ。吾等を案内された美若僧は袖を控へて謂ふ「品川彌次郎さんの頃には、始終賑かに墓參されましたが、今日では誰れもまゐられませぬ。随分松蔭先生の世話に然つた人は多いでせうが……」枯れさうな櫻樹の下若僧亦た浮世を解する！と自分は申譯ばかりの櫛の色に暗然とした。天下の快男子、頼三樹三郎の墓は夫れと駢むである。鴨崖墓として其横側に名醇字士曾別號古狂生、裏面に例の「排雲」の一詩が刻まれる。古狂生の文字に已に苔蒸して居る。



流石大詩人山陽の血液を傳へてゐる丈けあり、三樹三郎は多情多感の詩人であつた。其の渾身の熱情を君國に捧げた身の果は、手づから妖癘を拂はんと欲して、失脚落來江戸城ではないか。何たる熱血漢ぞや、何たるロマンチケルぞや、自分はその古狂生てふ名を甚だ好愛する。此の詩の如きは所謂技巧を弄した偽の詩ではない、日本國土の在らん限り、日本國民の存せんかぎり、真情熱誠流露の作として永劫に不滅に貽るべきであらう。吁、解いた帯かや、水紫の加茂の流れ能く痛快斯の詩人を育てたとは、洵に天下の奇蹟と謂ふべしだ。

で、此の二基の墓を取圍むで、彼の萬延元年櫻田の雪を血染にした騒動の浪士、水戸の佐野竹之助、蓮田市五郎等の墓が在る。其中竹之助は享年二十一、廣岡子之次郎といふは僅か十九歳の美少年で以て當日には勇ましく討死を爲てゐる。で、自分は近寄つて滑かな石肌を撫でたが、石に尙ほ燃ゆる熱氣を我手に感じた。昔は斯くも青年に意氣と情緒とが有つたか！座る憧憬の涙に咽んだ。

咄!!何等の無禮者の仕業か、南部の忠臣、大砲を山上から撃下したる不敵の大膽者、快悍無比の傑鷲下斗米秀之進、世を忍ぶ假の名相馬大作の片墳は、無残にも土に蹴倒されてある。之れ確かに當世人の義血俠血が消滅した證據と見てよからう。

腕の清吉といふ俠客だとか、腕の形の墓。青茶婆とは、夥多の人殺しを爲た悪婆ださうだが、此の婆が和蘭陀醫師に依つて解剖された我國最初の物であつたか？這ういふ老婆の血は蛇も舐めまい。其外眞正の鼠小僧の墓、毒婦高橋お傳の墓は殊勝にも榮傳信女とあるが、元を糺せば業病の貧しい夫の爲に惡念を起し後に人を殺すやうになつたのだ。社會にも亦罪が無いとはいへない。

墓所の向ふに建てる古い長屋は、其の以前解剖室であつたさうだが、首級が毎もゴロ／＼轉轉つて居つたものだとか。

此處にも地藏がまた佇ち玉ふ。千人塚、萬人塚と彫まれた無縁塔には、字の通



り名も無い罪人共の骨が埋まつてゐる、中には晴らす由なき冤罪の者も在つたらう、眼と眼、齒と齒、彼れも人の子千萬人も一所に埋められたら、盡未來浮ばれまい。否、我等の棲む地球の底一皮は悉く人間の骨だらけだ。到る處足の下で男女の骨と骨と相觸れて、怪しい音して鳴つてゐる、泣哭いて居る。五十年來娑婆で快樂が爲足らなかつたのか？我が地球は終に人間の一大墳墓であるのだ。

空模様が一層怪しく、冷たいのがポツリと落ちて來たから、小塚ヶ原の雨に二人は身震ひして倉々に立去つたのあつた。

### 銘酒店の女

私の足は暗い露路を、白犬の前足のやうにフラ〜と迷ひ入つた。

二三日降續いた雨が泥濘を孕産むで、一種の臭氣が淫賣屋の羽目板に徹る。足とは全く別物で、酒にホンノリ酔つた頭が闇の中で暫し動かない……沈澱し

た牡丹色の脳髓に、先刻までの様々の象が映つてくる闇……

淺草行電車の中で見た、吊革に下つた女の毛の生へた白い腕。

私は駭いた蟋蟀のやう電車を飛降る角に繩暖簾、額のスコ禿げた鬚人をベルレ一ヌ君！と手を握らうとしたが、直く焼付けた心は「馬鹿！」と褪めて了ふ。悪魔主義ボードレールの無髭の顔はど雑踏を胸したが、凄い位陰鬱な面は日本人の中に一つも無かつた。義理人情を甘酒で呑だ近松時代の相貌は繁華に見られない。

春の陽氣な暮鴉が、俳優の鬢の風な羽根で市の屋根瓦を離れず〜に飛ぶ。炊煙は靡いてふうわりと消えた。

凌雲閣十二階の塔は落日に反射して、赤煉瓦が醉上氣せて薄紅う生物の如に突立つ(曾て抱付かれた少年と少女を投殺した圖太い奴！)併し塔は心持稍々傾斜して、藥罐頭の老人といつた廢顏に邇い形状。私の淋しい眼は此の赤い色に顛ひつひた。



私は活動寫真中の暗黒の人だ。色彩のない死だ寫真が幾ら更轉を爲たつて、この熬立つ燃たいやうな心を惹付けることは能ぬ、野暮な不調和な音曲も嫌だ。俄に人間が戀しくなつて、フト飛出すと場外は明るい極樂世界！紅や紫の旗幟が、人間の世は賑かで楽しいと官能へ來る。

牛肉店で銚子を幾本倒したらう！肉の赤、葱の白、電燈の光、些か私の視神經を刺撃した。酒は追々内部から血を潮のやう、眼を温めた。

女よ、銚子の代りに、女よピストルを、ピストルを！全く酔はぬ私は斯う叫ばうとした。

『ピストルを以て我が脳髓を貫ぬけ！』詩人ポーが居酒屋での最期を思ひ出したからだ。

……露路の闇に佇立むで、新に犯す罪が過去の罪の値踏みを爲せるやう、脳裡に様々の印象は復活をしたが、また幻の如消えて仕舞つた、——向ふ七八間仇め

く一軒格子、惡華の淫火で私の睫をそゝつたからだ。人肉を具備た放逸な野兎が隠れてゐる。私は前刻眺めた高い塔の下に來てゐた。雲の綻びから、今まで曾て見たことの無い綺麗な、明るい星がキラ々々々煌いてゐる。

『貴方、お寄んなさいよ！』春に閉切つた、格子障子の小さい嵌めた硝子から眼が覗いて、狭い兩側から燕子のやう同音に喋舌る……首の白い夜の燕が客を呼喚いでゐる。

無殘無恥な女地獄の光景に、私の眼と耳は壓迫を感じた。

私の心は其間眞赤な風船玉と化つて、フウツツと或家に浮れ入つた、全て身體の重味を感せず——

髪は濃く黒い、多すぎる程の廂髪に燃ゆる紅罌粟の一輪挿、荒い銘仙の羽織着物に、花模様メレンスの帯を締めた若い女が、茶湯臺の側に座つた。麥酒を洋盃に柔かな手で波々と注いだ。(此の麥酒は私が栓を抜いたのだ、女は柱の隅に手を



の伸べてブラ下つたが到底も無駄だつた——彼の大の男の骨も肉もどろろと渾味溶蕩かす方はあるのに)

女の一念に、麥酒の壇は破砕くべし、此の淫賣家からガタツイテ、東京市中が倒れ、延いて全世界の地震と成つたらば？と私は誇大妄想狂のやう馬鹿げた事を考へた。

狭隘い仲仕切りの三疊間に、目角を蓋ひにした臺洋燈が薄ボンヤリと點してある。蛞蝓が巫山戯た字の幅が壁に古び附ひてゐる。小さい神棚に燈が燐のやうに光り、隣は眞暗な穴の様な小部屋だ。

不意に女は、『妾、美術學校に居たのよ』猫のやうな手を茶湯臺にチヨイト置いた中指に、成程豆位な小さな胼胝の迹がある。『あの造花を習つたのよ！』

此種の女の癖か臉の重たい、女の美しい眸は艶味を増して、と、此方の顔を盜むがやうに瞥た。女と私の間に赤い百合の花が段々咲くやうに、私の酔のまわる

眼に現える。

私は押黙つて、麥酒の盞を傾けてゐる途端、女は『アラ！と』可愛い口元情のある言葉で叫んで、例の繊細い指先で、僕の指の筆胼胝に觸らうとし乍ら『貴方、何を爲て被居つしやるの？』

『君と同じ様な商賣さ……』私は唯微笑した。

店の間に在るのか置時計がカチカチと鳴つてゐる。白粉臭い襟を氣にし乍ら、其間女は頰りと、茶湯臺の上の淺草海苔と鰯の皿を攻撃する。色氣が滾れぬでもない。之を見て、私は漸々座興が醒めかゝつて來た

此の喰意地の張つた卑しい女を——。私の激變し易い頭腦に、今ま低氣壓が起つた。若し女の事情が許すならば、東京中の飲食店を引張り廻つて飽食させたら？昇天の基督教徒が生命の河の水を飲むやう。斯の肉に餓ゑた、憫れな、弱い、美し

美し



い 獸を——。

女は西京の生れださうな……。

酪酒店は、明るい中に暗い、温いが底冷い所だ。

私は急遽に、金を投るやうに、袂を拂つて暴風のやう家を駈け出した。

私は矢張り歎樂を求むる旅人ではなかつた。

淺草で得た印象の全部を、いま清浄な月に吸はれてしまつた。

### 讀 賣 の 女

『これはうきよの、はなづくし、はなのこひぢを、ならぶれば、十二や十三、つぼみばな、むすめの十七八、はなざかり』

『みづにうつるは、いろもみじ、ながすうきなの、たつたがは、あきはかなしい、しかのこゑ、しぐれなみだに、そでしぼる』

白手拭を疊んで、小額へ底をした讀賣の姐さん、……一人は二十一二、連は四十を越したのが、交り交りに月下に唄つて居る。

病葉の落盡つた櫻の枝影が地にクツキリ、女の鬢の毛が片頬に幾筋紊れ懸つてゐる。霜月の冷い風が時折、横街の月の家根瓦——魚鱗の如うに青う光る處から、颯然と吹卸して来て、糸の柔かい毛を弄ぶる。

女の謠ふ聲は益々冴える。十人許りの一團が環に爲つて聽いてをる。

此の場所は、廣い神社の境内の片隅、殊に立樹の蔭だから、人足も尠しく、また歌の音も何となく濕つぽく陰氣臭い。

五六間向ふはと視ると、全く光景が異ふ華やかさ！ 電氣の光彩と、瓦斯と煤烟で、濛々として其底を、幾百とも知れぬ男女の群集が通行る。埃塵も夜の空の雲に迄と揚つてゆく。

グワン——と花電氣を軒先に點けたのは、兩側四五個處の活動寫真だ。音楽隊



の大喇叭と小太鼓が、熾んにブウ〜タツタと夜の空気を響かせる。  
 蓄音機も喇叭を鳥渡突出して、踏臺の板に男が立上つて、黄色い聲に頻りと口  
 上を述べてゐる。浪花節、端唄、追分でも何でも御座れで、機械の野郎！ 護謨  
 管から人間の耳穴へ傳達する。

諸國、東西南北を渡り歩く旅商人、所謂香具師の連中は、危げな板店を出して、  
 怪しげな品物を賣つてゐる。色艶の蒼い悪い顔を、小さな洋燈の光が薄う照して  
 ゐる。併し、廣告的氣焰ばかり矢鱈盛んだ。

南洋で生捕つたといふ大蛇の見世物、木戸番の男は大口を開いて客を呼んで居  
 るが、早やくも四五人を巨蛇の小舎は呑んだ。

毎年何處からか定つて來る猿芝居、見覚えのある猿使ひの男の顔は、猿の赤い  
 皺ッ面よりか年老つた様だ。……今ま恰度お半、長右衛門の濡場が始まつて居る、  
 お半に扮した子猿が、誰か、投つた柿實を拾つて、飛んだ色消しを演らかした滑

稽！ 表正面で一匹の大猿の太夫が、チヨコナンと胡坐をかいて、見世物小屋の  
 前を通る大勢の男女等を嗤つて居る。大方、人間共の芝居を奴め觀てゐる積りだ  
 らう？

不具者には、一寸法師や、南瓜女の藝當がある。彼等の手足が一種の機械のや  
 うに、囃す三味線や太鼓に連れて動き廻る。踊り廻る。

今ま、讀賣の女から物の七八間も隔て、此處は大陽氣、大景氣な劍舞の見世  
 物である。小屋の表面には、商賣用の綺麗な、紅、黄、紫の紐房で飾つた、黄金  
 の甲冑や、大小の刀劍と木刀、其れに樞の手槍杯雜然に置かれてある。『サア、入  
 被しやい〜』と木戸口の漢子が大聲に吹鳴る。太い引眉の劍舞師や、白粉をコ  
 ッテリ塗り、黒い濃い洗髪を束ねて背後に垂らした三人の若い女と、赤と紫の衣  
 裳を着た小童女が、演藝の隙を起つたり坐たり舞臺へ出入してゐる。

何とした、佇立てゐる處は舞臺も何もない青天井！ お釜帽子を目深に被つた



書生が、例の唄本を高い聲に歌ひながら、「吟聲」までも交せて、聴客を集めて居る。現在、月色隈ない満天をも謠破らんず、此の書生の牙え互る美音に、ゾロく下駄を鳴らし往く多数の男女!

自分も、其の稀有の美聲に氣を奪はれて、偶と女の方——未だ讀賣の女の前に立留つてゐた——を視返ると、不思議な位、早や一人の聴者も無い月の影、二人の唄賣の女が悄然と黙して立てゐる。

女は浮世の弱い者とは定つてゐるが、之れは、其の天性の音聲に迄も、お隣りの美聲の男子に負けて仕舞つて、今ま僅少の聴衆すらも奪られて了つたのだ。

自分は最初から、唯聴てゐたのであるが、何となく氣の毒に爲つて溜らない。で、近寄つて唄本の二綴りを購求めた。代價は些の三錢! 實際這んな書物を買つたのは之れが甫めてだ。

兩人の女は、善く視れば視る程、顔色が憔悴へてゐる。旅稼ぎに苦勞した片頬

に垂掛る幾筋は、色白だけに寧ろ凄位である。

自分は身を引いて、早速月影に照して、此の薄篋四枚の歌本を讀んだ。……一、三、七、十、唄の数、面白い、く、確的に! 無名の平民の咏んだ人情が甘露のやうに含まつて有る。

で、歌本を翻すと、最末に氣が附いたのは本の發行所、越後の國××町、發行人の名は××と署されてある。

越後! 越後!!

自分は、心の中で思はず絶叫した。

北國、漂泊!

果して當初、自分の神経に感觸した想像は、適切な中してゐたのだ。

「君は越後から来たのかね?」

「ハイ、左様です!」



「越後は那邊……」

「南蒲原郡です」

自分のやうな者からでも、斯んな親みのある言葉は、東京へ流れて来て是迄、嘗て渠等に無つたのであるまいか？ 若い方の女は、少し前髪を低げめにしながら答へた。

「東京へは、何年君達は来たの？」

「イエ、つひ先月……」

若い方が矢張、月に心持擡げた顔は、羞恥に薔薇のやうな薄紅を帯びた。

「現在は何處に宿泊してゐるのです？」

少し亂暴な訊問とは思つたが、櫻樹の根方に罪人の狀に（此れは自分の神經の作用）悄乎と佇立んでゐる二人の前に言つた。

有繫は年の功で、年増の方が片頬を向け、些し品を作つて、馴々しい調子で、

「貴君、私共は本所の業平町に住りますので、イエ、お恥かしい、彼の木賃宿で御座いますので……」

若い女は、白い手に持てゐた歌の本で、口元を押へて下部を向く。

「今宵も、終稼ふと其處へ歸宿るのですか」

「ハイ！」

「今日のやうな、賑かな御祭禮には、大分人が出ますから、お錢も可成儲れませう？」

「イエ、怎う致しまして、此節は東京も不景氣と見えまして、根柄、收錢が僅少うござりますよ」

と、年増が自白するらしい態度に、甚く惘然の情を催した。

「饒澤、儲金けて、二人で越後へ歸郷つたら善いでせう」

「貴君、越後へ歸國りましても、此娘は親は無し、辛い娼勤を爲なければなりま



せん、私は最う二度目で好御座いますけれど……」  
 若い方は、先刻唄った歌の文句が身に泌みたのか、木綿姿を顛はせて、木の根方に泣倒れるの様子!!

祭禮の夜の雑沓は、最早静寂かな人の足音!

あ、越後——漂泊——。

北國の空に白い雲が流れてゐる。

### 露店の團扇

宵の口、大通りに只の一点。團扇を賣つてゐる。女の子だ。

薄片らな、半間位ゐな木臺の上には、色々の團扇が重ね並べられてゐる。

私は、其のうちから、夏草の中に美人の佇立んでゐる一箇を撰むだ。

灯に見ると、糸骨が些し損んでゐる。別のをど擇ると、孰れも〜皆んな竹目

がこわれてゐる。

此れは古い物では無いか……と、私が訊ふに、威な新らしい團扇です! 女は答へて少し顔を赧らめた。なる程、單の四錢である。

私は、首肯してその美人繪の團扇を買つた。闇中で私の手に團扇ははたく〜と閃めく。

造化が、人間の血を赤くしたのは最も嘆美的だ。白い骨をバラ〜に解きほぐくのも亦甚だ奇抜だ。特に女の細い弱い身體の骨……私に這んな考へが心の中に起つた。

### 蛙の音

化粧したやうな春の朧月は、いま薄雲に隠れてしまつた。

私は、礪川高等師範學校の在る丘の横側、茗溪の凹い谷の如うな路を歩いてゐる



る。最う十二時だらう、下駄の音がカラコロ！と當りに低う響いて、右手の藪にそよろと風が生るやうだ。

髪が夜露に濡れたのか、何だか湿っぽい。青葉の匂ひは呼吸に逼つて、春の夜陰、樹木の靈が女のやうに人懐っこく、自分の袖に恠しう近寄つて来る。

緑草は春の女神の抜毛に似やう、ちらばつて青い岡を斜る下は、沼か池か、薄暗うて柵の外からは分明と判らないが、水のあることは確かだ。——蛙が切りと鳴いてゐる。

ピカ／＼と春の艶な、小さな星が降るやうだ。蛙は春の水に體を漬して、快樂に浮きつ沈みつ、うつら／＼と何に取纏るも夢のやう……浮氣な戀歌を唄つて居るらしい。

自分は、亡き母の事や、人のことや、國の田舎の風景を思出した。蛙の聲がしみ／＼と胸に沁む。那處やらで小川の音が聞える。

尋常學校の門内の一本櫻は、四邊を白う花吹雪をしてゐる。花片に一つ／＼精靈あつて無言の儘散て消失せる。

小さな狭い橋を渡つて、少し入込んだ場所、此頃建てられたらしい新長屋の前、頻りと人の黑影が動曳いてゐる。女の髪の毛の油の匂ひが流れてくる。

淺黄の色の布を打被せたまは正しく箆笥、續いて、長櫃は根つから來ないが、今宵は此處貧乏長屋の御婚禮さうな。

蛙の聲は、心をこそぐるがやう、いま盛に夢を戸口へ運んでくる。

### 淺草十二階論

世界には、倫敦、巴里、伯林、また亞米利加にも有名な諸々の塔がある。而して我が東京淺草に滑稽な十二階の塔がある。凌雲閣といふ大した名が喰着けられてゐる。







獄。近來活動寫眞が大流行をして、極樂の喇叭を盛に吹立てゝゐる。

噫、悲劇といへば、この十二階からの投身者程の悲劇が嘗て有らうか？之は近世的自殺の最も工夫せられたる方法である、一層活動寫眞にとつて甚だ奇拔嶄新なる材料である。背景からして西洋にも復と無い面白い活動寫眞である。

元來、人の心は妙なもので、如何に無學無識の人間といつても世の變轉急激なる風潮に頭腦を侵されぬ譯にはいかぬ。近時複雑な文明の人間は、其の乾坤一擲的の一刹那、即ち有耶無耶の自殺する場合に於ても、必ず何等かの思慮と工夫とを廻らせる。その生死の瀬戸際に臨んでも世の中の何者にかに囚はれて、所謂死華を飾らせる事迄を考へる。文明國の人間は、到ても獸類が深山の奥に隠れて斃死の様、蝶や蟲が草葉の蔭に亡消ゆるやう、其んな無意味な、單純な死方をすることは爲し得ない。此の十二階からの投身者の如きは、最も近世風自殺人の好箇の代表者であるのだ。



最も、今日と雖も、水死、縊死、剃刀自殺の類も頻々として世間には在るが其の悲むべき死に至る迄での成行を考へると、決して舊時代のやうな些細薄弱な原因では死んではゐない。悉く悲惨な死の深淵に蒞むまでも有ゆる苦戦苦闘を爲てゐる。實に勇敢なる現代文明人の最期を遂げてゐる。——白面曲眉、町の小娘の可愛い戀死の如きに於ても亦た左様である。

翻つて、彼の十二階の投身者には、幾許かの芝居氣が夫れに伴つてゐる。之れも即ち、近代人の爲しさうな事で事業心と功名心とは死の斷末魔に至るまでも喰着いて離れない。死後世間を呀と云はせやうといふ洒落氣は、その娑婆ッ氣と一緒に緒になつて、一種の文明人、而も若い連中の行さうなことだ。

數年前、よく華嚴や淺間行きが大々の流行をしたが、學者智者の徒、また所謂青春煩悶の人等は、其の時代風の自殺方法を取つたものだ。併しながら今は時代が變化してゐる。是等の人々の黒髮蔽へる頭腦には、果して何物の重い、燃ゆる

やうな、世界的苦惱が蟠つて動搖してゐることであらうか？

予は、是に於いて、單り社會無學市井の人々に向つて告げる！淺草十二階の窓から身を投げる的の、究飛な、芝居氣た、大膽な勇氣があるならば、其の何が故に、廣い世界に響つて國を飛出さないのであるか。海の外、倫敦、巴里に亞米利加に、到る處天に達くの高塔は夥多、男たるもの、一番此處いらで、芝居氣を出して世界を驚駭かせたら面白からう。自殺杯は弱者の取るべき最も意氣地の無い方法である。世界は實に廣濶い。

東京淺草十二階の塔が時代の波に廻轉してゐる。

### 夏の淺草

淺草雷門前で、電車がギイ〜と夏の炎天に軋る。線路は暑い色に光つてゐる。



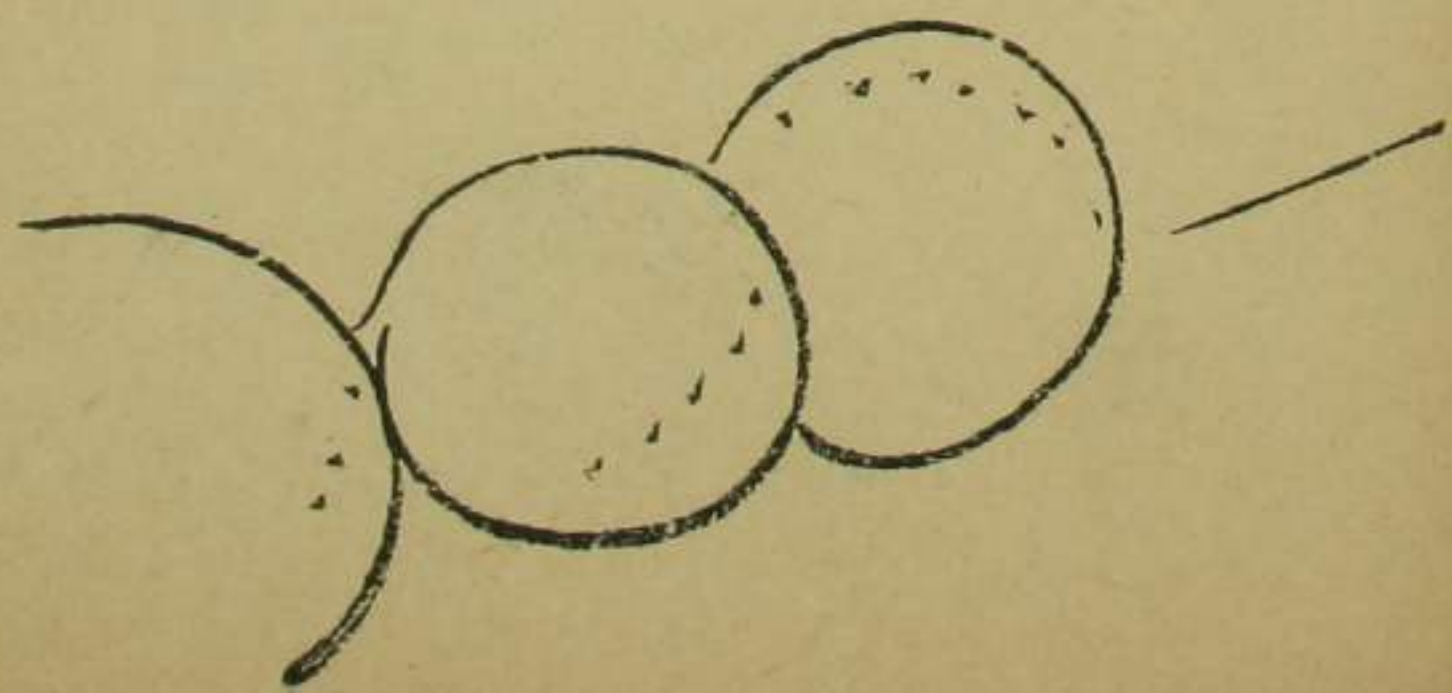
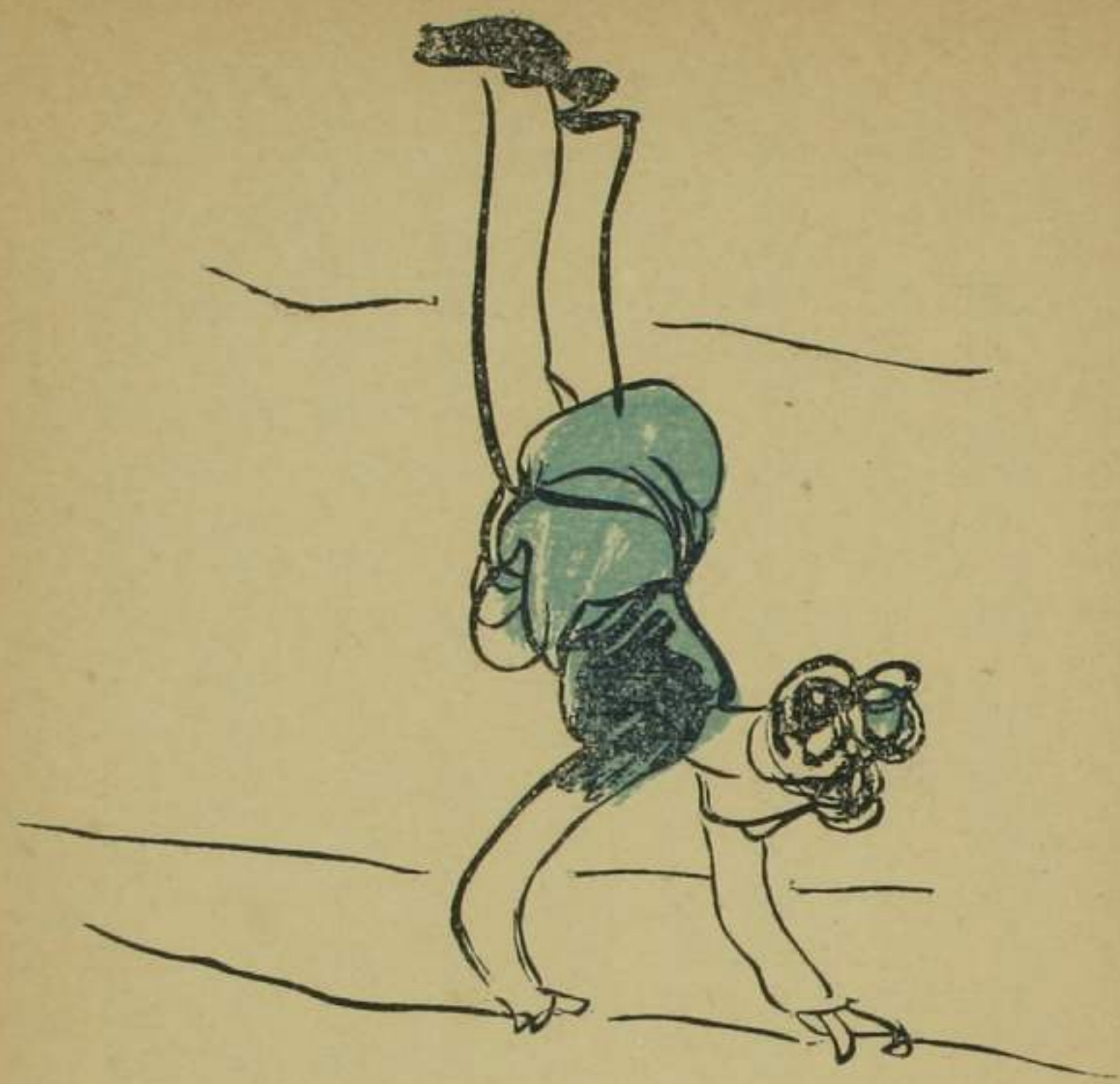
柳の晝の寝亂髪は暑苦しさう、白、赤、紫の廣告柱や看板が、濃い強い色彩を帯びる。

仲店通りに入る。先づ繪草紙屋と玩具店は赫奕として甚だ綺麗だ。例の紅梅焼と以前別嬪の居つた煎豆店のハシヤイダ香は高い。品物の上下善悪は知らず、兩側に續く種々の小店は皆氣持が良い、如何にも洒落りした東京の夏の店だ。

愈よ例の太い大門の下に立つ、赤い巨な紅提燈が夏の晝間の風に些か動き目に、其の涼しさツたら無い、恰も淺草の涼風門に満つといふ鹽梅！ 極樂の風の菩薩に念佛の一つ唱へたくなる。

観音堂まで續く石疊に、鳩が豆を拾つてゐる。豆賣の白髪の婆さん、小さな豆臺を控へて睡さうである。風が公園の樂隊の響を傳へて來る。

男も女も前で洋傘を窄めて、観音堂の低い段を昇る。拍手がバン／＼と頻りと鳴つて御堂の内に響く、煌々たる明るい御燈明の前、大な賽錢函の上にバラバラ





とお鳥目の雨が降る。今の澆季の勘定盡の世の中に、只で金が降るは此處ばかり。

胸はす限り、尊き金襴緞子、大小の蠟燭の赤い灯五彩七色但有難いと計り首旨

かれる。併し殖える装置のごこかに、近代の色と匂ひは争はれぬ。——極樂淨

土に點る蠟燭の陰に、浮世時代影の映るとはなさけない。

フイと目を擧げると、クルツク、ゴロ／＼と咽を鳴らして、十羽程の鳩が御堂

の内をあちこちと飛遷る。棟や桁に巢を構つてゐるが、金銀箔の貴い奉納額に、

平氣で大将白い糞をし掛けてる。鳩よ、其の結構さと暢氣加減は、丁度希臘羅馬

か古代詩人の此土に一生を美的に歌ひ暮した様。また、神佛を信仰し乍ら現世に

悪事を働く偽君子偽善者の様でも有る。然し、自分は人間が皆鳩のやうに美的に

飛廻る、彌陀の世に早く成れば善いと思ふ。

四方十位善男善女の參詣人は絶えた事は無いが、夏は別けてピカ／＼した佛像

金具に極樂の一部が見えるやうで、帷子を着た人は殊更悦しく有難いだらう。御



堂の裡の空氣は、眞夏でも線香の薫りに冴えて、肌心地が良い。  
 横側の段を下ると、夏の午後の日はカン／＼と、境内の乾き切った砂の廣場の  
 上に照付ける。木立の緑りを通して、赤やオリーブや紫の女の洋傘が動いて見え  
 る。

何の神様か、太い線香の幾束を並べて、フス／＼何の効験があるのか、燃やす  
 やうに燻べてある。紅い戀の呪咀は知らず、魔の物ならば必と往生退散は受合だ。  
 黯黒う濁つた小池に、龜が甲良を乾して居る。人間は今日の苦熱に背中はジリ  
 ／＼焼かれるのに、偕も氣樂な龜さんだ。

瓜生のお婆様のキチンと座つた銅像は、黒光りをして居るが、善根を積んだ人  
 に餘慶は有る。笠を脊骨にブラ吊げた田舎の婆さんが、齒の無い口を開けて茫然  
 と拜むで居た。  
 観音堂の薨の上高う紫の空に、焼けた金色の夏雲がフウワリと泛いてゐる。向

ふに低い噴水が銀光に閃めいて涼しさう。周圍に四五の人が休憩んで居る。此の  
 噴水の蔭こそ、夏の極樂浄土であらう。

女が来た、一人の蒼白い若い女が、薄汚れた洋傘に姿を包むやうにして歩く細  
 い頸筋に厚く塗つた寝白粉が剥けて、後れ毛の三本程が汗にベツタリ喰着いて暑  
 苦しさう。言はずと知れた賣春婦だ、洗洒しの浴衣の模様にも、へつた駒下駄に  
 も一種の哀れが見える。

観音堂の直ぐ、寫真店の裏は地獄屋だ。暗黒面の強烈なる疲勞から、今時分は  
 日中の晝寝の夢、女よ脰を曲げて安らかで有らうか？ 観音様と地獄の背中合せ  
 も是は振つてゐる。浮世の奇なる現象である。

地内の方々に、香具師がいかさまな物品を喋り立て、客を暑氣と煙に捲いて賣  
 る。

花屋敷、例の生人形は替る度んびに綺麗だ。歌舞伎俳優の似顔表情は人形にで



も色いろに出でて居ゐる。夏なつの晝ひるの睡ねむけ覺さましには頗すこぶる好かう適てきだ。美うつくしい立たち役やくは視みよ三さん尺じやくの秋あき水みづを抜ぬき閃ひらめかして居ゐる。

淺草公園あさくさこうえんは四季きせい年中ねんぢゆうその活くわつ動どうを休やす止めぬ。夏なつの酷こく暑しよにも中ちゆう心しんは生せい動どうして居ゐる、爛らん熱ねつした色しき彩さいは極きはめて豊ゆたかだ。

青葉緑滴あおばみどりしたる、生いき々々した公こう園えん中ちゆうの樹じゆ木もくの隙すき間まにちらほら、氷こほり店みせ、壽すし司し、汗あせ粉こな杯ばいの、赤あかや紫むらさきの片ぺ布ぷが風かぜに翻ひるがへつて見みえ、意いき氣きな東とう京きやう子この夏なつ姿すがたの袖そでや袂すそが艶えんにさばいて行ゆく。

田舍ゐなかのお上のまり様さんは夏なつにも遣やつて來くる、懷ふと中ちゆうの金かね錢ぜには汗あせに唸うなつてゐるか如何いかにだか、小娘こむすめの紅べにの腰こし巻まきは火ひのやうに燃もえてゐる。

緋ひ鯉こひう浮うく公こう園えんの池いけの畔へりから中なか空ぞらを、紫むらさきの燕つばめの翅つばさが一直ちよく線せんに觀くわん音おん堂だうの方ほうへ飛とんだ。小高こたかい丘かみに成なつてゐる、繁しげる樹きの蔭かげに、捨すて石いしに腰こし掛かけて三十さんじゆう男おとこが居ゐ眠ねむつてゐる。

此この漢をはしがない漂へう浪らう者しやであらうか。

酒さけ白おしろい粉こなの匂におひ絶たえぬ夏なつの公こう園えんには、浮う浪らう人びんと、物ぶつ騒さうな男おとこ、道だう樂らく者ものの三さん尺じやく帶おびがいつも飛とんでゐる。

ドンチャン……興こう行ぎやう物ぶつは頻しきりと賑にぎやかな景けい氣き附つけをやつてゐる。不ふ相さう變へん、娘むすめの手て踊おど一せん錢せん演えん劇げきや、江え川がは一いっ座ざの曲きよく藝げい球きゆう乗のりが在ある。白はく色しよくの球たまは夏なつの外ぐわい光くわうにひかつて、小ちひい藝げい娘にやうの赤あかい衣い裳しやうと偽まがひ金きん欄らんの袴はかまが妙めうに輝かがく。ゾロゾロと男だん女ぢよの行かう樂らくの人ひとは通つう行かうす。

今いま自じ分ぶんは、座ざ中ちゆうから外そとに洩もれて、三み味み線せんの『秋あきの夜よ』の冴さえた哀あは痛つうな一いっ節せつを聞きいた。丁ちやうごい曲きよく藝げいは千せん番ばんに一いっ番ばんの危き險けんな兼かね合あひの極ごく處ちゆうだらう。

こちらは問とはずして悉ことごとく皆みな活くわつ動どう寫しや真しん計けいりだ。道みちの兩りやう側がはに並ならんで色いろ々々に飾かざ立りたてた旗はた、幟のぼり、樂がく隊たいは光ひかる大おほ喇ら叭ぱ笛ふえ太たい鼓こで囃はやしごよもす。中なかには頭あたま髪かみを綺き麗れいに分わけた好かう男だん子しの辯べん士しが、鳥どりの如ごとうな美び音おんに説せつ明めいをする。



怪しい油繪具で大刷毛で塗つた、俗悪な、ドス黒い、ズッ赤い、活動寫眞の巨繪看板は、イヤ大小共様々の色彩の全部は、現代の標本、世相の鏡、社會上下の狀況をズラリと一目に見る事が出来る。……夏の活動寫眞は別けて其の色彩と活轉どが、肉を刺戟して強烈のやうだ。

目下、活動寫眞は淺草公園を代表して居る。活動寫眞は公園の腹部だ、晝夜絶えず大きく波打つてゐる、が、其の色彩は濁つた現代的の赤といつて置かう。公園を出て、振返つて見ると朱の灰色が、つた廢頽した形の十二階の塔と、黒い五重の塔の上當り、聯いだやうに虹に似た赤い雲が一線渡つてゐた。夏は今淺草公園を壓してゐる。

新聞賣子

大空を横絶した銀河は雲に掻消されて了つた。

秋口の夕立は小劍の閃くがやう落ちて來た。見るく、長槍をドツと一時に突下す激烈しさ……雷電の磚鼓さへ加はつた。

小川町の角に新聞賣子が鈴を鳴し乍ら立つて居る。薄闇に蒼白い小さな顔は漸と十五六だろ！服装は細い三尺計り色目が。

兩側の舗では戸を閉した按排、宵の電燈と瓦斯が不平らしう赫と硝子戸の隙を漏射す。

雨に濡れて俥の幌が急ぐ。傘が舞ふ。人の足は青うチラホラ、女の紅いものに電光が發矢と、呀ッ！と聲と飛揚る。——人間敗亡の繪巻物——神田の大通りも頼て人影が杜絶えてしまつた。

東明館は塗られた巨墳墓の形して、惡魔の様な雲が烏羽玉の闇の翼して翔ける、天には猛烈な雨と雷鳴!! 東京八百八町の家根瓦全面に漲る黒波、青燐の光、風伯は亂髪も見せずに東西南北の大道を吼へ廻はる。



料理人

チリンチリン、チリンチリン！狭い底の片蔭に小さな手から鈴は鳴つてゐる。チリンチリン、他手には濡れた新聞を持つて。  
 肩に吊した靴形の籠に賣残りの新聞が二三葉！世界の科學、外交と、帝國の政教文物の都てを肩に懸けたる無學の貧しき一少年……。  
 天には雷。地には鈴。相互に鳴り交はして、八百八街の中、大自然の威力と闘争ふ者は、此の少年一人!!!

夕暮は、奥まりたる西洋料理屋の玄關に電燈が花の如くに點せられた。  
 今しも、一人の女のホーカイ節が、門前に停立んで、例の月琴を鳴らし、艶ッ  
 ほい聲で謠ひ始めた。  
 恰度、二階には客が無かつたか、女中共はドシシ梯段を降りて來て、四五人





が、柱の側に集固まつて聴く。白粉の顔の半面と、赤い袖口がキラリと、電燈の光線に美しく見える。

法界節の若い女の聲は、大甚だ訝えて、中庭の情無い樹木も動き出しさう。浅いながら春の夕刻……。

玄關の横手から、白い服装が現はれた。年の頃は三十四五、言はずと知れた、此屋のコックである。

で、彼は、其聲に非常に感動したらしく、濃い眉の所に微かに波が見え、顔は寧ろ蒼褪めたやう、しかし眼を鎖して居る。彼の感じは一方ならぬ様子なのだ。門前の女は、編笠に額の半は隠れてはゐるが、紅い笠の紐に纏はる後毛の幾筋にも顔の雲れは見えるが、辻藝人の風情としては。何者の娘の果てなのか、下品にも見えず先づ美人の格である。

コックの閉してゐる目には、種々の物が浮ぶのである。……



西洋料理で働くのも、既う三年！毎日牛肉の脂肪の香と、濃々とジユウ〜する音に立騰る煙、顔も着物も油臭く、獸類を對手に住むで居る様な心持もする。あゝ、手にするは晃々の庖丁、目に入るは血の生々しい動物の肉、夜晝耳に馴れたのは、ホークや匙の觸れる音、口には、随分肉の美味にも飽いたが、單調で面白くも無い労働を仕て来た。板場の役、料理人！！

二六時中、紳士達が来る。女中達は朝から化粧するのも誰に見せる為か、二階と狭い烹割場との相異！客とコックとの位、二階から笑聲が、牛肉を吊す料理場へ、極樂からのやうに毎晩聞こえる。

三十歳を越して、未だ家は無い、女房を持たことはない、意氣地が無い人の家で働き詰めの境涯。今一度、廿歳時代の心持に歸りたい。

ホークイ節の女は、氣樂で何處へ往くも那處に宿るにも自由であらう、到る處が我家であらう、世間が廣からう。ナイフやホークの音よりも、月琴の音を酔は

す様な美しい音が幾ら勝る……。藝妓、女中、紳士、自分のやうな卑しい労働者には、門附の辻藝人の女が相當だ。那の麗しい門前の女！一夜でも、夫婦となつて街道を月琴鳴らして歩きたい、楽しく歌ひ廻りたい。

彼は、今刹那に眼を開いた。が、白い前掛を見ると忽然！美しい幻想は破れて、自身は一介の料理人である！と、嫌な感じが胸を衝いた。

ホークイ節の女の聲は、彼方で微かに身を顛はすやうに聞える。

### 酉 の 道 中

唯、何かなしに電車に乗った。

雷門で降りやうと思つたが、酉の市には未だ早いので、千住迄で往つてみる氣に成つた。恁うなると成程電車は有難い。

東橋亭は秋に華やかな看板が上つて、女義太夫のデン〜が始まつてゐる。





浅草町で電燈の點してゐる木賃宿、墨で表障子を塗つた構へが頗る變妙であつた、大まかな檀那的東京で無ければ見られぬ圖であらう。

小塚原で丈六の地藏様を鳥渡拜むだ。秋に淋しい石地藏の顔！ 御肩越しに遙か西の空に血のやうな雲が浮いてゐた。

千住遊廓は格子は明いてゐない、茶や紺の入口の暖簾が何々樓と染抜いて、田舎趣味が却つて奥床かしい。廳で白く塗つた首を夜晒しに爲れるのだ、物言ふ、美しい首に、凄い手、昔仕置場の在つた千住も變つたものと素通りする。

大橋の上の秋の暮は又格別だ、東京から來て私は深い秋らしい秋を感じた。黯みが、つた灰色の秋の水は架柱を舐めて冷かに流れる。

ポー〜と汽笛を鳴らして來た一錢蒸汽を待合して乗る。ペンキが剝けた窓の中がガランとして、頭臚の禿上つた老人が烟草を吹して居た、腰掛は聲があつたら泣出しさうな色だ。



汽船が出がけ、窓へ飛込むで来た鳥のやうな女、白足袋の儘で模様のある腰巻が恰度翼のやうに見えた。着物の裾をたくし揚げ帯の所へはさみ、小さな風呂敷包を膝へ載つけて、十七八は府下の酌婦でも有るか眸を落して居る。银杏返しに喰入つた櫛が無情を語る。

西洋型の船でも、切めて隅田河の通船だけは舟夫が小唄の一つも歌つて、昔の江戸式に行つて欲しいと、私は石炭の火力にせかせられる激水を恨めしく覗く。紡績會社に来るまでの處、蕭條と廣く灣曲して蒼い暮の蘆が寂しい。黒い色の水禽が只一羽横截つて、空の下なみくと深う音も立てず流れる隅田川！身を切るやうな寂寥の味は爰が東京第一で在らう。明治の雪舟が出たら必と墨を躍らせて此處を描かう、水邊に三艘の荷船が板の上で火を焚いてゐた、一寸水滸傳式である。

もう夜の雲が空に散ばる、二ツ三ツ雁の形をした灰色の小雲を見た。暮春なら



緋縮緬の、小布とも想はれやう。

何會社か知らない、向ふの方に續く高い建物、其れに架渡される電燈の煌る夜

球の美しくしさ、狐の變化が傘差して綱渡りをしたら面白からう？ 秋の夜の夜

寂莫は光に破り照されて、文明が隅田の上流に來てゐるのだ。私は蒸汽の窓から

暢氣に、文明が「自然」と火花を散らして野に戦ひつゝ、在るを微笑して觀た。

吾妻橋に近くなつて、船の腹へは大分お客を詰込むで居る。莫迦に威勢のいゝ

兄哥連が短かい角刈をして、香水も男の香ひは嗅いで置け？之れからお酉様へ繰

込まうといふ景氣らしい。浪花節と惚氣と一緒に爲つて粹な縮背な縞の肩から流

れる。自分も酉の市へ行くのだと思ふと心が變に陽氣に成る。

札幌ビールの高いイルミネーションが美しくしく夜の虹のやうだ、吾妻橋畔の闇

に咲く酒好きの憧れる花だ。隅田河も此處まで來ると愈よ東京は都會といふ強

い感じ、頭腦に烙印の様な灼かな印象を得られる。

大小の綺麗な、お寶の熊手が淺草一帶の空に舞ふが様に行く、眞直に擔いでも  
織るばかりな雑踏を喜悅に酔つて自づと斜めになる。阿多福が押被された風呂敷  
の裏で笑つて居やう。

雷門前の景氣は大したもの！ 店頭の電燈や瓦斯は今日お酉様に献するハイカ

ラの御燈明だ、女の髪頭が艶々しくあちこちに光る、道理で女のあたまたまのタマげ

て夥い日である。之れにお龜の面を以てせば、此宵淺草は女人を以て埋ると謂つ

て宜しからう。

今日は福徳を授かるべく人間に油の乗つた日である、慾が福儀のやうに光つて

來る夜なんだ。奇體に天獄羅店が一番に繁昌をしてゐる、大海老小海老の五右衛

門父子が出來てゐる。

仲店の燈火の花の中を通る、觀音様は今夜は方角違ひだ、活女菩薩にお賽錢が

どろ／＼と惚氣の蠟燭と供に献上げられると來てゐる。



千束町に出ると途中は、人間の頭臚と、露店で賣る眞黒い親芋とで埋つて居る。大きな幅一間もあらう立派な熊手の阿多福の面が上から笑つてゐる。

或は迷信かも知れぬが、昔乍らの江戸ッ兒の張りど意氣は、酉の市や斯うした物に残つてゐるのだと懐ふと、北門に足を進めることが満更誕黨のお仲間入を爲るでもない。序でに、少し蠻的だが此間水天宮の噪騒ぎ杯は江戸ッ兒で無くばあの懸命の藝當は能きぬ、

門迄で来る。驚いたのは案外女連の多いのである、彼等は今夜を以て吉原なるものを見物し、女郎なる者を見世物的に観んとするのだ。すべたが阿多福の面を買ふのと、おでこが胭脂白粉の女郎を格子覗きするのは、頗るの滑稽だ。

婆、神さん、娘と其數は、廓中の花魁よりも澤山だ。

『やつぱり、家のお神さんの方が佳いわネ』なんて呶してゐる天狗女房もあつた。

『お女郎なんて、悉皆な容色が悪いのね！ 喜イちやん？』若い男の袖蔭に隠れ

た白い小顔が雀のやうに喋舌くる。

併し、男でも恚うした折には深く觀察が能きる。自分は今晚は之等の盛装した赤や紫の女を特別の晒品のやう、綺麗に並ぶほど果敢ない感じがした。肉も血も通はぬ人形が紅白を飾つた様なのが、活きた人間として哀れに思はれた。と、立つて格子の内から客を呼んで居る、呀！ 人形に足が生へた。

上方では、京都大阪でも所謂狹斜の巷で大抵は張店でないから、随つて女郎は内娘のやうな格で服装からしておとなしい。若し酉の市の如な事があらば、渠等は赤く青くなつて顔は無くならうも知れぬ。

廓内は今宵こそ眞の不夜城だ、二階三階に球と點し聯ねた電燈の光輝は、夜の空氣を眞赤にし、逆さに雲を射て降つて人間の面を照し付ける。櫻痴居士は平氣だが紀文大盡が冥土から目を醒すも分らぬ。

女郎屋でも、負けぬ氣と、惡魔的誘惑に餘念がなく、花紅葉を配合的に綾に飾



つて、二三の大きな樓には宛ら蒲團の火事の如な、真紅な燃えるやうな厚い積夜具がして在る。あの裡で大の字になつて臥たら、男子の血の氣の皮膚が紅りに染むやうで嘸愉快だらうと思ふ、昔の豪快な俠客は這んな位なことは假寐でも行つたらう、黄金の角鏝は穴勝伊達ばかりに差したので莫かつた。イヤ其古の傾城には積夜具にも勝る豪華な錦の心赤い腸が有つたらう？今は引店で薄つべらな女が薄つべらな仕掛で震へて居る。

女の素見連の品評を聞く中々女丈けのことを言ふ、自分と關繫交渉の妬嫉が無いから極の公平だ。然し動物園で孔雀を賞讃するよりか安價な評は申迄もなし。尤も花魁が補襦を後ろで擴げた所は孔雀にも似てはるやう。

西京名代の島原では鐵漿つけた太夫がバケツで雑巾掛を爲ると云ふ、以前と姿が變れば替るもの、果して之を何と形容をしよう？

光る格子と照る格子の仲道は人間の黒山で、先へ往かれぬので、細い小路を入つたが、五拾錢均一の店の椅子に腰を据ゑた、白粉のお化のやうな女郎の賈金欄の廣い長い帯が、前へだらりと恰で金魚の尻尾の様で可笑しい、だがお客の方でも、吉原の塵埃吸つてゾロ／＼鮒の行列よろしく押されて行く。

風景畫家の廣重は新吉原の掛行燈に戲畫を描いた。今此の有様を活動寫眞に撮つて子孫の見せしめに如何？ 藝者太鼓の音曲入で行つたら花柳界の素晴らしい物だらう。

外國では賣女が斯う集つてゐる處は無い、而し彼所の賣春婦は鳥の羽なンか帽子に喰附けて、カフエ杯へ盛んに押掛けて往く横着者だ。其れに較べると吉原の女は靜謐溫和神か佛の如しだね！ 今夜の賽錢は多いだらうか？

大門を出ても矢張り往復の人で一パイだ。秋の夜は十二時近く冷たい空氣が酒と人の氣息とで濕ッぽく温かだ。

千束町は人間の洪水だ、江戸ッ子の粹人は懷中に金を鳴らして之から駈付るの





だ。  
今宵は女が吉原を見た日、だが女郎にも皮肉な眼で市の女を睨むた観察は有らう。

大小の熊手が百華のやうに明るい箱に満つた電車に、私は乗合せたのであつた。

### 苗 賣

毎年、東京の街には、新緑の紫の花あやめが咲く五月の頃になると、定つて苗賣が来る。ドコから遣つてくるのかは判らぬが、其れが亦必と美しい聲を持つて居る。

朝早くから「茄子に朝顔、胡瓜の苗……」宛で顔付きたいやうな聲で晝から夕景まで町を通る。  
男にはきまつては居るが姿を見ずに、障子か格子を隔て、聞いてると、何とも

識れぬ美くしい感じと、懐かしい思がする。果ては涙が滲染んでくる。

西京では夏に、新しい白木の圓低い桶に金魚を賣に来るが、此の聲を聞くと必と睡眠くなる。あの菜の花が咲く念佛寺から售りにくるやうな、おとなしい上方の柔かい調子で……。

私は根岸の町で偶と苗賣に出逢ふた。

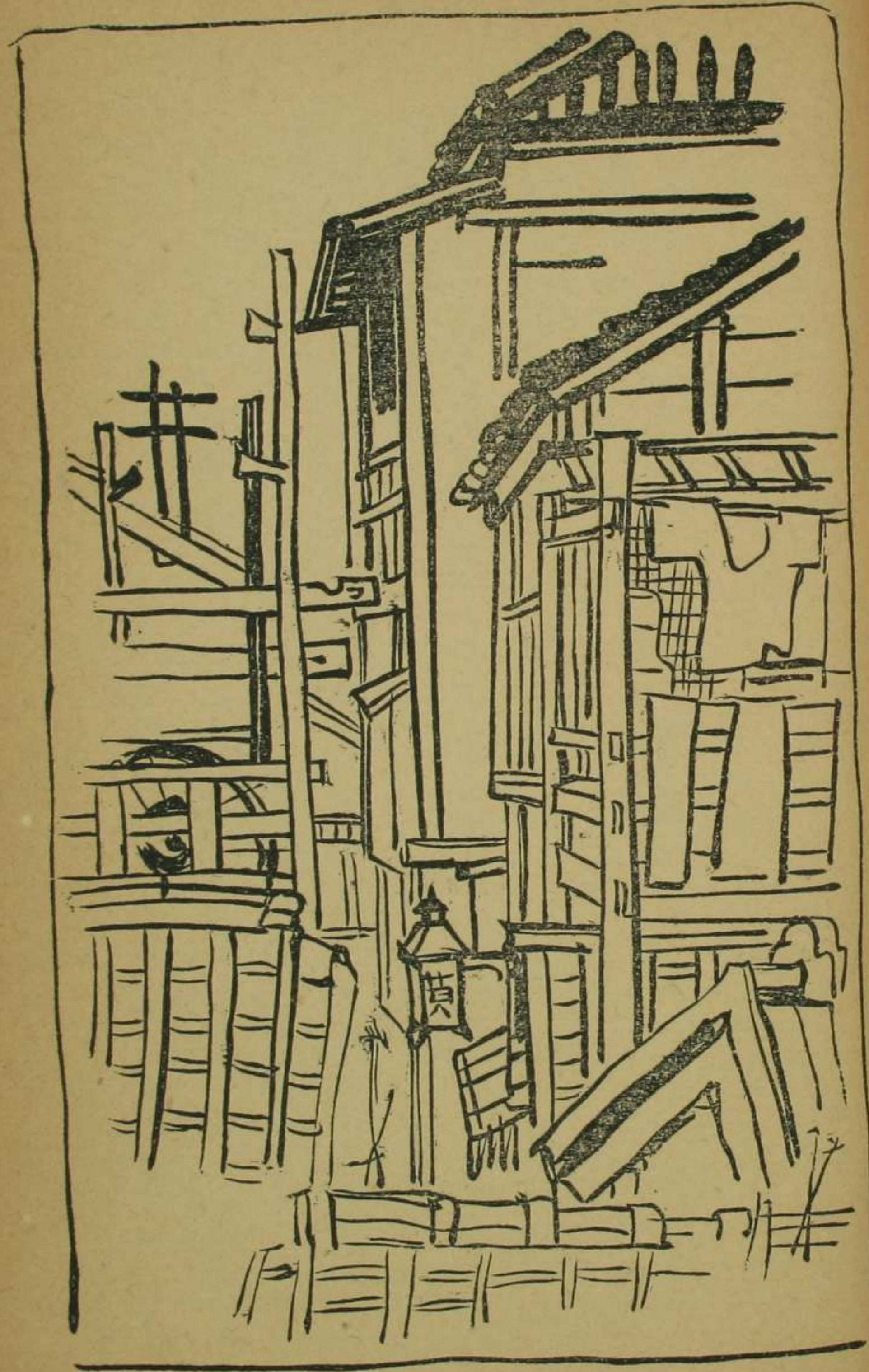
其男は五十餘りの中爺さんで、濼い昔の面のやうな顔をして居た。藁で細かく綺麗に包んだ小さい角な苗箱を、チヨコンと兩肩に掛けてゐた。

笹の雪近く、古風な瀟洒な根岸の家々が、此の爺さんの錆のある美しい聲に一緒にゾツとして顛へた。

あのローマンチックな苗箱の中に、青い小さな短かい苗が、産毛の生へた赤ん坊の様、重なり倚合つて、緑の目をあけて、そして幼い苗共は緑の軽いかすかな息をして居るだらう。町家の庭の畠に植付けられる前髪時夢みてゐるだらうか？

78





都會と柳

私は此頃忘れてゐた故郷といふ事を思浮べた。  
 今一度、只の一度で可い、あの箱の中の苗のやうに、苦勞も罪もない嬰兒になつて、母の温かい懐か、小い安樂な茵に夢みてみたい……、誰にでも善い此の惱める靈魂を何處へと知れず箱に入れて運んでほしい。  
 上野の晝に撞く鐘が青葉の杜を渡つてゆるく響いてきた。  
 運命の神様はドコからとも知らず來る苗賣の様な姿ではないか？  
 苗賣の爺の悲しうみえる影が下根岸の角を曲つた。

私は春から夏へかけての樹木では、柳が第一愛きた。  
 赤、白、紫や黒や、色々の看板と廣告柱の目にたつ神田小川町から。青年會館のある美土代町を電車で通ると、晩春から馬場先門當りまでは柳の緑の若葉が



揺曳してゐる、萌えだした若芽の黄の粉のやうに中空に長う續いて飛散る。

和強學堂のある神田橋から向ふは、私は電車の中で氣もそゝろになる。兩側に

並ぶ若い妖女のやうな細いしなやかな枝が心を櫛ぐる。私の重い頭脳に春の感じ

を繪具の様になすりこむ。

御濠端水岸に影が夢のやうに立つとも無く簇つて、柳の黄な色と光が、堅い電

車の玻璃を徹して私の瞳の孔へヒシ／＼と充實すると、急と兩眼はクラ／＼と眩

暈して頭脳が狂ふ様になる。

神田、銀座で惡い看板廣告柱を見ると、ふと氣持が文明を呪ひたくなるが、

揚柳の緑に對すると自然の懐に飛込んだやう、私は何もかも忘れて了う。骨まで

床かしい緑になる心地がする。

櫻を山や郊外に植ゑるならば、私は柳を全國の市街到る處に美觀を添へてほし

い。空の雲と常に對映して、日本特有の夢幻的ローマンチックの匂を留め残し得



やう。殺風景な物質文明の波が押寄せて来ても根元から動かない、男性的の櫻も  
好い女性的の柳も佳い。

商人が荷物を擔いて往くやうに、私が重い患みを抱いて町を通る折。——あの  
女の髪の様な柔かい、裏に力の強い柳の縁髪に、此の頭、この額を捲かれない。

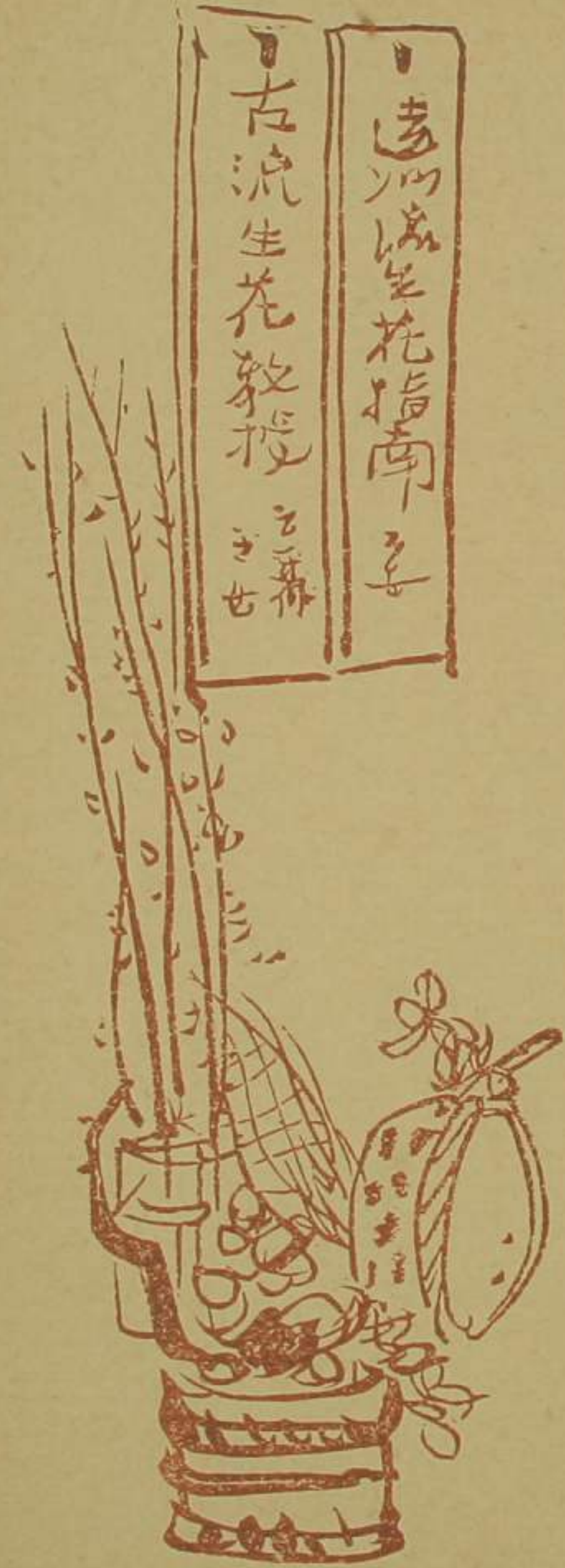
其儘死んでも遺憾はないと、思ふ事もある。

兎に角、縁は『自然』の旺んなる生命で、人間に若やかな春の心を燃やさし、夏  
には充満した豊満な思を與へる。

此の一文は縁のインキで書きたかつた。

### 虞美人草

虞美人草が片町の夜店に火をともししてゐる。黒い夏の夜の土の面を壓して、艶  
な妖火の群が燃えてゐる。青い葉は清新な色に調和をもつて。





私は虞美人草に現代火の如うな女を聯想する。

虞美人草は夏の草花の中で最も大膽な色の花だ、毒々しいほど紅の濃い色が瓣から滾れて、赤い涎のやうに莖までながれて、店の内の灯を欺いてゐる。

黄や白や紫の他の花卉はみて沈んで居る、罌粟の爛糜した情熱に焼かれて、花も葉は息さへもつまつて、外方の清い冷い空氣に觸れてゐる形！

此花は、あの支那人を惑溺甘酔せしめる阿片を含む。いま其れが赤い毒々しい花瓣の面に、キラ／＼最微の粉末のやうに動く、重い匂ひをしき／＼りなしに吐いてるやう。

店の内で灯がワク／＼と燃えてゐる。

印度の若いお釋迦様の感得前の唇は、必と此花のやう熱烈で赤かつたらう？

いま、花店の片側を髪が多いふつくりとした怪しげな、女が通つた。

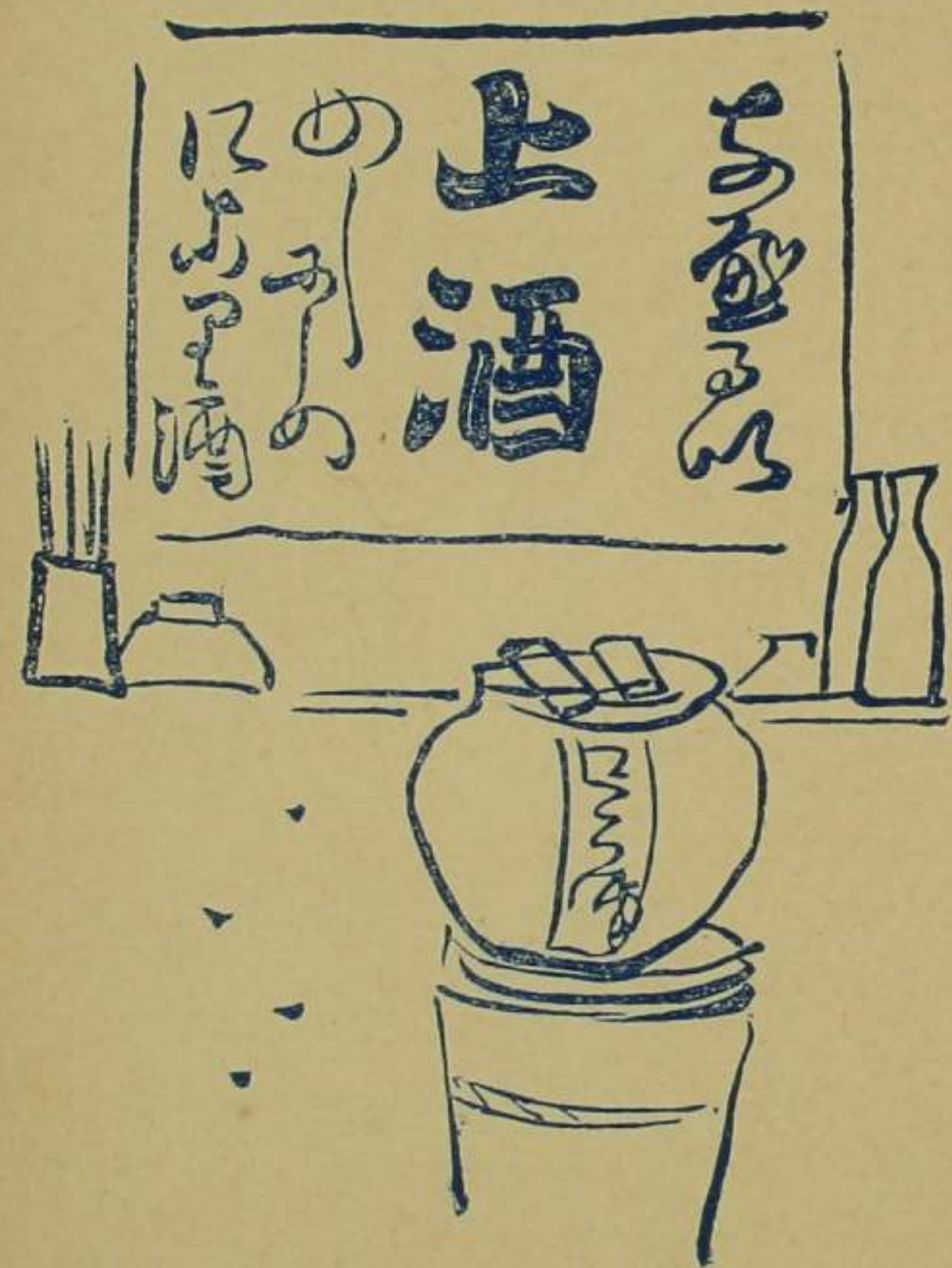
虞美人草が赤く笑つた。



### 繩暖簾の酒客

牛込××町の居酒屋は、貧民、労働者の帝國ホテルだ。  
 此處に入る、頬冠、古麥稗帽子の連中は、黄金の鏈とも見るべき繩暖簾を潜る。  
 夏の日暮、今ま酒宴の最中である。四五十の眼が、朦朧として物悉美しくみえる。  
 一枚板の長い黒臺の上に、洋盞が離々と並んでゐる。其れが、白銀の高盃、水晶の飲具のやうだ。

囊中錢有りや否や、古樽の王座に、車夫、馬丁、土方、職工と辻藝人の徒だ、孰れも傲然の態度！三人の女中（腐れた無花果の面の年増と産に似た小女）が、聲に應じて大塚から、滾々と注ぐ、——焼酎、ブラン、葡萄酒が、荒格子から射す夕陽に映つて、白に、黄に、赤に、中々に奇麗の上に各々虹霓のやうな氣焔や管が、縦横に放發される。其れは、恰度、佛蘭西や露西亞の物語に在る、彼の居





酒屋の光景を偲ばれる位で。希臘古代の藝の如な黒蒼びた巨藝が幾個も肩を並べてゐる。

神經家的の狭い額に、長髪を時々搔上げながら、詩人東野破琴は、エルレーヌ然と控へて居る。平生も冬の青空の様な顔が、酒氣を帯びて夕焼雲のほんのり、最早兩頬は火をちらし熱する。美しい鋭い瞳を昂げて、渠は何か演叫ばふとして、齒に噛み殺した。咽喉元から突上がる思想感情が、泡と化つて結んだ唇から流れる。

世界第一の火山國の地上に、火山的不平詩人が、例の猛烈なるやつを吐いたら、溜つたものでない。渠等醉漢の面々は、狂熱に煽られて、赤裸々に市中へ飛出すであらう。(しかし、元來が百年生きたれぬ弱い人間さ、五尺の軀で何の大活動が能る。亂暴の醉漢が双手を揮つても、家や壁や鉄に當れば、腕は脆く草のやうに折れる。天を高く衝けるか? 地を深く足で破れるか? 人間は到底自然に勝ち



得ない)

溢る、逆潮は胸に引いたが、直ぐ濕みを催すには、貧民連が僅かに火酒で、元氣を買ふ姿！學問の無い代り没野心の暗愚なる顔！獸と鳥と虫に似た亂調の聲！惡酒に脚を奪られて、泥溝に墮る風！アルコール中毒に見舞はるゝのを、彼等とて知りつゝも猶、現世の苦闘に耐へ難く、敗者は武器を一堂に收め、美しい文明の日蔭者は、妻を子も忘れ、家を身をも忘れて、盃中に沈溺してゐる可憐さ!! 待合の紳士が、色海の鯛や鱈や鮫なら、彼等は皆水溜の子々だ。——今、此家の前を、繩暖簾を自暴歌にうごかせ乍ら檻樓の漂浪者の一群は、大手を振つて何處の銘酒屋へ急ぐのか。神樂坂に起る、賑かな話聲と下駄の音は、醒かゝつた酒客の胸を激さすのか？ 彼等の眼には憎惡と呪咀の光があつても、互に相憐むの色も見え

る。何を感ずつたか、忽倏、飛雨電光的の詩人は、臺を叩いて立舉つた。

「世には來世の空華、空樂を宛にして、可惜心身を日に夜に、削る愚かな自殺者が多い。然らば、此の會合の諸君は、皆悲むべき賢者である!!」渠は、尙ほ「健康を祝す、諸君!」

燈影に、長い髪をサツと拂ひ、目は快く煌いて、波々と更に一盞を叩いだ。

### 馬肉屋

濠洲から牛肉の氷詰が、雪の白濤に揺られて、蒸汽船で輸入せられるやうに成つた此頃。内地の牛肉は餘り高價で兎角一般社會に、殊に貧乏人の陶器よりも劣等の齒には合ひかねると謂ふのか、此節、淺草公園附近に安値な馬肉屋が殖えたと聞いて居つたが、今日は一つ思切つて飛込んで見たのは矢張淺草公園の赤い馬肉屋。——得て此邊は吉原邊りから馬がウロツク處だ。

言ふ迄も無く東京淺草は、人間の快樂と、墮落と、暗黒との集合所だ。晝も夜

78



も、現出る、男と女、流れる酒、零れる白粉、打たれる喧嘩と博奕、走る泥棒と  
 掏兒、——大きな變れば變る活動寫真だ。其の片隅の溝の傍に小さな馬肉屋！  
 道路に向つて、表面の看板代用の建障子には、「馬肉」と朱で書いて、墨で一人  
 前金四錢とある所を入ると、狭い土間の横側に、高い厚板の俎臺が据ゑられ、其  
 上に赭黒い馬肉の切身が、山盛にされ、眼のギロリとした人相の悪い男が其前に  
 立ち乍ら、鼻唄を歌つて居る。——手に持つ大庖丁が釣洋燈の光に反射して凄  
 漢子の背後には、血の滴れさうな馬の胴から脚へかけての生肉が三箇もブラ下げ  
 てある。板から出た鐵製の鈎は馬の目玉の如くに爛る、隣りのは牙のやうに上に  
 曲る。

一瞬間に、自分は瞳を轉すると、薄い細い木板で仕組まれた棚の上に、正宗の  
 一合壺が冷い小肩を喰着け合せて並び、下の段にはビールの黒壺レットルの割げ  
 たのが置いて在る。多分泡も氣も拔失せた空虚だらう。——今ま這入つた客が恰





度斯んな顔をしてゐる。

馬肉店へ登るのは本月初めての自分は、框を跨ぐと早や一種の奇な嗅芬が鼻を撲つた。見廻すと、長く取つた汚穢い、六疊の部屋に、普通の牛肉店のご同様の銅臺が在つて、客は五六組もジイ〜と荐りに泡と蒸烟を騰て、啖つて居る。古壁に貼られてある俗悪な繪ビラと、此種のお客の顔とは太甚だ面白い對照である。洋燈の火は笑つてるやうに天井に燃えてる、一方店頭肉場の所からは大洋燈の光が赤く睨めるやうに室内を射る。

で、自分も先づ眺へやうと、胸すこ、右の壁に小さな黒く塗つた短冊型の板片が懸つて、白く表に餛飩粉か何かで、ピフテキ、カツレツ、ラムレツ、コロツケご一つ〜、西洋人が始めて日本字を稽古した風の下手な書振で、一皿、僅の七錢とは馬鹿に安値い。

此時、女中が「何に致しませう！」と注文を訊ねる。





馬臭を壓倒するには、イデ酒の勢を借らうと、「オイ、御酒だ……」

「お誂へは馬肉ですか？」

鏡睨めの眼をした女の、蒼白い頬邊へ枯草のやうな髪を四五筋垂れたのが、側に立ちながら不愛想に言ふ。

「呷ン」と頷く自分に、つとお尻を向けて、

「馬肉でお誂子！」呷鳴るやうに呼ぶ。

酒が来た。

炭火は最う眞紅に熾る。鍋中の緒黒い馬肉は沸々と音をさせて、泡をたて、煮えかゝつて来た。白い葱の香は少し鼻端をツンと衝く。

最初めて、肉に對する時は、何でも總て動物の肉は、或種の妙な、變な感じがするものだ。然し、人間自然の欲望は、其の肉の香ばかりでは満足能きぬ屹度、肉の強い力に引入れるるのである。

で、自分の持つ箸も既う汚れた。口も瀆れた。腹の中で今馬肉は轉がつてるか、腸と一緒にぐたりごなつて溶けかゝつてるか？斯う考へて一寸目を瞑ると、

肚の内て憐れな馬の奴が悲しさに嘶くのが聽える。重い荷車を年中挽かされた揚句、痩せこけた老馬の姿が醉眼に朦朧と顯はれる。——人間が始めて牛肉を啖

つた時も氣持の悪い感じはしたらう。

突然!!!

「此處のけこばし屋は上等だ……」

聲に驚かされて側を向くと、一人の土方らしい大の男が胡座を組いての獨言だ。

けこばし屋!

馬肉屋をけこばし屋とは可笑しい、甚だ振つた稱號だ、と自分は思つたが、現在けこばしを平氣でバクツイてるのかと懐ふと、人間も餘り上等の動物でもなささうな。



此のけとびし屋へ今上つて居る客は、自分と共に六人である。前に土方、職人、車夫(馬と相憐れむ人)番頭、と安官吏と而して僕だ。孰れも本綿のお粗末な服装、背中を向けた印絆纏が特に目立つ。

膏薬を貼り着けた古壁と、腸破れた古障子とに囲まれた狭苦しい一室には、熱氣を含む馬肉の煮える悪臭と、濛々と焜爐から立騰る蒸發氣の中に、六人の若い男の姿がボンヤリと浮ぶ(余一人は沈む)が、夜は既う十二時を過ぎたらう、何だか自分の頭腦は妙にグラグラと神経過敏になつて来て、天井から落す薄い洋燈の光に、灰色の鬚を長く頸へ垂れ下げ、巨な黒い瞳からは豆粒の如うな涙をホロホロと零した老馬の形影が、幻のやうに現出れる。

自分は厭嫌な葺の煙に咽せた、  
煙草——枯草——馬糞、折から空徳利を持つて茫然立つて居る女中の崩れた頭髮の毛が、野の牝馬の鬣のやうに見えた。店場からヒョいと顔を出した肉切男の赤鼻が、残酷に馬を取扱ふ田舎の百姓に似て

ゐるのも不思議!!!

「君、最うソロソロと線込うかね?」

先刻から兩人、差向ひに爲つて、チビリチビリと酌んで居た相手の一人が、箸を置いて言ふ。

「何、馬鹿を云へ! 間夫は引廓過ぎだ!.....」

單獨で淋しさうに二時間も飲むで居た、四十歳餘安官吏の古洋服は丁度今お起ちだ。馬の脚のやうトボトボと夜道を那處へか還家る哀れな姿を偲ぶ。

「ハイ、有難う御勘定!」

睡眠さうな、少い女中の聲.....

自分は馬肉は一人前、唯銚子計りは五本も膳の上に倒れてゐた。

不意と氣が付き障子を開けて見ると、隣の家根の瓦に既う一時曉方の霜白く置いて、公園千束町邊り「雪折笹に群雀、今朝の寒さに歸へされよか.....」未だ寝ぬ



のとみえて肉賣る白首の歌ふのらしい、淋しい三味線の音が風に流れる。

### ホーカイ節の娘

原稿紙を机の上に、吹込む風にひらくさせた儘、筆も投げて置いて、石鹼と手拭を片手に自分は銭湯に出掛けた。

横町、夕の涼風に淺黄の暖簾が波うつてゐる湯屋の前へ來ると、向側の肴屋に、

赤羅のホーカイ節の娘が踊つてゐる。

黒い色眼鏡をした散髪の若い男と、その又一人の四十位の薄鬚の漢子が、二挺の月琴を鳴らす。

娘十五六の手の軟柔やかさ！紅い木綿の長い袂と、これは辻稼ぎの習慣割合に短い裾色とが、上下左右に翩翩へる。扇子が軽く舞ふ。

些か墨で引眉を施した、黒腫勝の可愛らしい娘ではあるが、折角濃く塗つた顔や

頸筋 白粉が無残や溶けて、所剃げがしてゐる。たゞ、膨合らした白い小脛が露はに、燃ゆる裳の裏から滑り落ちる。

肴屋の盤臺に、並べてある生きのよい背の青い鯉の四五本が、女の肌の香に當に泳出しさうな此場の景氣……。

何様、無錢の興行であるから、湯屋と肴屋との真中には、可成澤山の人集りである。

自分の原稿を書くに全く疲切つた頭腦が、何だか、ホーカイ節の一種の陽氣な、華やかな、その遣放しな流暢な歌謠と調子に、妙に心持のよい刺激を覺えた。鉛のやうな重い頭は俄に黄金の針で突ツかれたやう、闇中に急に花の雨が降つて來た様に感ぜられた。

寔に數時間、自分には青白い詩の廣い國から、今歡樂の人間世界へ還つて來たといふ感じが湧いた。

78



筆を投つて、劍の人高杉東行が風流の情懷を生じた。  
今ま、娘は恰度、踊りを仕舞つて、襟元へ流れる玉汗を長い緋の袂で拭いてゐる。疲れ果てた顔だ。

眸を据ゑて、始めて女の尋常の姿を善つく視た。細そりした咽喉は白粉と垢とで薄黒う汚れて、亂れて解けた髪の毛が乳房を覗くやう懸つてゐる。

夏の炎天に、生活の苦勞は娘の身には骨であらう！まして黒眼鏡の二個の悪魔が喰附いてゐて、肉聲と音楽で二六時中強ひて女を踊らせる。彼女の收得を吸ふ磁石のやうな男だ。娘の青春を樂器の中に封じてゐる。

爰に自分の手には、石鹼もある、新しい手拭もある。いざ〜！。娘よ一風呂浴びさせて遣つて、塵も、白粉も、垢をも玉のやう綺麗に落させてから自由に奔放に、都大路を子兎のやうに寧ろ裸體のまゝでも到る處、氣儘に走らせたいと思つた。石鹼の泡のやうなローマンチックを考へた。

實は自分も、其幾年となく詩の青い廣い國と、世の中の怖ろしい習俗とに囚はれてゐた、一箇の憫れむ可き人間であつたのだ。

奇石大石ゴロ〜と横はる面白い、狂瀾怒濤壯快なる政界の廣い方面が見えた。

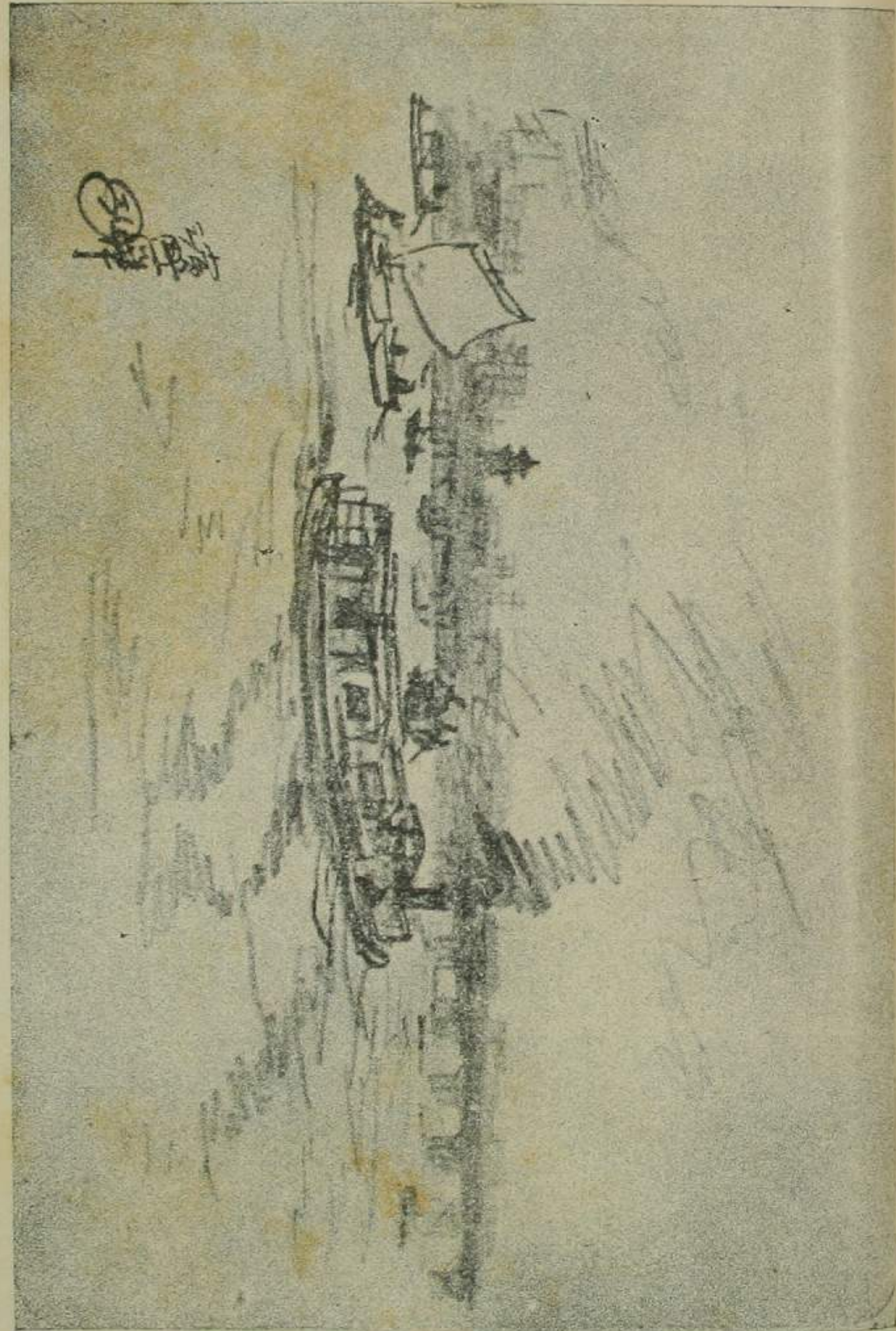
那處やらでせゝら笑ふやうな聲が聞える。――  
詩人は運命の傀儡子!!!

### 出水の記

新聞にも、寄るとたかると水の噂、されば火爐の火の人は、水を視に往くといふので。夕暮、肌白い水色の浴衣一枚、素足に軽い下駄をひつけて東へ、小石川の綠蔭を吟じつゝ行く。青い空に雲が飄々として飛ぶ。

途々、竹杖を携つた草鞋穿の物々しい水觀の人に會ふ。盲啞學校の通りで一盲





人が、何れも杖をついて暗潮時代の闇中の人だ！と第一番の痛罵を放つ。

涼風に長髪を拂つて仰ぐと、雲の波目に星が一つ、團子坂を下りて闇の谷中の

墓地を死人の如に過ぎる、蒲鉾形の月が早や杉の梢に出てゐる。

水の浅草へ萬年町を徒歩する。向ふから來る人の話が水の呷きのやうに聞える。

十丁計り往くと足にヒヤリとした既う水だ！！

兩側の家は床まで水に浸つて、燈火は水の奥に點いてるがやう。人は皆蒼い面

して板間に座つてゐる。赤ん坊が何を知つてか哀しげに聲高く啼く。

例の杖の連中は、東より西より濁水を渡り歩く。渠等は人の難義を知らず顔に、

花見より面白う笑ひ乍らの後影、蓮葉娘も交つてゐる。——自分は彼等の屋に火

を以てせん事を神に祈つた。

犬の奴が床の上に居る。當に大道に人狗の如く、犬人に似たりだ。恰も世の終

りが想像される、其時には、智的に跋扈した軟弱な文明人は、動物に負けて地位



忽ち顛倒するであらう。

男の人は態ど水を沃けるのよ……』五人の中の一女が言ふ。女工らしいのが股迄も露はに水に甜めさせて、赤いものが水に浮いてるがやう。で、之を追ふ野獸の群！動物の本色は斯る際に顯はれる。暗にもしるき眼の輝き、聲の調子、人間の性能は或る機會に燃え上らうとする、我れ識らず魔的になる。社會文明の美しい皮一重は頗る危険なものだ。——水を這ふ肉の香、髮の匂ひ、バナマ帽の紳士の悪戯をしたが髭が獸のそれと見えた。

四ツ辻へ來ると、東西南北のひたひた、水に提灯の火が一つ映つて淋しげに、向の寺の塀の壞れから墓が幾基も青じろう見える。あはれ、白骨が水に漬つて再び娑婆へ流れ出すのであるまいか。

嗚呼!! 悲惨、敗殘の街と自分は思はず叫んだ。

萬年町は名代の貧民窟、降り續いた雨に稼ぎに出られぬ人々は生きて居るのか、



音もせぬ黒い水に女房らしい影が幽霊の如に現はれた、これが宵の口だ。唯ある郵便函に舟の繋いであつた、古昔ノアの方船がアララテ山に止つたよりも驚いた。鹽舟に小供が乗つて遊んでゐる。

平常は狭い溝川で、四手綱を下して魚を捕つて居る。自分は浮世の濁川で人間てふ屑芥を悉く抄ひ棄て、やらう!!と熟考へ乍ら淺草へ來た。

東京第一の虚榮虚樂の巷、夜も甚く賑ふ此處も一面の水、例の池の境界は分らない、緋鯉共は那所をさ迷つてゐるだらう。

青木一座は洋燈は煌いてゐるが、休業中で童男女は常着で固まつて戯れてゐる愛らしさ。球や綱が可憐の彼等を苦めぬならば、我は寧ろ雨の倚ほ千日も續かむ事を欲する。洵に、天日も不幸なる兒等に何の恵が要かはである。

六區や千束町の方へ廻ると、燈火仄明い二階に、所謂化粧の物だらう窓から髪が蔓の如に垂れてゐる、白い手が胡蝶のやうに翻く。渠等は密に客を呼んでゐる

のだ。——戀には水を怕れず徘徊する素足男もあらう——女も水を憚つて嬌聲も至つて細い。——あ、女よ、爾は元々水性で流れの身、其の名は鴨か白首の今更水に駭く譯もあるまい。向方には五層樓臺、汝より美しい何千の姉妹が居る。吉原は年中涙と情との洪水である。

敷石も火光に照つて噪々しい仲店の處へ來ると、水難者であらう老婆は風呂敷包を脊負ひ、嫁は乳呑子を脊に、汚ならしい二人は竹杖を突いてトボ〜と往つて了つた。闇は文なし、大慈の觀世音も救ふて下さるまい。

今ま吾妻橋の上に立つた。水は兩岸を高く漲らし、橋一つ兩國昨日の花火は夢か真に果敢ない煙、一艘の小舟も見えぬ。濁浪滔々轟々鐵橋の柱に逆捲き打ち、宛ら弱い人間の世と力を嘲る大自然の聲の如に聽えるのであつた。

聲 色



礪川白山神社は今宵は祭禮だ。

赤い提灯は軒から軒へ珠のやうに懸聯る。

樽御輿を擔いて白衣の小供が、ワツシヨイ、々々々々々！と喚叫く、小さいお

髻と脛がびよこりくと宙に飛廻る。

高い檣臺の上に馬鹿囃がある、二人の面を被つた男が最中踊つてゐる。彼等は

高い處から世の中を馬鹿にして躍つて居る。黙々たる面の裏で目をひいてゐるか、

舌を出してゐるか？兎に角滑稽な面は、古代が現代文明を馬鹿にして踊つてゐる

のだ。

素人浪花節が始まつてゐる。小さな角い行燈に連中の名が細文字の墨黒々、視

いてみる、例の御入來の囀鳴る太音も、コレは何とした！宛然秋の蚊の唸るやう

だ。三味線がペンコシヤンコくと泣く。

緋の燃える如うな毛氈の上一杯に、緑の青々した美事の生花を並べる家がある。





何々宗匠、何々女子と麗々しく名が録されてある。……内の柱の蔭から眞白い緞い手が一本出てゐた、虫のやう指環がピカリと光る。誰れか「其の手！々々々」と呼つて往つた。

香具師は道傍の兩側に、骨の如うな据店を張つてゐる。長廣告で矢鱈種々の物品を賣つてゐるが、中に書生風の若い男大に能く饒舌る、手品も行つて見せるし、詩的だとか、痛快だとか氣の利いた素敵な理窟を並立するが、之れでも、一人前の生活も出來ず、江湖に落魄して香具師の群に這入り、長髮人相は悪くはない好男子だが、夢更、露國杯に在る野天詩人にも、木賃宿詩人にもなれないのだ。其のお隣に、一人の底深の麥稈帽を被つた青年が、讀賣の歌本を售つて居る。……之れも詩人でもない。

球燈をぶら下げて、蓄音機の店がある。眞鍮の大ラツバが象の鼻のやうで、色色の物を吐き出すのを、大勢の男女が周圍に集つて聽いて居る。蓄音機師は齒を



剥いて黄色い濁聲を見物の頭上へ浴せ掛ける、——飢渴の餓鬼の聲——臺のゴム管からは男女の耳穴へ快樂の淫音が。

祭禮の宵の口だから人通りは大變だ。人間の頭髮の連續く大河の末に、一個の火も點らぬ暗い場所がある、其影に一人の男が佇立んでゐる。

檻樓で固めた様な漢子が、聲色を遣つてゐるのだ。唯灰いろの顔、口がバクリ

「旦那方！ 請願、お鳥目を投げて下さいな。只今は汽車でしたが、これから赤ン坊の産れる所を試ります」

「人間は墓へ行くのですが、一度は皆女の胎内から出たもので、誰方も此處を聞た仁は在りますまい！ 御亭主でも之れは見る物ではありません、夫れを今私が演るといふのです。……ダウン衆様、最少しバラ／＼と投金げて下さい。而してら、直ぐ赤ン坊が産れます！」

誰れも一語を發す者もない。——小錢が闇の地面にカチリ鳴つた。

五十男は袖口から些に手を出して、少し振り乍ら

『御覽の通り、此れが寄席の高座だつたら、ガン々々と電氣が點いて大景氣ですが、何しろ、一枚板の青天井に燈火なしの大道ときてゐますから、可哀相ぢや有りませんか！ 不憫と御思召したら幾錢でも投げて下さい、少しも耻かしくありません、お貰ひ申す此方が何程恥かしいか知れません！ 今少々バラ／＼と抛つて下さい、暗くても手で探れば有難い分ります』

秋の夜の小時雨？ 今まバラ／＼と降つた様子。

其處で、男は手眞似、口眞似、赤ン坊の産れるところを演つた。オギヤア、々々々々と三聲四聲……産婆の假色まで遣つて見せた。兒を背負つて居た若女房が袂で面を隠した。

此男、現在は此の姿だが、元來は金満家の錦の褥に産れたかも明らない。人間



が若し最一度生れ直せるものならば、此の巧妙な聲色を正可大道で使ひはせないだらう。

稍喜悅の色を、男は面に浮べて更に

「今度は、動物の聲の遣分けを致します。獅子でも虎でも、鶴でも鶯でも……、獅子と虎とは永らく上野動物園へ通ふて勉強しました。如何です、皆様、此中には新規なお客も御座んしやう！ドウゾ一つ試らせて下さい。夫れから杜鵑もやります、これは墨田川の綾瀬の渡しで聞きました。まだ珍らしいのは田舎の畠に居る頬白でもやります」

同じ口舌を十遍も繰返す内、祭禮も少々軒提灯の明りと下火に爲つて、立留る人も多くはないので、這回は男は二三錢の鳥目で満足した容子——。

獅子、虎、鶴、杜鵑、鶯もカナリヤ迄も、指を口に咬へて見事遣つてのけた。二三日前、淺草を通つた時、公園の暗い便所の片隅に、矢張り此男の姿を見

た。例の風だが併し場處だけに稍得意らしかった。

今度は、死に瀕つた臨終の病人や、手長猿の聲色を遣つて居た。

### 大道の蝮賣

赤門前に蝮賣りの男がある。露店には極めて珍奇な物の一つだ、梅雨の夏の夜は晴れて蒸暑い。

小な莫莖の上に、蝮を水漬にした中瓶が入つ程竝んでゐる。

私は拵へ物か、蝮は死んでゐるのだと思つたが、鎌首を持たげたので、活きてゐるのだと分つた。細いのと、小太いのと、全體は焦茶色に縞の黒い斑紋がある。頭から喉へ極微の龜甲形の黄白な鱗が、彫刻のやうで美しい。

蝮賣は五十位の地方辨の爺だ。

効能は、小兒の寢冷に、夜啼、總て脆弱い子供に宜い、大人も神經の疲れ、元



氣の落ちた病人に利くと言ふ。

まじしは悉深山で捕つたので、大いのは十年を越してゐる。價は小さいのが二十錢、太物で七十錢！

アルコールか、焼酎へ蝮を漬ける。奴は飲酔て苦悶して死ぬる、強い脂肪の浮いたギラ／＼したのが非常に効くさうな。

爺の田舎辯の訛りが不思議に調和する。

私に、古來怖い筈の蝮が、恠う瓶の水に容れられるのを見ると、決して嫌惡な感じは起らぬ。寧ろ夜目には小動物が、女性的に、黒茶の斑紋が凄く艶に考へた。

石聖造の佛蘭西に、甚い泥酔漢の詩人が居た。一生熱艶な詩句を吐いて、死んで國人に強い生命と刺激を與へた。

赤門前、





文明の現代には、妙な、變な、商人が出るものだ。

### 赤提灯の占卜者

ピカ／＼頻りに大きく電光がする。白と黒と混交つた凄<sup>すこ</sup>い雲が、むくらく／＼綿<sup>わた</sup>波のやうに光り擴がり動く。東京洪水後の大威嚇だ。

本郷通の、凹んだ明地の廣場の夜、赤い圓提灯が一個闇に點火つてゐる。大勢の人が圍んで更に闇を暗くしてゐる。

白金巾のナポレオン帽を冠つた長髪の漢が喋舌る、眼鏡をかけた白哲のいかめしい大男の占者だ。彼が左手に持つ提灯には赤い鬮<sup>はくろ</sup>を丸に取つたのを紋章とし、紅い線入りの提灯は血のやうに燃える。

五六の若い人を灯に照して鑑定した。孰れも弟息子計りだと斷言した、但し此の見料は無錢だ。成程、跡目も續けず家出する漂浪の相もあつた。



渠は今度は、房々と長髪を領に振はし、調子を一段と高めて、

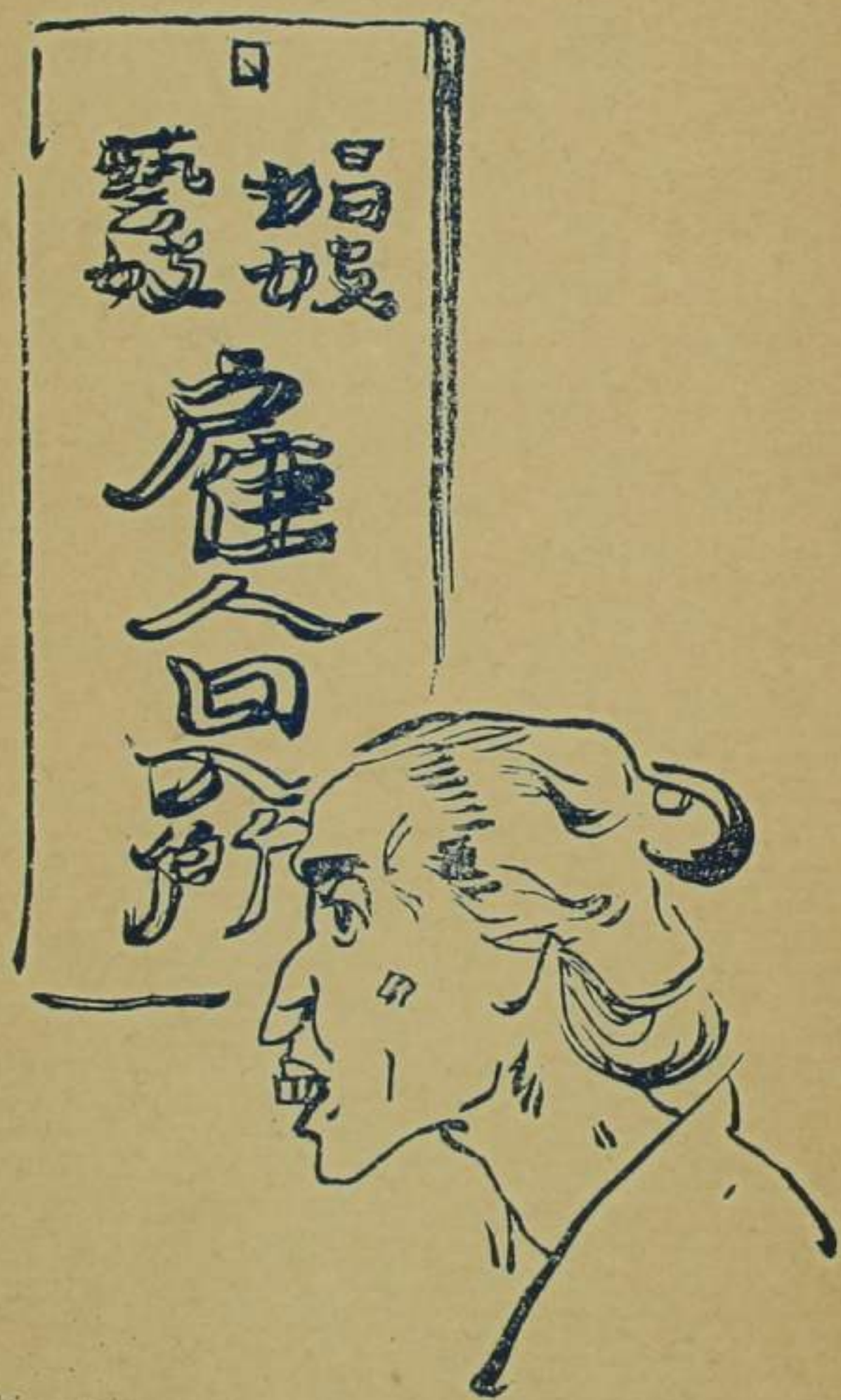
「諸君！此間故人となつた伊太利の有名な刑法學者ロンブローゾーは、總て罪人は生れ乍らのもので、二千の犯罪者の鬮を調べて見たら、皆後脳部が異状つてゐたと謂ふ。だから、人間の骨相運勢は既に赤兒の時から定つて居る……」彼は殆んど叫ぶ如うにして、そして例の赤い鬮の提灯を、聴衆の前へ手で照す様に差附けた。

占者の怪しい鬮の繪は、此時更に、ドス黒味の赤い濁つた血色に燃えた。空から、稻妻の青光がサツと許り、其上に打ち卸ろした。

聴衆の黒い影は後ろに開く様にした。

電光のする夏の宵の街、傘の用意も無く、平氣で香氣で集つて居るは流石に江戸ッ兒だ。

赤い鬮の提灯を差出された折、私は頭腦の狂した文學者の惡運命を考へた。





そしてギョットした。

四丁目で、果して満天の黒雲私はどしや降りの驟雨に會つた。

廣場を通つた。前は、神の震怒、世の終末の様、猛烈で凄まじく青白かつた電光と大雨の跡……。鬮體の提灯の占者も、寂然として闇に人の子ひとり居なかつた。

### 零 落

春の初めに、二人の仲に一本の翳す雨傘も持たずに、夫婦の者らしいが都大路を、トボくとして何か囁きながらに往く。

冬の舊い儘の薄い綿入、無論綿目も分らないが、何れ憂世の雨風に、幾度か洗ひ晒されたのだらう、塵の模様。でも有繫女は袷巻をしてゐるが、白足袋の汚たの痕もいたくしい。



雪は遠慮なく鹽のやうに降頻る。夫婦は肩と肩とを喰着けて、未だ何だか囁きながら行く。

屹度、田舎からの漂浪者に確つて居る。那の田園に居つたならば、夫婦安樂に、群鶏と一緒に日を暮されたらうに、一時の迷ひ心は、自らの體を、辛酷な都會へ逐出した。

未だ何だかヒソ／＼囁いて居る。兩人の間に此の一言を告げる者も無い。犬よりも憐れな都會の敗慘者を、田園に追還す親切な人もない。

雪！雪！

復た變な雲が出た!!!

彼等は、現在壓迫されて居る都會の空を瞻上る勇氣も無い。

### 小泉八雲の墓

左右に並むだ樺の大木の若い細かい葉が、春の陽氣に青々と枝と枝に高く、燃える様だ。其下を私は雜司ヶ谷鬼子母神の方へ入つて往く。小鳥の啼く音が柔かい風と交つて、帽子の縁に水の快い雫のやうに落ちる。

名物焼雀の障子看板が四五軒に立掛けてある。秋なら香匂が必と高いだらうと思ふ。

鬼子母神の少し手前に、石で刻んだ仁王様のやうなのが、紅い唐紙をベタ／＼と貼られて立つて居るのも春らしい。

神殿には晝の御燈明が點されて、種々金製の神器に煌めき。淺黄や白に字を染めた手拭が柱の處にヒラ／＼してゐる。

『福田會育兒院』の赤い寄附函が在り。色々の鳩が神前の地面で餌を拾つて居る。四邊は極めて物静かで音一つしない。私は斯うした場所こそ彼の詩人ハーン氏が我日本に於て最も愛好する、情景であらうと考へた。拍手をする西洋人を髣髴



する。

廣い雑司ヶ谷は春の田圃で蛙がコロコロと頻りに鳴いて居る。青い草地に二本の櫻は七分落花して死んだ胡蝶の翅のやう、一方畦の春の水に摘草に來た姉妹らしい少女の緋の袖口が映つて美しい。雲も白う向ふに映つて見える。

朱塗の玉垣、幾百本と數知れぬ朱の鳥居の建列ぶ名打の稻荷。之れもハーン氏の神秘主義に叶つた不可思議の物と眺め乍ら、古い饒山な墓地を抜けた東西の細い通りへ出た。

ハーン氏改めて小泉八雲の墓の在る、新墓地は何處かと尋ねて直ぐ判かつた。三四町往つて道の角に石屋が墓石を彫つて居る。李の白い小さい花が一面に零れてゐる。

餘り廣くもない新開墓地の稍奥まつた所、ハーン氏の墓は五坪計りを方形に限取つた、瀟洒りとした綺麗な一構だ。「小泉八雲之墓」と刻まれた薄青色に磨上げ

た小高い美麗な花崗石が、緑の中に圍まれて静謐かに立つてゐる。

墳墓を取締る幾種の樹木は皆、故詩人が生前に愛好された縁りから植ゑたのか若い檜、八ツ手、竹、南天など、青々として世界に名高い抒情詩人の骨を守護つてゐる。殊に日本好きで日本で亡くなつた氏が墓に、西洋の花木の些の影形も無いのが床しくて嬉しい。

八雲氏の未亡人何子か、其の愛兒家族が、氏の祥月命日に手向けられたのか、未だ新しい墓前に、青い櫛の葉が少し春風に亂れて在るも無縁乍ら涙だ。

氣候花も暖かき伊太利シ、リーで産れ、青年米國に渡り、印度に行き、燕のやうに南へ南へと戀憧がれ。遂に我日本に渡つて來て、爰に姓も小泉八雲と日本名に改めて妻をも日本の女を娶り、終に其骨までも平常愛する日本の土と成られた。墓の背後の垣に重ねて在る卒塔婆に、何々淨華八雲居士とあるに、南無阿彌陀佛唱へたい。



飽迄で南方的、羅馬人種に見る銅色した顔貌、甚い眇眼の陰鬱なハーン氏は、文科大學の講堂で其の得意の講義の折には、其の聲恰も銀鈴を鳴らす様が美しくかつたと聞いた。煙草も鉈豆の煙管で吸はれたこの話だ。

春の日の午後、重たい頭腦もうつら／＼獨り墓前に佇盡した自分に、深い深い墓の底から詩人の銀の鈴のやうな、ローマンチックな優しい聲が漏れ出た。恰も新ロマンチズムの新運動が、若芽若葉が萌えて輝やく武藏野の一隅から興るがやうに。

一枝の彩管靈筆で、我が日本の風俗をば世界に紹介した、詩人小泉八雲氏を口笛は長く讚美しつゝ、私は立去つた。

### 網島梁川の墓に詣づる記

春の雜司ヶ谷村、鬼子母神の附邊を歩廻つて、舊知網島梁川氏の墓を訪ねて見

た。

櫻は些かの有るか無しかの風にも最うホロ／＼と、梢から零れて、此日の午後、白山御殿の吾寓から林町までは花の降り舗く道。細い迂／＼した路を通り、大きな坂の上に佇立んで、音羽護國寺の高い黒い屋根瓦を望むだ。其の迥か上方には、春の眞綿のやうな白雲が長く千切れて動かない。

私は煩悶の重い鈴の如な頭腦を垂れ乍ら、坂を下りて數町、護國寺の例の巨大な朱門を俛つて、石段を拾ひ、御堂の前の處へ來た。此時、小高い石段の下方に當つて、チリン／＼と涼しい鈴の音が聞えて來た。

振り回つて見ると、白い五尺位な旗が動いて、男女の一隊がやつて來るのだ。其の傍に青銅の盧舍那佛の御肩が見える。

少時立止つて居ると、竹の端に吊した旗に『御大師元講』と墨黒々と書表したのを持つて、十人餘りの善男善女が、チリン／＼と腰の小鈴を振鳴らし乍ら、私



の傍を往過ぎた。

私は數日來の苦惱に、赤う脹れた險重い眼で、彼等の篤い信心者の一連を見送つた。折しも櫻の花が極樂淨土の花のやうに彼等の上に降つた。神も佛も、靈魂の存在をも信する心を失つた、近來の自分には、此の淨い境内で大師詣の男女の姿が羨ましくてならなかつた。私は是迄幾多の金縁の詩集を繙いたが、未だ曾て、彼の旗を持つ男程の平和と安心とを得られない。

廳で、櫻と若楓の青々と燃えて美しい、本堂の側を思に沈みつゝ通つて、護國寺裏の、例の墓石の澤山に在る場處へ來た。私は此の幾百の墳墓と化した人間の安靜が欲しい、暫時、一個の古びた墓石を拂ひ腰打掛けて、深い〜瞑想に耽つた。和煦たる春の光は後光のやう、私が手で以て重う抑へてゐる頭腦の上に、キラ〜と輝いてゐたであらう。私の長い髪が艶を帯びて空の白雲が憧落ちさうて在つたらう。

物の十分も経つて、黝黒い濕つた土滑かな細道、墓石を彫る家の横手を通つて、武藏野の總ての樹々が、若い緑の芽を吹く廣い光景の中を、私の悶えに悶える黒い薄い影が、漸々と鬼子母神の傍迄で來た。櫻の花が彼方此方に白う搖曳して見えるし、雜司ヶ谷の春色は既に充分である。

梁川氏の墳墓は、雜司ヶ谷は新墓地の内に在る。私は、黒い泥のやうな血潮と脳味噌とが、雜然になつた様な頭を擁へるやうに爲て、其餘り廣くない墓地の内に入つた。

見よ、我が綱島梁川氏の墓は、丁度その入口に立つて居る。自分は先づ帽子を脱いで、少時は何とも言へぬ感想に落ちた。

墓は、手狭な二坪斗りを隈取られて、四五尺の蒼い美しい未だ新しい花崗石で、表面に梁川綱島榮一郎之墓と彫られてある。裏には明治四十年九月十四日永眠と悲しくも記されてる。

78



吁、一代の見神者、我が平和な詩人の新墓の側には、春に若葉の萌えてゐる細い數本の木が立つてゐる。

私が梁川氏を訪ねたのは、明治三十九年の、梅の花がチラホラ咲出す頃であつた。平常花好きの氏の庭には、數種の花が開いてゐた。座敷の中にも花瓶の綺麗なのに、美しい紅い花が挿されてゐた。

梁川子は、眞白い雪の大な塊の如な蒲團に、瘦せて淨らかな體軀を持せかけて、甚だ蒼白うはあるが、例の人懐っこい温顔で、自分を迎接へられ、種々と、文學、宗教の有益なる話を聞かされた、忘れもせぬ此時斗りは、厭世と不平とに頭臚が火の如に苦しい私も、平和な春風の裡に在るの思ひで、額の青い秋の濤の皴も伸びて、幾度か嬉しい微笑を禁せなかつた。

私は此際、梁川子の死が既に軒端までも押迫りつゝも、胸底無限の平和安心を湛へて、少しも怨恨とかいふ感情の仄かぬのに對して、私は眞底から、成程、神

を見、神を信じ得た人が幸福と、威儼とを明かに視得たのであつた。

其の翌年の秋、梁川氏の訃を聞いた時は、私は秋雨の様な悲しい泪が滾れた。

實に明治四十年の秋九月葬儀の日は、其の秋雨蕭々の裏淋しい朝であつたのである。

私は、綱島氏が天の神を見、宇宙に充實する和煦の光明を認識して、此世に遺されたる數卷の著述で以て、春風春光よりも美麗なうらゝかな光明を、菜種の花のやう現世に蒔いて逝かれた、其の眞個偉大な事業を讃嘆したい。

感想數刻、墓を立去るの時に、私の眼に偶と觸れた薄紅色は、其れは緑の葉蔭に優しくも咲いた二三輪の桃色椿であつた。で、その花瓣が唯一つ意ありげに、清い梁川子の墓石の上に落ちてゐた。

嗟、雜司ヶ谷の平靜なる墓地に、永久に眠れる我が綱島氏の上に盡きる事なき光榮はあれ。



陽春四月の花も散つて、春も徂きかるゝ、今月今日！  
私は曠々した大天地の間に、例に依つて地獄の火の如な熱烈な煩悶を連続して居る。

東京印象記 終

明治四十四年四月二十一日印刷  
明治四十四年四月二十五日發行

金七拾五錢

著者	兒玉花外
發行者	東京市麹町區平河町五丁目五番地 金尾種次郎
發行所	大阪府東區北渡邊町八十九番屋敷 杉本要郎
印刷者	東京市麹町區西寺町一丁目四番地 中村彌三郎
印刷所	東京市麹町區西寺町一丁目四番地 三舍

著作權 所有

發兌元

發兌元

東京市麴町區平河町五丁目五番地 金尾文淵堂  
(電話番町 二〇九三番)  
(振替東京 三八一七番)

大阪府東區北渡邊町八十番屋敷 杉本梁江堂  
(電話東京 二七四五番)  
(振替東京 二八三三番)

20022

78



金尾文淵堂圖書要覽

井上哲次郎 蟹江義丸	日本倫理彙編 十冊 金拾五圓 小包七拾二錢	敦煌發掘 柳公權金剛經 卅六葉 金五圓 小包料拾貳錢	二條基弘 東久世通禧 天覽 台覽 孔子之聖訓 一冊 金八拾錢 郵稅六錢	赤司繁太郎 基督教聖典 一冊 金壹圓 小包料八錢	佐野天聲 イエスキリスト 一冊 金壹圓五拾錢 小包料八錢	小田賴造 トルス トイ 簡易聖書 一冊 金六拾五錢 郵稅六錢	長谷川二葉亭 浮草 一冊 金壹圓貳拾錢 小包料拾貳錢	內田魯庵 イカモノ 一冊 金八拾五錢 郵稅八錢
---------------	--------------------------------	--	--	--------------------------------------	--	--	--	-------------------------------------

金尾文淵堂圖書要覽

河東碧梧桐 一日三千里 一冊 金貳圓五拾錢 小包料拾貳錢	與謝野晶子 春泥集 一冊 金壹圓 小包料八錢	正岡子規 子規短冊集 一冊 金壹圓 小包料八錢	廣津柳浪 人 一冊 金壹圓七拾錢 小包料拾貳錢	綠園生 双之下 一冊 金七拾五錢 郵稅八錢	同 木村長門守 一冊 金七拾五錢 郵稅八錢	大町桂月 筆草 一冊 金五拾錢 郵稅四錢	京都大學內 京都文學會 雜誌 藝文 一日 一冊 金貳拾錢 郵稅一錢五厘
--	------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	----------------------------------	--

7814



金尾文淵堂圖書要覽

教祖傳記叢書 天覽 愚禿親鸞 一冊 金壹圓五拾錢  
 須藤 光暉 台覽 小包料拾貳錢

教祖傳記叢書 天覽 空 海 一冊 金 貳 圓  
 須藤 光暉 台覽 小包料拾貳錢

教祖傳記叢書 天覽 法然上人 一冊 金 貳 圓  
 須藤 光暉 台覽 小包料拾貳錢

右は國寶其他の珍寶筆蹟遺跡本山真景等無數の繪畫を以て飾り加ふるに  
 東西兩本願寺、知恩院、高野、東寺、光明寺、増上寺等各法主の題辭を

以てしたる通俗的傳記にして實に空前の美本也、本書の讀者諸君の是非  
 一覽を希ふ所内容見本は往復端書を以て申込まれれば早速贈呈すべし

木下 尚江 法然と親鸞 一冊 金五拾錢  
 郵稅 六錢

蒲原有明 畿内見物 京都の卷 一冊 特價壹圓五拾錢  
 高安月菫 著 小包料拾貳錢

薄田泣菫 著 畿内見物 大和の卷 一冊 特價壹圓五拾錢  
 與謝野晶子 著 小包料拾貳錢  
 淺井弘忠 著  
 中澤弘光



7814
